
東方泉遊録 ~ autumn hot spring ! ~

夜斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方泉遊録 ～autumn hot spring～

【Nコード】

N1252X

【作者名】

夜斗

【あらすじ】

ひよんなことから幻想郷へと誘われた温泉旅館の少年、草津水織。紆余曲折を経て、何故か彼は秋を司る姉妹の神様と共に銭湯を経営することになってしまった!?

戸惑う少年と、憂い嘆く秋の姉妹。

そんな三人の出会いを果たしてどんな物語を紡ぐのか。

始まりは、とある少女の小さな戯言だった……

オリジナルキャラ+東方キャラのお話。

苦手な人はご遠慮ください。

序章 それは小さな戯言から（前書き）

このお話は「東方project」を題材とした二次創作です。
作者による独自設定や偏見、解釈等が多々含まれております。
それらが苦手な方はすぐに「戻る」をクリックしてください。

序章 それは小さな戯言から

「幻想郷に銭湯とかあれば便利よね」

それは秋も深まり、北に望む妖怪の山全体が朱色に染まり始めた頃。

博麗神社の縁側に腰掛けながら八雲紫やくもむかりは何となしにそう呟いた。

「……はあ？ いきなり何を言ってるの」

今まさに湯のみに口をつけようとしていた博麗神社の巫女、博麗はくれ霊夢は紫の言葉にあからさまな嫌悪の表情を浮かべながら半眼で彼女を睨んだ。

紫はほら、と指を立てながら続ける。

「温泉探すのって大変でしょう？ 地面を調査して、それから掘って汲み上げなきゃいけないもの」

「いや、ずいぶん前に地霊と一緒に間欠泉が湧いたじゃないの。温泉に入りたければあその温泉でいいでしょ」

「あれ一個じゃつまらないじゃない。知らないの？ 外の世界にはいろんな種類の温泉を集めた、スーパー銭湯だなんてモノもあるのよ」

「温泉……ねえ。別に嫌いじゃないけど、自分で掘ろうとは思わないわね」

湯のみの茶をすすって霊夢が一息つく。……とは言ったものの、決して悪い話ではないと思った。

度々起こる異変や宴会の準備、そして博麗神社の巫女としての辛く厳しい活動の日々（自称）で疲れ切った体や心を癒すに、銭湯や

温泉はちょうどいいかもしれない。

前回は結局地霊のせいで賽銭獲得には繋がらなかったが、人為的に作られた銭湯となれば危険もないし、案外容易いのではないだろうか。

神社のすぐ近くに作って『博麗の湯』だなんてちよつと気取った名前にして、ついでにお饅頭とかお煎餅とか作って売ればかなりの利益になるのでは？ いやいや、むしろ神社の賽銭よりも断然収入が上に決まっている。いつそ巫女を辞めて銭湯を切り盛りするのも悪くは

と、あれこれと考えを巡らせていると紫のジト目にギロリと睨まれた。

「……今、何か不純な意思を感じたわ」

「失礼な。自分の将来を本気で真剣に悩んだだけよ」

「とどのつまり、貴女は銭湯の案については賛成ね？」

紫の突然の案に霊夢は少々引つ掛かりを感じたが、首を傾げ思考した後渋々とうなずいた。

すると紫は立ち上がり、そのままスツと右手を水平に薙いで“すき間”を開いた。

「ふふふ。なら、さっそく専門の人を探しに行かないとね」

「なら妖怪の山の河童でいいんじゃないかしら？ アイツなら機械に強みたいだし、そういうコトに精通してそうじゃない」

「何言ってるのよ霊夢。ここの住人じゃ銭湯なんて文化を知ってる人間や妖怪だなんていないわ」

「はあ？ 文化も何も、そんなの紫が直接説明すればいいじゃないの」

「それじゃつまらないでしょ」

今度は霊夢がジト目で紫を睨む。

何がつまらないんだかさっぱりわからない。ついでに紫の言いたいこともイマイチわからない。

その見かけどおりの胡散臭い言葉に霊夢が怪訝そうに顔をしかめていると、対照的に紫は悪戯っぽく口をつり上げ軽く笑みを浮かべた。

それは、何か善からぬ事を企むような顔だった。

「いつそ、外の世界から誰か落ちてくればいいのにねえ……」

「……ちよつとまさかアンタ……あッ！」

紫の言葉の真意に気づいた霊夢が手を伸ばしたとき、既に紫の姿は“すき間”と共に忽然と消えていた。

序章 それは小さな戯言から（後書き）

お待たせしました。

東方二次創作シリーズ新作『東方泉遊録』 autumn hot
spring!」がスタートです。

相変わらずあやふやな知識ですけど、その時はご指摘よろしくです；
早速怪しいけど……

序章の間はとりあえず1日1話でいきます。

それと、今作では1話1話のクオリティ向上のため少しだけ更新速度をゆっくりにします。

だいたい、3日に1話ぐらいを目標に頑張っていくつもりですが、調子が良ければ1日1話に戻ったりするかもですw
つまりは気分次第；

そして今回の主人公は男の子、ヒロインは秋姉妹です。

え？ どっちがメインかって？

それはまあ……お楽しみに。

では、新作をこれからまたよろしくお願いします。

今日は短くてすみません……；

静「私たち」

穰「まだ出てないよ!？」

夜「悪いが、しばらく出番はないと思え」

第一話 旅館『暁の湯』

「こらあ！ 水織、待ちなさいッ！」

「はッ！ 姉貴に捕まるわけねーだろが！」

草津水織は背後より迫りくる姉の脅威から逃れるため、磨き立ての長い廊下を全力疾走していた。

勢いをそのまま角を曲がり、階段を二段飛ばしで駆け降りロビーを目指し突き進み、突き当たった角を右に曲がるうとした瞬間、突然目の前に人影が現れた。

「きゃッ！」

「うおわッ！？」

顔面に何か柔らかいものと正面衝突し情けなく後ろに倒れてお尻を打ちつけてしまった。

痛みに顔をしかめながら水織はぶつかった何かの方へと視線を向ける。

「あつたた……だ、誰だよこんなトコでポケットとしてるのは……って！？」

水織が顔を上げると、目の前には黒のカーディガンに身を包んだ女性が同じように尻もちをついていた。

その女性の姿を視認した途端、水織の胸の鼓動が急激に早鐘を打つ。

女性はゆつくりと立ち上がると呆然とする水織に優しく手を差し伸べてくれた。

「ごめんね。怪我してない？」

「は、はい！　だ、ただ大丈夫です！」

大袈裟に声を張り上げ立ち上がると、女性はクスリと微笑を漏らした。

漆のように艶やかで長い黒髪、雑誌のモデルに負けないスラリとしたプロポーションに清楚で穏やかな容姿。

この温泉旅館『暁の湯』の客の一人であり、水織が今最も憧れる女性。

「は、葉月さんッ！？　ってことは今の感触……じゃなくてッ！

あの、怪我とかしてないですか！？」

時雨葉月（ときりはづる）は一瞬キョトンとした顔になって、それからもう一度微笑みかけ狼狽（うろた）える水織の頭にポンと手を置いた。

「うん。私は大丈夫。でも、旅館の中で走ったら危ないんじゃない？」

「す、すみません。凶悪な姉から逃げてる真っ最中で」

「焰佳さん？　だったらほら、早く逃げないと」

「え？」

葉月が水織の後ろをちょんちょんと指差すと、鬼の形相に引けを取らない和服姿の姉が立っていた。

両手を組んで獣のように瞳をぎらつかす、それはまさに水織を喰らおうと立ちはだかる凶暴な鬼そのものだった。

「水織……覚悟はいいかい」

「ば、バカ！？　この旅館の若女将がお客様の前でそんな態度を取る気かよ！？」

咄嗟に後ろの葉月を指差し水織が叫ぶ。

姉はこの旅館の若女将、接客が命である旅館の女将がお客の前でそんな不作法な真似はしないはず。

そう高を括った水織に反し、姉はニツコリと営業スマイルなんぞ作って、

「葉月さん、ちょっとだけいいかな？」

「ふふ、どうぞ？」

「たった今そのお客様から許可が下りたわ」

その間約二秒弱。

バキバキと満面の笑顔で指を鳴らす姉の姿に水織は戦慄した。

「ぐツ……！ 女つ気が無い上に汚い、そしておまけに胸は断崖絶壁ときた。そんなんじゃ一生嫁の貰い手がないっての！」

「んな……ツ！ だ、誰が断崖絶壁だ！？ てか関係ないだろ！

あ、何処行く！？」

「姉貴もちつたあ葉月さんを見習えつての！ じゃあな！」

姉の一瞬の間隙について水織が飛び出し、しっかりと捨て台詞を吐いてからロビーを出ていく。

後ろ姿を追いかけようと手を伸ばそうとして止め、草津くさつえんか焔佳は大きくため息をついた。

「ああもう！ また逃げられたよ………つたく」

「あつはは。相変わらず元気な弟さんだ。焔佳さんがちょっと羨ましいよ」

そんな葉月の言葉に焔佳は半眼で答えた。

「……あんなスケベでどうしようもない弟が？」
「そうなの？ その割にはずいぶんと楽しそうだったけど？」

葉月の言葉に焔佳の顔がわかりやすく、しかし一瞬だけ赤くなる。

「そ、そんなコトないさ。口の減らない弟に毎日手を焼かされても
ううんざり」

「ふふ。どうせなら写真撮っちゃえばよかったかな」

そう言うと、葉月はウエストポーチから小さなデジタルカメラを
取り出した。

葉月のカメラの中にはこの旅館の裏手にある赤月山で撮影した自
然風景が収められている。

カメラを手にした葉月を見て、思い出したように焔佳は言った。

「そういえば葉月さん写真家目指してるって言ってたね。調子はど
うなのさ」

「うん、いい感じだよ。流石おじいちゃんが惚れこんだ場所って感
じ」

「天高さん……か。どんな人だったんだろうな。うちの爺ちゃんと
友達だったってのは聞いたけどさ」

焔佳と水織の祖父にあたる草津委泉^{いせん}は、葉月の祖父である時雨天^{しぐれあま}
高^{たか}と友人だったらしい。

この温泉旅館『暁の湯』は、標高約三千メートルの赤月山の麓に
位置している小さいながらも古風で立派な旅館。

委泉は生前、この赤月山の景観に心底惚れこみ全財産をつぎ込ん
でこの旅館を作り上げたそうだ。

そして旅館を経営している最中、赤月山の風景を撮影に来ていた

天高と出会い親睦を深めていたらしい。

「本当に綺麗な山だよ。四季をハッキリと感じさせてくれるし、何より紅葉もみじがとっても美しいの」

「……紅葉こうようは秋の神様の贈り物プレゼント」
「え？」

焰佳は窓から見える、燃え盛る焰のように真っ赤な山の斜面を眺めながら言った。

「枯れ木の山を見たって味気ないだろ？ 人に恋する秋の神様は、想い焦がれた人間のために何か出来ないかって考えて山を紅く染めたのさ。それこそ、恋する自分の頼みたいに真っ赤にね」

「へえ……素敵なお話だね」

うんうんと真摯に感心するように頷く葉月を見て、焰佳は少しだけ意外そうな顔になった。

「……おや、そんな簡単に信じるのかい？ 葉月さんはもっとこう、現実的な人間なのかと思ってたよ」

「ロマンチックで素敵じゃない。私はそういうの、好きだよ」

「ふうん……」

それが女つ気ってヤツかね。

ぼそりと呟く焰佳の表情は真剣そのものだったが、それを葉月が見たかどうかはさておき。

「それで、今日は何をするんだい？ また山に行くのか？」

「そのつもりです。でも、その前にお風呂借りてもいいですか？」

「ああもちろん。今日の女風呂の朝一番は葉月さんってわけだ」

「えへへ。ちょっと得した気分です」

露店風呂はさつき掃除を終えたばかりでまだ誰も一番風呂を浴びていない。

この旅館の露店風呂は目の前に広がる紅葉が一番の名物で、焔佳はそれこそが日本一だと自負している。

……というより、今一番気になるのはそんな露店風呂の景観とかの話ではなく、焔佳の視線は無意識のうちに葉月の胸部に釘付けになっていた。

「……あ、あの、焔佳さん？」

「さ、参考までに訊きたいんだけどさ、葉月さん、その、いくつ？」

「え、えっと………」

訊かなきゃよかったと焔佳が後悔するには少し遅かった。
がっくりと頂垂れる焔佳に、不意に葉月が訊ねた。

「そういえば、水織君は何処に行ったんですか？」

「ごほ、んツ。み、水織のヤツなら多分、あの名も亡き神社に行ってるんじゃないかな」

「名も亡き神社……？」

焔佳はロビーの壁に掛けてあった地図を示し、現在地である旅館を指で指すとそのままグイッと東に動かす。

指が止まった場所には神社を示す小さなマークが森の中にポツンとあった。

「寂れ過ぎて誰にも忘れられて名前が亡くなったから名も亡き神社。昔はそれこそ何か大事な神様を祀ってたらしいけど、今じゃ誰も近寄らないボロい神社さ。夏になると若い衆が肝試しによく行くみた

いだけどさ」

「き、肝試し……」

「ごく、と葉月が唾を飲み込む音が聞こえたが焔佳は話を続ける。

「神社つつつても、大きくも小さくもない中途半端な鳥居の奥に小さな社がポツンとあるだけ。ご利益なんて当の昔に消えちまってると思うんだけど水織はよく行くんだよ。アタシと喧嘩して負けた時とかにさ」

「ふうん……ちょっと、行ってみようかな」

「ふふふ。確かに何にもないってのはホントだけど、実はちょいとした噂話があってね……」

急に焔佳の声のトーンが下がって思わず葉月がビクツツと体を震わす。

そんな葉月の反応を見てか、焔佳の顔がニンマリと少し意地悪そうに口の端をつり上がった。

「その神社、神隠しがあるそうだよ」

「神隠し……？ あ、の、突然人がいなくなっちゃうっていう、あの神隠し？」

不安げな顔の葉月、少しからかうつもりだったのだがその表情は本気で心配しているようだった。

「そうさ。ずっと前に婆ちゃんから聞いたんだけど、昔神社に行ったらお客さんが消えたって大騒ぎしたんだってさ」

「その人、どうなったの？」

「ふうん……どうだったかね。アタシは覚えてないや。小さい時、それこそ十にも満たない時に聞いた話だからね」

「そうですか……」

焰佳は軽く肩をすくめた。

「ま、そういう噂があったってだけさ。この現代であのバカが神隠しに遭うことなんかないよ」

「……でも、ますます行ってみたくなくなったかも」

「はぁ？」

今しがた怖がってなかったかい？　と言おうとしたが、葉月の横顔を見て口を噤んだ。

怖い話をして脅かしたはずなのに、今の葉月はどこか遠くを懐かしむような、それでいて少し寂しそうな顔をしていたからだ。

「……まさか、神隠しに遭いたいのかい？」

「え……？　あ、いや、その」

「ずいぶん変わった人だね。神隠しするのは、この世の何処でもない場所に連れて行かれてしまっつて話だよ？　現実逃避でもしたいのかい？」

「そ、そうじゃないんだけど……」

「……？」

イマイチ歯切れの悪い葉月を見て焰佳は少し眉をピクつかせる。

確かに葉月は真面目で大人しく良い子なのだが、少し遠慮がちでおどおどし過ぎる気もする。

強気な自分の性格のせいかな、焰佳はそんな葉月の態度がほんの少しだけ苦手だった。

「どっか行きたい場所でもあるのかい？　それこそ、神様の力でもないといけない場所か」

「そう……だね。神様なら、私の行きたい場所に連れて行ってくれるかも」

「何処さ？」

「それは……」

葉月の顔が、懐かしさと寂しさが入り混じったような複雑な表情になった。

「……幻想郷、かな」

「幻想郷……？」

それは、冗談か何かのつもりだったのだろうか。

でも冗談なら何故、葉月はそんなに寂しそうな顔をするのだろうか。

焰佳はその表情の真意が少しだけ気になったが、結局それ以上何も言わなかった。

第一話 旅館『暁の湯』（後書き）

主人公は少年、しかもちよいスケべらしい……？

そして何故かオレの脳内では水織君の声が朴？美さんボイス。

前作キャラの正体は紅葉記の主人公『時雨葉月』ちゃんでしたッ。

紅葉記から成長して今やぼんきゅっぼんの大学生となっております。

え？紅葉記で死んだって？

そ、そうだったっかなあ……？w

第二話は明日公開です。

第二話 名も亡き神社

水織の手には『魔法の手』が備わっている。

そんな突拍子もない話を祖父から聞いたのは今から十年ほど前、水織がまだ小学生にも満たないころだった。

「『魔法の手』……って何？」

幼い水織が小さな手の平を開いたり閉じたりしていると、祖父の委泉はカッカッカッと老人にしては妙に甲高く元気の良い声で笑った。

「魔法の手つちゆうもんはな、儂と同じ手つてことじゃよ」

「じーちゃんの手……？」

委泉の手の平に、自分の手を重ねる。

当然だが水織の手の平よりも委泉の手は何倍も大きい、しかし大きいだけでそれ以外の差異はない。

強いて言うなら少し皺があるとかそんな程度。

水織が不思議そうに首を傾げていると、委泉は再び大きな声で笑った。

「水織、お前さんもお風呂に入るじゃろ」

「うん、入るよ」

「儂はな、お風呂の温度や性質を触れただけでわかるんじゃよ」

「おんどや、せいしつ……？」

温度はともかく、流石に小学生にも満たない頭で温泉の泉質など理解できるわけもなく、水織の頭の上では疑問符が踊り出す。

委泉は再び大口を開けて高笑い。

「カツカツカ！ まあ、まだわからんかもな。でもそのうちわかるさ。俺の血を引く男衆はみんな『魔法の手』が備わるからの」

委泉の大きな手の平が、水織の小さな頭をわしづかみにしてくしゃくしゃと乱暴に撫でる。

「そのうち、水織の魔法の手が必要になる時が来るかもしれんおう。そうしたら手伝っておくれ」

「うん。わかった」

微笑む水織に、委泉は穏やかな表情で言葉を続けた。

「いつか、その手で誰かを幸せにするんじゃないよ。それが『魔法の手』を持つ人間の唯一の使命じゃからの」

「……？」

そう言って、委泉は少し儂げな笑みを浮かべて……

・
・
・

「
ッ」

気がつくと、ボロボロに朽ち果てた屋根の一部が視界の正面に飛び込んできた。

「そっか、俺昼寝してたんだっけ。ふわ……あ」

よ、と小さな掛け声と同時に勢いをつけて跳ね起きる。

いつも見慣れた光景をぐるりと眺めると、大きく腕を伸ばしてもう一度だらしなく欠伸をした。

今水織がいるのは、旅館からまっすぐ東に行ったところにある小さな神社、通称『名も亡き神社』。

ほとんど機能していないような道を抜けた森の中に、こじんまりと開けた空間にこれまたこじんまりとした社がぼつんと建っている。社正面へと続く道には塗料の剥がれかかった鳥居がいくつも連なつて並んでいて、見様によつては少し不気味だ。

子供がくぐるには少し大きくて、大人が通るには少し屈まなければならぬ何とも中途半端な鳥居の道を歩き、水織は少し体を動かしながら神社の正面を振り返る。

「……」

かつては何か偉大な神様を祀っていただろう社にそんな面影など微塵もなく、ただ力無く朽ち果てた哀れな廃墟と化していた。

昔の人は何を思い、ここで祈りや供物を捧げていたのだろうか。

「ま、いいや」

取水場まで行って水を一口飲むと、先刻の出来事でカツとなつていた体を少し冷やす。

……それは言うまでも無く葉月のことが原因だった。

「しかしまさか、葉月さんとぶつかるとは思わなかったなあ。あんな時顔に当たったのって、やっぱり、紛れもなく……ッ」

顔面に伝わった柔らかい感触が再び脳内で忠実に再現され、否が

応でも顔が真っ赤に染まる。

少なくともD、いやもしかしたらそれ以上……ゴクリ。

頭の中で妙な妄想が膨らんで、今自分は恐らくろくでもない顔をしているはずだろう。

首をブンブン振って雑念を払うと水織はしばしぼんやりと空を見上げた。

「いいよなあ葉月さん。美人で、優しくてスタイル良いしさあ……」

短気で乱暴な自分の姉とは大違い。

何かとあればちよっかい出してくるし小さなことでも口うるさく叱ってくる。

顔立ちはともかくとして、しかしそのスタイルはまな板なんて言葉じゃ温い、もはや絶壁だ。

絶壁は絶壁でも捕まる部分など全く存在しない断崖絶壁。

どうせなら葉月が姉になってくれればよかったのに。

そうすれば毎晩のお風呂が楽しみで仕方ないのだが……

と、ひとしきり思春期にありがちな妄想を浮かべて呆けて、それから水織は神社の端の方へと歩いていく。

そこはちよつど見晴らしの良い崖となっていてこの町のほとんどを一望することが出来た。

実家であり、この辺りで（姉曰く）一番立派な旅館。

そこから南に伸びる道を往けば麓の温泉街で、そこから町の中心部に続いて一日に数回しか電車が来ない小さな駅が見える。

今ちよつど電車が走り出しているようだ。

水織の記憶が正しければ、あの電車が出発するのは午前十一時十六分のはずだから、恐らく今はそんな時刻なのだろう。

「でも、これからどうしようか。何にも持ってきてないし、特にすることもないし」

面倒な仕事を押し付けられそうになってそのまま逃げてきたせいで暇潰しになるような物は一切持っていなかった。

試しにジャンパーのポケットに手をつ突っ込むが……案の定何も入っていない。

旅館に戻れば買ったばかりのゲームや漫画などがあるのだが、姉から逃げているというのに戻る理由も無く、仕方なく社の縁側に腰をかけてボーっとすることに決めた。

今日は学校は休みだし、宿題も無い。

ちなみに水織は中学三年生。

本来なら進路やら何やらで悩むのが常なのだが、水織は実家の旅館を継ぐという話になっているので進路の話はとりあえず考えなくていいことになっている。

……あくまで、とりあえず、だが。

「オレに旅館継がせるとか、爺ちゃんは何を考えてたんだろな……
……ん？」

取水所を出てもう一度縁側に戻ろうとして、不意に何者かの気配を感じ足を止める。

周囲に意識を向け全身を使って探る。

ガサ、と左の方から落ち葉を踏みしめるような音がした。

物音はちょうど水織が昼寝していた縁側の反対方向からだ。

「……ここにはオレしかいないはずなのに、誰だ？」

寂れ過ぎて、年寄りですら滅多に来ないこの場所にいったい誰が来るというのだろうか。

観光客が道を間違えてここに来たのか、それとも昼間っから酔っぱらったアホでも来たのか。

……それとも、噂に聞く神隠しの犯人だろうか？

「……………」

息を潜め、なるべく音を立てないよう足を忍ばせ反対側へと向かう。

近づくにつれガサガサと落ち葉を踏む音と、それから何か呟き声のようなものが聞こえてきた。

「ないわあ。何処にいつちゃったのかしら……………」

「…………女の人の、声？」

甘ったるく妖艶な呟き、しかしそれは水織が全く聞いたことのない声だった。

この町はそう大きな町ではない、むしろどちらかと言えば寂れた田舎町で数少ない町人のほとんどの顔や声なんかはだいたい記憶している。

しかし、その声は水織の記憶には無い声だった。

恐る恐る首だけ覗かせ、目の前の光景に水織は思わず息を呑んだ。

「…………ツ！？」

美人、それも今まで見たことも無いようなとんでもない美人が、その綺麗な顔を悔しそうに歪めながら落ち葉を両手でかき分け、何かを探しているかのように乱雑に払いのけていた。

着物とローブを足して二で割ったようゆったりとした出で立ちに、腰の辺りまで伸びる艶やかな金の髪。

一心不乱に何かを探すその瞳は紫紺に染まっていて、全身から妖しげな魅力が漂っている。

今まで見たことも無い人でしかもとびきりの美人、いや美少女……

…か？

妖艶なその横顔からはハッキリと年齢をうかがい知ることが出来なかった。

そんな美人を目の前にして、水織の手が微かに汗ばんで変な緊張感が全身を包む。

いったい何処の誰なのだろうか。

旅館の客？ いや、ここ最近のお客さんにあんな美人は来ていない。というか、葉月さんより美人なんじゃ……いやいや、それはない。だけど負けず劣らずな美人であることは間違いなく……

「……何方？^{どなた}」

「うう、わ！？」

そんな水織の熱い視線に気づかない訳も無く、紫紺の瞳をした美人にあっさり見つかってしまった。

途端に全身に電撃が走り自然体を強ばらせてしまう。

「あら、ビツクリさせちゃったかしら？」

「い、いえ！ 何でも、ない、です！」

緊張のせいか上ずった片言の言葉で、しかも機械的な返事しか出来なかったが、慌てふためく水織を見て美人はクスリと笑ってくれた。

水織の体がますます硬直する。

「ごめんなさいね。落とし物を探してる最中で……」

「お、落とし物？」

「ハンカチなの。すごく気に入ってるものなんだけど見つからなくて……」

たかがハンカチを落としただけだというのに、彼女の表情は心底困った様子だった。

美人がそんな困った表情をして困っている。ならばここで水織が取るべき行動はただ一つ。

「ど、どんなハンカチなんですか？」

水織の言葉に、彼女は一瞬驚いたような表情を浮かべ、それから薄っすらと小さな笑みを見せた。

刹那見せたその表情は、まさにしたり顔とでも言うべきか。

「手伝ってくれるの？ ありがとう。優しいのね」

「い、いえ！ これぐらいは、別に……！」

火照る顔を見せまいとくりと回れ右して落ち葉を漁る。

一心不乱にハンカチを探す水織の背中を、彼女は品定めでもするかのようにじっと見つめていた。

「レースのハンカチなの。ポケットから出したら、風に舞って何処かへ消えてしまっ」

「れ、レースのハンカチ……」

背筋がゾクリとするほどの甘い声を耳にするなど、十五年の人生で初めての体験だった。

火照って体が熱いのか、それとも声に惑わされて熱いのか、もはや区別がつかないまま落ち葉をひっきりなしにかき分ける。

とにかく体を動かしていないと、どうにかなってしまいそうだったからだ。

やがて落ち葉を漁る水織の指先に、何か滑らかな感触が伝わった。

「あつた！ ありましたよ！」

バツと手を引っこ抜いて握りしめたレースの白いハンカチを彼女に見せると、パンと軽く両手を叩き嬉しそうに微笑んだ。

「それよそれ！ ありがとう助かったわあ」

「い、いえ！ これぐらい、お安い御用で……へへッ」

軽く手ではたいてからハンカチを差し出す。と、何故か彼女の手がハンカチではなく水織の手首をキュツと握りしめた。

予想外の出来事に思わず目が丸くなり、水織の全身が再びカツと火照り出す。

彼女の妖艶な面がグツとズームして、桜色の唇が魔法の言葉でも囁くように小さく開く。

「わ、わわわ……!?!」

「ふふ。何をそんなに恐がっているのかしら？」

「こ。恐がってるんじゃないかと、えと、これは」

「せっかくハンカチを見つけてくださっただけですもの。何かお礼をしなくちゃ」

「お、御礼!?!」

ならばどうして手首を握りしめるのか。

彼女の滑らかな手は振りほどこうにも頑として動かない。

……いや、別に振りほどく気などさらさらないのだが、というか御礼とはいったい何なのだろうか。

十五年で培われた脳がフル回転して彼女の言う“御礼”を全力でイメージするが……あまりにピンクな想像をしたせいか一瞬でオーバーヒートしてしまった。

「お、おおおおお御礼とか、結構です！ あの、気持ちだけで……いや、違う！ ここで断るのは男が廃る……でもなくて、やっぱり遠慮しま……んのあああああ！？」

「心の中身が外に出ちゃってるわよ。ふふ、可愛いわねえ」

破壊力満点の言葉が水織に直撃。

水織の精神はあっという間にバランスを崩し、頭の中の下心と良心がミキサーに突っ込まれたかのようにごちゃ混ぜになっていく。

そんな少年の心理など露知らず（いや、そうと知りながら楽しんでるように見えるが……）手首を掴んでいないもう片方の手でスツとその場で真一文字に切り裂くように薙いだ。

突如空間が裂け、その奥に不可思議な空間が映る。

それはさながら、空間に出来た“すき間”とも言うべき存在。

水織の両目が瞬時に見開かれ、今の今まで全身を包んでいた熱気が嘘のように消え失せる。

「な……ツ！？ なんだ、これ……！？」

目の前で起こる、常軌を逸した謎の現象に水織の体が小刻みに震える。

何だこれは。

どうして目の前に裂け目が、この体を這うような視線は何だ、どうして彼女は、それを平然とやってのけるんだ。

「御礼は、貴方を素敵な世界へご招待、何てのはどうかしら」

どうして彼女は、こんなにも愉しそうな表情をしているんだ。

あれこれ思案を巡らす水織の意識が、まるで真上から鉛で出来た布を被せられたかのように突然重くなる。

意識が闇の奥底に引きずり込まれるのにさほどの時間は掛からな

かった。

意識を失う刹那、水織が記憶していたのは彼女の綺麗な笑顔と、すき間の向こうで跋扈する無数の瞳だけだった。

・
・
・

水織の姿が忽然と消えた名も亡き神社。

彼女、八雲紫はひどく愉しそうに微笑みながら、神社の壁にもたれ掛かり頭上の紅葉の葉を眺めていた。

「……少し、色付きが薄いわね」

ひらり、ひらりと紫の膝下に落ちる紅葉の葉は、紅にやや近い朱色といった色をしていた。

それはただ単に落ちた葉が紅葉を迎えていなかったただけなのか。それとも、何か別の要因があるのか。

「ま、私の仕事じゃないけど……あら」

もう一度すき間を開こうとして手を薙ごうとした瞬間、何故か紫の表情がまたも愉しそうな笑みを浮かべた。

第二話 名も亡き神社（後書き）

序章、終了。

明日から第一章が始まります。

早速の評価ポイント、お気に入り登録ありがとうございます。

とはいえ、全然お話進んでないのに評価してもらっちゃっていいんですかね……；

第三話 少年、姉妹と邂逅す

「幻想郷、北端に位置する妖怪の山。

文字通り数多の妖怪が住まうこの山の奥地で、秋静葉は一人紅葉を手にしたため息をついていた。

「ううん……やっぱり、ほんの少しだけ色が薄いかなあ」

手にしていた紅葉は確かに赤く色づいているのだが、静葉は憂鬱そうに嘆息した。

紅葉を象った髪飾りに、燃えるように赤いドレススカート。今しがた手にした紅葉の木を見上げ少女は再び嘆息する。

「私たちの信仰が薄くなっているんだよお姉ちゃん」
「……穰子」

静葉が振り返ると、果物の入ったカゴを抱えた妹の姿があった。

「私たちももつと頑張ろうよ。守矢の神社のことまではいかないけど信仰を集めなきゃ」

「だけど、私たちがってそんなに大きな神様じゃないんだよ？ 頑張るって言っても難しいと思う」

「それはまあ、そうなんだけど……」

カゴを小脇に抱えたまま穰子が器用に腕を組む。

確かに静葉や穰子は守矢の神社ほどの高位な神というわけではなかった。

秋姉妹と呼び称されながら、しかし二人は秋全体を司る神というわけではない。

姉の静葉は紅葉を、穰子は豊穰をそれぞれ司っている。

他にこれといった力無しに信仰を得るといっものは聊かこたも厳しいものがあるかもしれない。

何か、妙案はないだろうか。

二人がうんうん唸りながら思案していると、先に静葉の方からアイディアを思いついた。

「そつだ。博麗の巫女さんに何か助言してもらったらどうかな」

静葉の妙案に何故か穰子の表情が曇り難色を示す。

やや顔を引きつらせながら首を振って、

「だ、ダメだよお姉ちゃん。あの巫女は私を食べようとした凶暴な巫女で……」

「え？ でも、幻想郷の異変を解決してるのってあの人だよね？」

「お姉ちゃんも前に戦ったでしょ？ 覚えてないの？」

「ううん……覚えてるような、覚えていないような」

曖昧な姉の言葉に穰子がため息。

しかし、守矢の神社に相談に行くよりかは博麗神社の方が数段行きやすいかとも思った。

守矢神社は二柱の強力な神がいるせいとか、少し空気が張り詰めていて行っても自分たちが萎縮してしまうような気もする。

神を祀っているのかいないのか、少なくとも博麗神社ではそんな緊張感を感じたことが無い。

どちらかといえば博麗神社の方が気軽に入って行けると思う。

巫女がだらしないう噂は……この際気にしない。

「……でも、あんまりアテにならないんじゃないかなあ」

「その時はその時でいいよ」

「もう。お姉ちゃんはマイペースだなあ。結構深刻な問題なのに」
「じゃあ早速行こうよ」

トコトコと山の斜面を降りようとする姉の後ろ姿を穰子が追いかける。

どうせ行くなら飛んで行こうよ、と言いかけた瞬間静葉の動きが穰子の目の前でピタリと止まり、思わず背中に顔面からぶつかってしまった。

「あたツ！ お、お姉ちゃん何で急に止まって」

「……………あそこ、誰か倒れてる」

「え？」

静葉が指差す方向、ちょうど木々の合間にぽっかりと出来た空間に少年が一人大の字で倒れていた。

「た、大変だ！ 行こ、お姉ちゃん」

「うん！」

二人が駆け寄り、倒れていた少年の頭を静葉が膝で枕する。
意識があるのかないのか、少年は時折小さなうめき声を上げていた。

「穰子、川に行ってお水持ってきて」

「わ、わかった」

存外冷静な姉の言葉に驚きつつも穰子が駆け出す。

静葉は瞳を閉じ軽く息を吸うと少年の額にそっと手を当てた。

「……………あんまし、効果があるかはわからないけど」

自分の力で簡単な応急処置を施すと少年のうめき声が僅かだが安らかな呼吸に戻る。

ホッと安堵した直後、穰子が自分の帽子を器にして水を汲んできてくれた。

なるべく苦にならないよう、少しずつゆっくりと水を流し込む。

少年の体が微かに震えたかと思うと、その瞼がうつすらと開いた。

「こ、こ……は」

「気がついたよ、お姉ちゃん！」

「まだ無理しないで。ほら、もう一口水を」

少年は促されるまま帽子の水を飲み干す。

それからすぐに意識が回復して、少年は自分で体を起こせるようにまで回復した。

「キミ、大丈夫？」

「あ、ああ何とか……よくわからないけど、助けてもらったみたいだな。ありがとう」

「いいのよ。それより、キミ何処から来たの？」

「は……？ 何処、からって……」

穰子の質問に少年の顔が歪み、それから突然周囲に視線を向けた。

右も、左も、少年にとっては見覚えのない景色。

少年の顔は、まるで見ず知らずの土地に迷い込んだ子供のような好奇心と戸惑いに溢れた複雑な表情だった。

「ここ何処だ？ オレ、確か神社で美人な人を助けて、それで……」

「神社？ この辺に神社なんてないけど……キミ、もしかして外の世界の人なの？」

「外の世界……だって？」

穰子の言葉に少年は驚き突拍子もなく叫んでしまった。

その言い方では、まるで自分が別の世界から現れたような言い方ではないか。

「こ、ここは何処だ、教えてくれないか」

「ここは妖怪の山だよ」

静葉が素直に答えるのと同時に少年の顔が曇る。

「……今、何て言った？」

「だから、妖怪の山。ここは幻想郷の北端に位置する妖怪の山だよ」

「げ、げんそうきょう？ ようかいの……やま？」

彼女たちの言っていることがチンプンカンプンで、頭の中がぐらりと揺れたような気がした。

青ざめる少年の顔を見て、静葉と穰子は顔を見合わせた。

「……私たちが事情を説明しても、わかり辛いかもしれないね」

「うん。外から来た人って、確か博麗神社に連れて行けばいいんだっけ？」

「二重の意味で行く理由が出来ちゃったってわけか。まあ放っておくわけにもいかないから仕方ないか」

乾いた帽子を目深に被ると、穰子は立ち上がり少年に手を差し伸べた。

「ほら、男の子ならさっさと立つ！ これから博麗神社って所に連れて行ってあげるから」

「はくれない、じんじゃ……?」

「詳しいことは向こうでお話するよ。ここだと色々と危ないし……」

あ、そうだ。キミ、名前は?」

「草津水織……だ。君たちは? 恩人の名前ぐらい聞いておきたいんだけど」

「私は静葉、秋静葉っていうの」

「私は妹の穰子。さ、まずは博麗神社に向かいましょうか」

そして二人は山の斜面を下りはじめ、水織もそれに続く形で後を追った。

・
・
・

二人の後を追ってたどり着いたのは、小高い崖の上にちゃんと建つ神社だった。

鳥居をくぐった正面に、ほどほどの大きさの社が建ち、横には物置と思しき小さな蔵がある。

「ここが、博麗神社ってところか」

「まずは巫女さんを探さないか。あ、その前にえつと……」

「お姉ちゃん、何してるの?」

社正面の賽銭箱の前に立つ姉の姿に穰子が顔をしかめる。すると静葉は心底不思議そうな顔で振り返って、

「だって、神社に来たらお賽銭を入れるんだよ」

「……お姉ちゃん、この巫女の事全然知らないのかしら」

「む……お金なんて持ってたかな……」

「え……？」

すると水織も静葉の横に立って賽銭を入れようとしていた。
外の世界の人間だから巫女の噂など微塵も知らないだろうが、穰子が驚いたのはその事ではない。

「水織、あなたお賽銭入れるの？」

「当たり前だろ。神社に来たら必ず五円玉を投げろって爺ちゃんに教わったんだ」

ズボンのポケットから奇跡的に飛び出した五円玉を握りしめるとひよいと放り投げる。

木製の賽銭箱の入り口で二度三度バウンドしてから五円玉がコトン、と寂しい音を立てて吸い込まれていった。

同じく静葉も賽銭を投げ入れ鈴を鳴らす。

「……………」

単純に驚いた。

外の世界でも、賽銭を投げるという習慣がちゃんと残っていたことに。

いつだか聞いた話では現世の人間はほとんどこごういったことをしないとの話だったのだが……

「いいわねえ賽銭の響き。心が躍るってもんよ」

不意に声が響き視線を向けると、赤と白の巫女服に身を包んだ少女がのんびりとした歩調で現れた。

黒髪を大きな赤いリボンで結わえた、巫女というには少しハイカラな格好だった。

巫女服も腋全開で何とも奇妙なファッションセンスである。

「しかしま、妙な来客ねえ。その男の子はともかく、焼き芋姉妹に用は無いわよ」

「だ、誰が焼き芋姉妹だ!？」

「焼き芋……?」

そういえば、さっきから焼き芋のような甘い香りがするようないないような。

巫女服の少女は水織に近づくと、訝しげな視線で水織の全身をくまなく観察してきた。

「……どう見てもアンタが外の人間よね。私は博麗^{はくれいれいむ}霊夢。見ての通りの素敵な巫女よ」

「素敵な巫女……」

何がどう素敵なのかさっぱりわからない。

パツと見清楚な容姿で可愛らしいのだが、神社で見た美人や葉月さんには圧倒的に劣る。

申し訳ないが、胸が足りない。

すると霊夢はくるりと踵を返しちよいちよいと手招き。

「立ち話つても何だしこっちへいらっしやいよ。お茶と菓子ぐらいは出すわ」

「だって。ほら、穰子も行こ」

「あの、霊夢さん。私たちも話が」

「あーはいはい。まとめて聞いてあげるからさっさと来なさい」

そして案内された神社の縁側で申し訳程度の茶菓子が用意される。湯のみの中の茶は薄い色をしていた。

一通りの説明を終えたころには、湯のみの茶はすっかり冷え切っていた。

「……つまり、ここはオレのいた世界じゃない、異世界ってことですか」

「ま、そんなところよ」

霊夢が冷めた湯のみをすすする。
にわかには信じられない現象。

自分の今の状況が理解できず、呆然と言葉を失くす水織。
異世界。

そんな言葉はゲームや漫画の話だけかと思っていたのに、いざ自分が巻き込まれるだなんて夢にも思わなかった。

「どうすれば、元の世界に戻れるんですか」

「結界を操ってる人に言っ頂戴。当の本人はまだ帰ってこないけど……」

「あら、呼んだかしら？」

不意に声が響き全員が一齐に振り向く。

聞き覚えのある声、それは水織が神社で出会ったあの妖艶な美女の声。

そして振り返ったその先に、紫紺の瞳の彼女はいた。

「あ、あなたは……!？」

「自己紹介がまだだったわね。八雲紫やくもむかりよ。お久しぶり、水織君」

クスリと微笑を漏らし、優雅に日傘をさす美女。

あの時見た愉しそうな表情でこちらを見つめている。

「どう？ 素敵な世界でしょう」

「素敵な世界って……！ 何で、オレをここに？」

「ん？ だって貴方退屈そうにしてたじゃない。だからこっちに誘ってあげたの」

「だ、誰もそんなこと頼んで……」

「彼はともかくとして、彼女たちは何？」

急に話が変わり視線が秋姉妹に注がれる。

集中する視線の中、口を開いたのは穰子だった。

「あ、あの！ 実は相談があつてここに来たんです」

「相談……？」

「いいわよ。私も協力してあげる。話してごらんなさいな」

「ちよつと紫！ 私はまだ何も……」

霊夢の制止を余所に紫が勝手に話を進めようとする。

紫、^{ゆかり}というのが彼女の名前らしい。

こんな状況だったが、水織はこっそりと心の中に刻み込んだ。

穰子が真剣な表情で霊夢と紫を交互に見据える。

「実は、私たち信仰が集まらなくて困っているんです。それで、どうにか信仰を集める良い手立てはないものかと助言を頂きたく、ここまで来たんです」

「信仰……？ そういふのは信仰に溢れた神社に相談しなさいよ。

私は関係ないわ」

「やっぱり……」

予想通りの言葉に穰子の肩ががっくりと落ちる。

静葉も、何処となく寂しそうな顔をしていた。

「じゃあこの件はお終いな。そういうのは守矢の神社にでも行ってきなよ」

「人の役に立てば、自ずと信仰が集まるんじゃないかしら」

霊夢の言葉を遮り紫が唐突に口を挟む。

姉妹の顔が同時に上がって紫に向き直った。

「人の役に、立てば？」

「そうよ。力とか無くても、身近な所で人を助けていればある種信仰に近いものを得られるんじゃないかしら」

「紫、まさかアンタ……！」

微笑む紫、顔を引きつらせる霊夢、そして不安と期待が降り混ざったような表情の秋姉妹。

そして、さつぱり状況が読めず取り残される水織。

一斉に集まる視線を浴び、紫は悠然とした態度で一步踏み出し口の端をつり上げる。

「貴方達、銭湯って知ってる？」

心の底からこの状況を楽しんでいる、紫はそんな笑みを浮かべていた。

第三話 少年、姉妹と邂逅す（後書き）

かなり強引な展開ですが気にしない。

そしてここで書き溜め分が終了。

明日からは少し更新頻度が落ちますのでご了承ください。

さて、これを上げ終わったらダークソウルだっぜ！

第四話 ゼロから始まる銭湯経営

「じつよ」

紫の案内でたどり着いた一行を向かえたのは今にも崩れ落ちてしまいそうなほどボロボロに朽ち果てた廃墟だった。

場所は妖怪の山の麓よりさらに南下した中途半端な場所で、少し先には村のようなものが見えた。

廃墟の大きさはかなりのもので小さなお屋敷といっても差し支えない大きさなのだが、その窓や戸は ひび割れていて屋根の瓦は所々剥がれ落ちたり穴が開いている部分もある。

幽霊屋敷、といった言葉が良く似合いそうだった。

「……これ、何ですか？」

穰子の至極シンプルな質問。

いきなり銭湯を知っているかと聞かれ、今度は意味もわからずこの廃墟に案内された。

何の説明も無しにここに連れてこられれば理解出来なくても不思議ではない。

「ふふ。なかなか趣のある建物だと思わない？ これは私が外の世界で偶然見つけた銭湯なの」

「銭湯って……」

どう鼻屑目に見ようと目の前の建物は廃墟である。

そして、まるで自分の家でも自慢するかのように得意気に胸を張る紫の姿に一同が沈黙。

それを無視して紫は言葉を続ける。

「これを直せば銭湯として再利用出来るでしょう？　そうすれば、たくさんの方がこの銭湯を利用してくれるわ」

「いや、これじゃ廃墟でしょ。こんなボロイまんまじゃ人なんか入らないで、逆に妖怪が棲みつくわよ」

「それは困るわ。私の銭湯なのに」

「アンタねえ……」

「それで、秋のお二人さん」

『は、はい！』

静葉と穰子が同時に返事して紫に向き直る。

「ここを貴方達で改修して、人々の癒しを提供できる銭湯として使えるようにしてみてもどうかしら」

「わ、私たちが」

「銭湯を……」

紫の笑顔に見つめられ、困惑する姉妹。

半眼で睨む霊夢、話についていけないので紫を凝視する水織。

「……ち、ちょっとだけ時間をください」

「どうぞ？　だけど、なるべく早くして頂戴ね」

許可をもらい穰子が静葉の手を引っ張って別の場所でしゃがみ込んで小さな会議。

「どうする？　せんとつ、っていつのをやって本当に信仰が手に入るのかなあ」

「わかんないけど……何だか、楽しそうじゃない？」

「ええ？　お姉ちゃん、本気で言ってるの？」

「本気だよ？ 銭湯って、どんなものなのか知らないけど」

「……でも、今のところ信仰に繋がりがりそうな手段ではあるのよね」

答えは出た。

静葉と穰子は立ち上がり紫に振り返ると二人で首肯してみせた。

「わ、わかりました。やります、やってみます！」

「うふふ。こうやって地道に頑張ればきっと信仰を集まるわ。頑張
ってね」

「……アンタら。こいつは妖怪よ？ こんな胡散臭い言葉を信じて
頑張るって本気で」

「ほ、本気です！」

声を荒げる穰子の剣幕に驚き霊夢の言葉が止まる。

「頑張らないと、いけないんです。でないと秋が、どんどん寂れて

……」

「……そう。なら、精々頑張りなさい。私はもう用もないし行
くわ」

「私も野暮用があるし、そろそろお暇するわね」

「ちよっと待ったああああ！？」

踵を返す霊夢、すき間を開く紫の手と足が止まる。

全員にすっかり忘れ去られていた水織が全力で叫び思いの丈をぶ
つける。

「お、オレはいったいどうしたらいいんだ！？ 元いた世界に帰り

たいつてのに、何の話題にも出ないじゃねーか！」

「ああ、忘れてたわ」

「忘れるな!？」

あまりの扱いの悪さに水織の怒り爆発。
霊夢はかなり面倒くさそうにため息をついた。

「しょうがないわねえ……私の神社にいらっしやい。すぐに元いた世界に帰してあげ」
「ちよつとお待ちなさい」

霊夢の後を追う水織の手を再び紫が掴む。
振り向いた瞬間、紫の顔が至近距離に近づいて思わず赤面してしまふ。

「な、何ですか」
「貴方、確か実家が温泉旅館を経営しているのよね」
「何でそれを知ってるんだ? ってか、それがどうかし……」
「どう? あの子たちと一緒に銭湯やらない?」
「は、はあ!？」

紫の言葉に水織が叫ぶ。
意味がわからない。
突然こんな場所へ落としておいて、今度は自分に銭湯をやれと?
あまりに身勝手かつ理不尽過ぎる言動に水織の堪忍袋が限界を迎えようとしたその瞬間、耳元に妖艶な囁き声が響く。

「ここの女の子、結構可愛いでしょう? もしも私みたいな可愛い子が毎日銭湯に行ったら……?」
「……ッ!」

何て事を言うんだこの人は。

それは思春期真っ只中の水織には効果抜群の恐るべき魔性の囁き。顔から全身までもを真っ赤にさせながら、下心と本心の混ざり合った苦悶の表情を浮かべた。

「……で、でも！ オレは全然関係ないんだしこんな訳のわからない世界にいられるか、オレは帰り……たい！ だがしかし、紫さんのような美女が毎日！ 毎日だと！？ 毎日銭湯に来て一風呂浴びてタオル一枚で牛乳飲んで……じゃない！ だからオレは無関係なんだ！ だから紫さんの入浴シーン何かに吊られるほど脆弱な人間であるはずがない！ 訳が無い！ でも帰らないと姉貴が葉月さんが心配して、だけお入浴シーン……ううああああ！？」

「紫、コイツは何なのホント」

「可愛いでしょ。心の中で思ったことを全部言っちゃうのよ？」

「世間一般ではそれをバカと言わないかしら」

悶絶する水織を見つめる紫の顔が心底楽しそうなのは言うまでもなく、しかしこのまま悶絶してもらっては埒が明かない。

紫はもう一度近づき、普通に言えばいいものをわざと水織の耳元で囁く。

「でも、知識はあるのでしょうか？ せつかく助けてもらったのなら、その恩に報いるべきではなくて？」

「た、助けてもらった恩って……」

水織の視線に姉妹が映る。

どこか不安げな表情をしている二人を見て、水織は脳裏で祖父の言葉を思い出す。

「……受けた恩は必ず返す。女の子だったら、三倍返し」

「あらあら。素敵な言葉ね」

「あの子たち、銭湯を知ってるのか？」

「さあ？ どうかしら」

「……………」

つまり彼女たちは銭湯を知らない、と。

彼女たちは、この世界で最初にお世話になった姉妹だ。

このまま助けられっぱなしで帰ってしまったら後ろ髪引かれるような気持ちになるだろうし、何より天国の祖父に怒られそうである。

「……………わかったよ。あの子たちを手伝う。それが、紫さんの狙いなんだろ」

「あら、狙いだなんてそんな悪者みたいに言わないで頂戴な」

しかしこの至近距離でその笑顔は反則だと思う。

水織は火照る顔を反らしたため息について、それから姉妹の元へ向かった。

突然水織が近づいてきたせいか二人の表情が微かに揺れる。

「あ、あの……………？」

「助けてもらったお礼がてら、君たちと協力することになった。よろしくな」

「キミが、私たちに協力……………？」

穰子が怪訝そうな顔をする。

外の世界から来た人間がいったい何を協力できるというのだろうか。

水織の表情も、何処か自信なさげで頼りなかった。

「じゃあ、後はよろしくね」

「私も帰るわ。じゃあね」

三人が協力するとなった瞬間、二人は逃げるようにその場を去って行ってしまった。

呆然と残される秋姉妹と、水織。

ほんのり肌寒い秋の風が三人の前を横切り水織がふるふるっと身を震わせた。

「……ここで立ち話しててもしょうがないし、中に入ろうぜ」

水織が戸に手をかける。

今日からここで厄介になるのかと思うと少し気が滅入りそうになる。

だが、これも全ては紫や来る美女きたの入浴……もとい、秋姉妹に恩を返すためだ。

水織はこれから始まる生活に不安と期待に胸を膨らませ、意を決し戸に掛けた手の力を込めた。

廃墟の戸には鍵がかかっていた。

・
・
・

「……その、なんだ。いきなり閉め出しくらくとは思わなんだ」

結局廃墟に入ることが出来ず、三人は妖怪の山を歩いていた。

しかし何の当てもなく歩いているわけではない。

姉妹が言うには、この山には機械に強い河童が住んでいるという話だ。

河童なんぞいるわけないので、水織は半ば聞き流していたのだが彼女たちの口ぶりからするとどうも本当にいるらしい。

ほとんど獣道とっていい細い道を抜け、やがてその先から轟々と地を鳴らす大きな音が響く。

「滝……かぁ！」

その先には轟音を響かせる巨大な滝が流れ落ちていた。流れ落ちる飛沫が冷たくて心地よいが季節的にはやや寒い。

九天の滝という名前だと、横で静葉が教えてくれた。

「凄いな……うちの近くにも滝はあるけど、こんなにでかくは無いなあ」

「ねえ、水織君。水織君のいた世界ってどんななの？」

ちなみに静葉は水織を呼ぶ時『君』をつける。

水織はいらなと言ったのだが、何となく響きがいいからという何だか訳のわからない理由だけで結局このままだった。

まあ、そこまで気にするようなことではないのだけれど。

さらにちなみに、穰子には気がついたら呼び捨てにされていた。

「オレの世界っていうか、オレが住んでた場所はこと同じ感じだよ。家は温泉旅館で、目の前には赤月山っていう大きな山があって、紅葉が名物なんだ」

「へえ……紅葉が名物の温泉旅館かぁ」

不思議なことに彼女らは温泉旅館はわかるのに銭湯は知らないらしい。

まあ、前者は温泉と旅館を足せばいいだけの話だからイメージも容易なのかもしれない。

「そこそ有名な旅館で、この時期はお客さんがよく来るんだよ。」

まあ、オレは大した仕事はしてないけど多少は手伝いをしてるのさ」「ふうん。でも、温泉旅館でお手伝いって凄いなあ。ちよっと尊敬する」

「そ、尊敬？」

「うん。だって、たくさんのお客さんの相手をしなくちゃいけないでしょう？ 私はそういうの、ちよっと苦手だから」

「接客なんて、慣れりゃどうってことないけどなあ……」

「でもさ水織、温泉旅館と銭湯って違うんじゃないの？」

そこに穰子が口を挟む。

彼女の言つとおり、温泉旅館と銭湯じゃ全然違う。

そもそも提供するものがワンランク違うわけで、旅館はもちろん宿を提供するが銭湯はお風呂だけを提供する。

しかし水織にとってはどちらも大差なかった。

「まあそうだな。でもま、出来なくはないと思うぜ。うちの旅館にもボイラーで沸かす風呂もあつたし、それを弄つたのは専らオレだったしな」

「ぼ、ぼいらー？」

「ん？ ああ、お湯を沸かす機械のことだよ」

「ふうん……じゃあ、ますますにとりの世話になりそうだね」

「二トリ？」

まさか幻想郷に来てその名を聞くとは思わなかった。

二トリといえば、現世を生きる人なら誰でも知ってるほど有名な巨大なインテリアショップではないか。

水織も小さい頃は両親と一緒に行くことがあって、寝具コーナーのベッドで飛んだり跳ねたりしていたのをよく覚えている。

しかし、まさかこんなとこにまで支店を出しているというのだろうか。

凄まじいなあのインテリアショップ。

「えっと、にとりさんっていうのは河童さんなんです」

「……？ か、カッパって雨合羽の？」

「違うに決まってるでしょ。名前よ、名前」

「へ？」

今しがた頭を過ぎっていたダブルベッドが脳内から消え失せる。まさか人の名前とは思わなかった。

というか、河童って……？

「妖怪の山の河童は技術者なんだよ。よくわかんない機械とか作ったり研究してたり」

「……『さごじょうのやり』なんか装備すると強くなるのか？」

「なにそれ？」

どうやらその、カッパとは違うらしい。

何だかよくわからない世界だ。

山の外見や植物なんかは元いた世界とほとんど同じなのに、突然妖怪とか神とかファンタジーな言葉が生活に混ざってくる。

実は夢なんじゃないか。

そう思って頬をつねってみたが、痛い。

目の前の姉妹も世界も消えない。

それはつまり、目の前が現実だということ。

「わからない。わからないな……」

「ほら、こつちだよ水織！」

穰子の声が響いて我に戻る。

滝の前を横切りそのまま進んでいくと山の岩壁に小さな洞窟が見

えてきた。

「あそこに、にとりちゃんに住んでるの。ちょっと人見知りな子だけど、優しくて良い子なんだよ」

「とりあえず入ってみようか」

そう言つと姉妹は躊躇いもなくずんずん奥へ進んでいってしまった。

「ま、待ってくれよ！」

水織も遅れて駈け出し、河童の潜む洞窟にいざ侵入。

……そついえば河童つて、どんな姿をしていたらろうか。

第四話 ゼロから始まる銭湯経営（後書き）

大変なミスを修正していたため、更新が遅れてしまいました；
すみませぬ……

では、また三日後ぐらいに。

感想、評価ポイント等、ありがとうございます。
更新頻度のせい、今作は閲覧者少なめです。

第五話 河童の機械技師

洞窟の中のはずなのに、明るい。

それは洞窟の壁に光源があるからなのだが、何故かその光は松明の明かりではなく人工的な光源。

つまり電気の光だった。

じめじめとした湿気漂うこの洞窟の明かりとしてはひどく場違いな気がしてならなかったのだが、先を歩く姉妹はそんなこと微塵も気にしていないのか何事もなく進んでいく。

「……何で洞窟なのに電気が通ってんだ？」

そもそも今のところの様子からして、この幻想郷という場所に機械的な文化があるとは思えない。

一応確認はしてみたが、元いた世界で見た蛍光灯とほとんど変わりになく、ケーブルは天井伝いに伸びてそのまま洞窟の奥へと伸びている。

ということとは、この奥に電源を供給している何かが存在しているということになる。

それが何なのかは、容易に想像がつくようなつかないような。

「にとりちゃん、遊びに来たよ」

「お姉ちゃんったら。私たちは遊びに来たんじゃないでしょ」

「あ、そうだった」

「はいはい。どちらさんかな……って、静葉ちゃんに穰子ちゃん。それと……ひゅ！？」

「な、何だ？ 今そこに誰かいたんじゃないのか？」

今しがた姉妹の前に誰かが立っていたような気がしたのに、水織

が顔をのぞかせた瞬間その姿が突然消えてしまっていた。

何事かと目を白黒させていると、静葉が苦笑混じりにその場で指をちよんちよんと何かにぶつけるような仕草をして見せた。

静葉の指が、何もないとこころでふよふよと跳ねている。

まるで見えない何かを突っついていてみたいだ。

「にとりちゃん、相変わらず人見知りだなあ。そんなに恥ずかしがらなくてもいいのに」

「静葉、そこに誰がいるのか……？」

「うん。姿消しちゃってるけど……えい」

両手をドン、と前に押し倒すと『ひゃ！』という小さな悲鳴と共に突然レインコート姿の少女が何もないとこころから姿を現し、思わず水織も『うお！』と声を漏らしてしまった。

「あ、あわわわ………！」

「この子がにとりさ。妖怪の山一の機械技師なんだ」

「み、穰子ちゃん！ それは、言い過ぎ………！」

顔を真っ赤にさせ、なおかつ両手をブンブン震わせる少女。

水色のレインコートは小柄な彼女によく似合っており、その恰好のせいなのか彼女が機械に強いようにはとても見えなかった。

それと、帽子をかぶっているので皿の有無がわからない。

ひよい。

「うわわわ！？ な、何するんだいきなり！？」

「いや、二人からアンタが河童だって聞いたから、てっきり頭にお皿があるのかと思って」

「そ、そんなもんじゃないやい！ っていうか、河童の頭に皿があるっていう固定概念はどうにかならないのか！」

「そんなことオレに言われてもな……」

どうせなら妖怪絵巻でも描いた人を呪ってほしい。
というか、普通河童と聞いたらそれしか浮かばないと思うのだが。
それなのにいざ対面してみれば。

「な、なんだよう」

まじまじと見つめられにとりは一步後ずさる。

「いや。河童って可愛いんだなあって思ってたさ」

「か、かか……ッ!？」

そんな水織の何気ない言葉に、少女の顔が爆発寸前の爆弾みたいに赤く明滅し始めた。

穰子もポカンと口を開けて呆けている。

何かおかしいことを言っただろうか。

何故か今度は少女の頭から湯気が出始めたのだが。

「あつわ、わわ……!!」

「にとりちゃん面白ーい。頭から煙が出るよ」

「お姉ちゃん! あれは混乱してるんだよ!」

少女、混乱中。

湯気が収まるまでけっこうな時間がかかった。

・
・
・

「……ご、ごほん。では改めて。私は、河城にとり。えと、君は？」
気を取り直して自己紹介するにとり。
僅かにまだ顔が赤いのはとりあえず置いておく。

「草津水織。水織でいい。そのかわり、こっちも呼び捨てでいいか？」

「構わないよ。それで、三人とも何か用かい？」

「うん。実はね、私たち銭湯をやるの」

「戦闘？ だから私のとくに武器を作りに来てもらったとかかな」

「そ、その戦闘じゃなくてね」

「んん？」

銭湯を戦闘と聞き間違えるつてのは如何なものなのだろうか。

というか彼女たちは本当に銭湯を知らないのか。

銭湯自体は、大昔の日本から続いている歴史ある商売だと祖父から聞いたのだが、それはやはりここが異世界だからということか。

「あのね、銭湯っていうのは、んつと……水織君、バトンタッチ」

「早！ さっきここに来る前に説明したろ？ ……まあ、簡単に言

うと有料のお風呂ってことだ」

「お風呂？ お金払ってお風呂に入るのか？」

そもそもどうして風呂がわかって銭湯がわからんのだこの娘たちは。

「そういうこと。それをオレと、この姉妹とで一緒にやることになったのさ」

「ずいぶんおかしい話だね。何でまたそんなことをやるのさ」

「紫さんの入浴シごふぁ！？」

何故か鳩尾に正拳突きを喰らった。

隣で穰子が顔を真っ赤にさせている。何故だ。

「実はねにとり。今年の紅葉を見て気づいたんだけど、私たちの信仰が薄まりつつあるみたいなの」

急に真剣な表情になって穰子が話を切り出す。

何だ、信仰って。

にとりはううんと腕組みしながら小さく唸り声を漏らしている。

「それで、八雲紫って人に銭湯はどうだって勧められたの。人間に身近に接することが出来れば、ある種信仰に近いものが得られるんじゃないかって」

「ふむふむ……それで銭湯ってのを始めることになったのか」

「だけど銭湯に使う建物がボロボロなの。にとりちゃん、何とかならない？」

「機械的なことならともかく、建物ってことはリフォームもかあ。

ちよつと大変そうだけど、他の仲間を呼べば大丈夫そうだな」

「仲間……」

河童の仲間って何なのだろう。

やはり同じ河童か、それとも他の妖怪とやらか。

銭湯とかリフォームとかよりそっちが気になってしょうがないんだが。

「じゃあにとりちゃん、協力してくれるんだね？」

「秋の神様の頼みを無下に断ることなんて出来ないさ。色々お世話になってることもあるし」

「うわーい。ありがと、にとりちゃん」

「……秋の、神様？」

今しがたにとりがそんなことを口にしたような気がしたのは気のせいだろうか。

水織の言葉に、にとりはさも当然のように答えた。

「何だ、知らないのか？ 彼女たちはこの幻想郷で秋を司る神様なんだぞ」

「……は？」

いやいきなりそんなこと言われても。

普通目の前の人間が『こいつ神様なんだぜ』とか言われても普通だったら絶対に笑われる。

それどころか下手したら妙な色した救急車を呼ばれかねないし、インターネットの中だったら散々罵詈雑言を並べられおまけに語尾に草が生えるような勢いだろう。

しかしそれをにとりは平然と言ったのけた。

惜しげもなく、それがこの世の常識だとも言わんばかりに。

「あれ？ 言っただけじゃなかったかな？」

「いや、あの……さ。普通そんなの信じるアホはいないと思うんだよ。てか、もしかしてオレそう思われてたりする？」

「そんなことないよ？ うんと、どこから話したらいいのかな」

「さつきから思ってたんだけど、彼は人里の子なのかい？ ずいぶんと妙な格好をしているけど」

「ああ、それも説明し忘れてた。んつとねえ」

「お、お姉ちゃんの代わりに私が説明するよ」

まず最初に水織が外の世界の住人であるということ。

というか、このことに関しては自己紹介の時点で自分から言うて

おくべきだったのかもしれない。

話を聞き終えたにとりはぼかんと間の抜けた表情になっていた。

「な、なるほどね。じゃあ幻想郷のことを知らなくて当然だ」

「あのね。幻想郷には少数の人間と、それからたくさん妖怪とか神様が住んでる世界なの」

「にとり、地図貸してもらえる？」

「はいよ」

本棚から丸められた地図が出てきてそれを広げる。

地図には楕円のような地形に、何やら簡易な建物の絵が描かれていた。

それはゲームにありがちなワールドマップといったところか。

ここ、と穰子が地図中心のやや上部、巨大な山の絵を指で示す。

「これが私たちが今いる『妖怪の山』。幻想郷で山と言ったら大抵はここを示すわ」

「ふ、ふむ……ん、ここはさっきの神社か。で、こっちは？」

妖怪の山の頂上に小さな神社が描かれている。

パツと地図を見渡したが神社は博麗神社とこの神社しか描かれていない。

「そこは『守矢神社』。少し前に神社ごと幻想入りした二柱の神を祀る大きな神社よ」

「幻想、入り？」

「水織みたいに、外の世界や別の世界から幻想郷に入ること幻想入りと呼ぶの」

「ふうん……」

さつきから相槌を打ちながら聞いているが、本当にゲームの、それこそRPGみたいな話だ。

それが今目の前で現実に起きているというのが未だに信じられない。

「あとね、ここが人間の住む村の人里なんだよ」

「そういえばさ、銭湯って何処でやるんだ？」

「ああ、それは……この辺りだったか」

静葉が示した村と、妖怪の山との間を水織が指す。

位置としては中途半端な場所で、どちらかといえば銭湯の位置は妖怪の山寄りだ。

唯一の人里から少し距離があるのだが、これでは客が入るのか心配である。

「普通、銭湯つてのは町の中とかにあるもんなんだが、これで人が入ってくるのか心配だな」

「そうなの？ ううん、じゃありフォームついでに引っ越しもする？」

「か、簡単に言わないでくれよ。廃墟ごと引っ越しだなんて出来るわけないじゃないか」

外の世界なら巨大なトレーラーで住居ごと運んだりすることもできるけど。

うんうんと唸りながら思案を巡らせたが、結局良い案は浮かばなかった。

この件に関しては我慢せざるを得ないか。

「まあ、引っ越しとかは後で考えなよ。今は銭湯のリフォームを優先しよう」

「そうだね。じゃあよろしくね、にとりちゃん」

「うむ。道具とかの支度とか色々必要だし、とりあえず作業は明日からでいいかな？」

「おう。よろしく頼むよ」

それから姉妹が少々雑談を交わしてから洞窟を後にする。

気がつくくと西の空に日が沈もうとしていた。

秋になれば当然日の入りも早くなる。

黄昏色に染まっていく妖怪の山は壮観で綺麗だった。

「もうこんな時間かあ。そろそろ私たちも帰らないとだね」

「そうだね。じゃあ水織、また明日」

「おう。また明日な」

山の奥へと向かう姉妹に手を振り麓を降りていく。

と、銭湯予定の廃墟まで来て一つ重大なことを思い出した。

「鍵、閉まってるじゃん……」

しかも最悪なことに、腹の虫まで鳴きだした。

よくよく考えれば、姉妹が助けてくれた時に水を口にしただけで今日は何も食べていない。

餓死するとは言わないが、このままだと何だか腹が切ない。

「そつだ。神社だ、霊夢のこの神社に行けば何か貰えるかも」

空腹の体に鞭を打って神社に向かって歩き出す。

女の子に助けを求めるなんて恰好がつかないような気もしたが背に腹は代えられない。

「……？」

ふと、背後が気になって振り返る。

妖怪の山がそびえる雄大な光景。

それなのに、先刻よりも色が濃いのは気のせいか。

「……まあいいや」

秋の夜は、思いの外早いということなのだろう。

さして気に留めることもなく水織は歩き出した。

歩き出して間もなく、幻想郷に夜は訪れた。

第五話 河童の機械技師（後書き）

きつちり三日更新。

ちよっと遅い気もしますが、我慢。

しかし、水織の能力の開花が遅いなあ……

それと、お気に入り登録、お気に入りユーザー登録、並びに感想やコメント、評価ポイント等ありがとうございます。

おかげさまでお気に入りユーザーが30名になりました。

これからも頑張りますね。

第六話 夜と遊ぶ少女

「……もう夜かよ。うう、ちょっと冷える」

歩き出して数分もしないうちに、水織の頭上には漆黒の空が広がっていた。

一つの星も瞬かない闇が幻想郷を包み込み一寸先も黒く染める。それは足元すらも、見えないほどに。

「おかしいだろ……」

流石におかしい。

確かに水織は田舎育ちで街灯のない道を歩くのは慣れてはいるがこれは流石に暗過ぎだ。

足を止める。自然自分の足音が消え周囲一帯が闇と静寂に包まれる。

虫の声も、風の音も、何も聞こえない無音の世界。

ゾツとするような静けさだった。

何も出来ずその場で立ち尽くしていることしか出来ない。

いや、そもそも自分は立っているのか？

それすらも、ハッキリとわからない。

「ふふふ。こんな夜更けに一人でお散歩？」

「だ、誰だ!？」

闇から響く囁きにも似た小さな声。

何もかもが見えない世界で突如響いたその声に水織は身構える。

「ダメだよお。こついう夜はね、とっても恐い妖怪が出るんだよ」

「怖い妖怪……」

さっき聞いた穰子の言葉が脳裏を過ぎる。
幻想郷は神や妖怪の住まう世界。
そして夜は、妖の世界。それは元いた世界でも同じ話。
といつても、本物を見たわけではないのだが。

「お、オイ！ ど、何処にいるんだよ！ 隠れてないで、出てこい！」

声が、震える。

何も見えない世界で聞こえる声がこんなにも怖いと思ったのは生まれて初めてだった。

見えない視界の中で首を動かしそれでも声の主を探そうとするが闇は一向に晴れず目の前は依然として暗闇。

声が、水織の周囲で反響する。

「うっふふ。さあて、私は何処にいるのでしょ……きゃッ!？」

ドテツ！ とまるで誰かが転ぶような音が背後からして振り向くが何も見えない。

だがその方向から微かに『痛た……』と呟き声が聞えたような気がしたのだが気のせいだろうか。

「ふ、ふふふ。私の姿が見えなくて怖いでしょ？ 怖いでしょ？ これからあなたは、私に食べられちゃうんだかむぎゅ!？」

今の声、まるで喋ってる最中に壁にぶつかったような感じの声だった。

どうもさっきから様子がおかしい。

確かに水織の近くに誰かがいる。

それなのに、誰かの声はすれども未だに一度たりともこちらに接触してこない。

「く、うう……こうなったら、しょうがない」

すると突然今まで目の前を覆っていた闇がゆっくりと晴れていき、歩いてきた道と、その向こうで頭を押さえる少女が映った。

「女……の子？」

闇から抜け出したような黒い出で立ち、月明かりに照らされ幻想的に輝く金の髪には小さな赤いリボンが結わえられている。

何故か鼻先が何かぶつけたかのように赤くなっていたが、見た目は少なくとも水織よりかは年下に見える。

一見すると可愛い少女、いや、少女というよりかはもう少し幼い気もする。

どうやら闇の中で響いていた声の正体は彼女だったらしい。

涙目な彼女は一度水織を指差し、両手を広げながら構え声高らかに叫んできた。

「どうだ！ 恐かったでしょう！ さあ！ 観念して大人しく私に食べられちゃいなさい！」

「こ、恐かったっちゃあ恐かったけど……」

少女が姿を見せた途端、そんな恐怖など何処かへ飛んでいってしまっていた。

一瞬でも恐怖を感じた自分が馬鹿らしいと思えるほどだ。

まさかこんな小さな女の子に脅かされていたとは夢にも思わなかった。

「あのさ、そっちこそこんな時間にうるついでちや危ないんじゃないか？ その、恐い妖怪が出る……んだろ？」
「な……ッ！」

少女の顔が赤く染まる。

怒りか、恥ずかしさか、或いは両方か。

頬を膨らませ両手をブンブン振り回す様は少々愛くるしいとさえ思った。

……別に年下に興味はないのだが。

「ば、馬鹿にしてえ！ もう怒ったんだから！」

頬を紅潮させ少女が手にしたのは、一枚の札。

「お札……？」

短冊のような長方形で、全体的に暗い色をした札を少女が高く掲げ何か呟く。

「闇符『デイマーケイション』」

すると少女が手にしていた札から突然黒い塊のようなものが現れふわふわと手の上で浮かび上がる。

意味不明の物体、何だアレは。

今、あの少女は何をしたんだ。

目の前で起こる不可思議な現象に思わず呆然としてみると、少女はニツと口の端をつり上げた。

「そおれ！」

「う、うわッ!？」

意味のわからない物体を、水織は大袈裟に横つとびして回避。振り返ってみると、今まで水織の立っていた場所に大きな窪みが出来上がっていた。

「何だよ……それ!？」

「私の術スベル・カード符。ふふふ。私が勝つたら、あなたを食べるね」
「は、はあ!？」

そんな物騒な提案を、笑顔で少女が言ってくる。

冗談じゃない、だいたい勝つたらって何だ。これは勝負か何かだとしてもいっただろうか。

意味がわからない。

いきなり視界が真っ暗になって、少女が現れて、訳のわからない攻撃、のようなものを仕掛けてきて水織の頭は混乱寸前。

次々と起こる理不尽な現象に、どう対処すればいいのか見当もつかない。

とりあえず、今わかっていることは一つ。

「たぶん、絶体絶命のピンチってヤツだ……!」

嫌な汗が背筋を走る。

どうすればいい。

逃げるのか、それとも、応戦するのか。

見かけは少女同然だから物理的な力なら勝てるかもしれない。

……が、首を振る。

女の子を殴るなんて冗談じゃない。

そんなことが天国の爺ちゃんに知られてみる。家族だというのに七代崇られそうだ。

だとすれば応戦は、無し。

つまり、ここでやるべきことはただ一つ。

グツと足に力を込めて踏みしめる。

少女と対峙したまましばらく睨みあい、そして、

「得意の三十六計でッ！」

「ふふッ。逃げようたってそうはいかないよ」

Ｕターンして走り出した水織の頭上を、大きな影が通り過ぎ少女が水織の往く手を遮ろうと立ちはだかる。

「……！」

「せつかく見つけた久々の人間だもの。簡単に逃がすわけないじゃん」

「さよならはとつぜんに、とはいかないってか。くそッ」

「何の話？」

クスクスと嘲笑う少女の姿が、少し恐い。

少女の赤い瞳が、獲物を目の前にした獣のように小さく細まる。

「逃げたってことは、私の勝ちで……いいよね」

「……ッ」

渴いた喉のせいで息が詰まり、悲鳴を上げかけたのにそれは声にならない。

このまま、目の前の少女に喰われてしまうというのか。

……というか、そもそも喰われるってどついう意味だ。

それは一般的な食事という意味なのか。

それとも……まさかこんな年端もいかない少女が性的に喰うとか言い出すのだろうか。

何という肉食系少女。

嗚呼、どうせ喰われるのならいっそ紫さんに食べられ

ビュビュンッ！

水織の耳をかすめる、疾風のように鋭利な風切り音。

死に際に描いたピンクな世界が一瞬で現実に引き戻され、水織の足元に白く大きな針のようなものが刺さっていた。

「え？」

「何となく不穏な気配を感じたかと思えば、アンタたち何してんの」「げ、巫女……」

月夜に映える、赤と白の巫女服。

再び振り返ると、そこには霊夢が月を背後に腕を組みながら立っていた。

手には少女と同じような、赤い札を握りしめている。

平坦な声音で霊夢が言う。

「水織、アンタ此处で何してんの。銭湯はどうしたのよ」

「銭湯どころか鍵がかかってたんだよあの廃墟。静葉も穰子も帰っちゃったみたいだし、仕方ないからそっちに行こうとしてたんだ」

「あの焼き芋姉妹……人間を放つて帰るとは良い度胸してるじゃないの」

「うう、こりゃ退散した方がいいよね。じゃ！」

「待ちなさい」

「ひゃん!？」

飛び出そうとした少女のスカートを、水織の足元に刺さっていたものと同じような大きな針が貫いていた。

速過ぎて全く目で追い切れなかったが、恐らく霊夢の仕業だと思
う。

そのまま霊夢が少女に歩み寄り札を構える。

霊夢が近づくにつれ、少女の顔がだんだんと引き攣っていく。

「また私に見つかるなんて、運が悪かったわね」

「こ、こうなつたらしょ、勝負だ！ 私が勝つて、あの人間を食べ
る！」

「往生際の悪い……」

針で貫かれたスカートを少し千切って少女が大きく飛び退き宙に
舞う。

「と、飛んでるぞアイツ!？」

千切れたスカートでややセクシーさを増しながらまたしても少女
が札を構え詠唱する。

「月符『ムーンライトレイ』」

手にした札から、月光にも似た銀色の光線が一直線に霊夢に伸び
る。

威力のほどはわからない、だがさっきの攻撃でも地面を抉るほど
の威力があった。恐らくあの攻撃も同等か、もしくはそれ以上の
はず。

「霊夢、避ける！」

「言われなくても避けるわよ、バカ」

有言実行。

霊夢は少女の光線をひらりと飛んで回避すると、目の前で浮遊する少女と同じくふわりと宙に浮かぶ。

目の前で、二人の少女が空を飛んでいる。

あまりの光景に言葉が出ない。

そんな水織を余所に、二者の戦いは続けられる。

少女は光線を撃ちまくって、霊夢はそれをヒラリヒラリと回避していく。

「……どうなってんだ」

何度目かの光線を回避した時、突然霊夢の動きが俊敏になり少女の攻撃が追いつかなくなっていく。

水織もギリギリ目で追うのがやっとだった。

「術符使うまでもないわね。このまま終わらせるわ」

すると霊夢の周囲に、先刻見せた大きな針のようなものが浮かび一斉に少女へと突き進んでいった。

何本もの針が貫き、少女の体は一瞬で標本の昆虫みたいな張り付け状態となってしまうた。

「うう……ぐすツ、ひっぐ」

「はい、私の勝ち」

泣きべそをかく少女、それを見下ろす巫女。

パツと見、少女を襲う悪の巫女とも見えなくもない構図だ。

くるりと振り返り、背後の少女には目もくれず霊夢が水織に言う。

「さ、とりあえず神社にいらっしやいな。その分じゃ、何にも食べてないんですよ」

「そうだけどさ……あの」
「何？」

水織は張り付けの少女を指差す。霊夢は首を傾げるだけで何も言わない。

「あの子、どうするんだよ。あのままにしておくのか？」

「ま、人間を襲った罰ってどこかしら。放っておいていいの」
「でも」

「少なくとも、アンタは命を狙われたのよ。そんな相手気にしなくていいでしょ」

「ううん……そうなんだけど」

気がつくくと、霊夢はさつさと神社の方へと歩きはじめていた。

ただの一度も振り返らない。

霊夢を追いかけていた水織だが、背後に残された少女が気になつて踵を返す。

「あれは、流石にやり過ぎな気がする」

罪を憎んで人を憎まず、だ。

張り付けの少女の元へ近づくとつれ泣き声が聞こえてくる。

水織と目が合うと、真っ赤な瞳が充血してさらに赤くなっていた。

「この針ってさ、オレでも触れるのかな」

「え……？」

白い針にそっと触れる。

ほんのり温かい不思議な感触だが、どうやら触っても無害のようだ。

一本ずつ抜いていき、やがて少女に自由が戻る。

「な、何で助けるの」

「誰かを助けるのに、理由なんかいるかい？」

「……？」

水織の、人生で一度は言っておきたい台詞第二位。

ちなみに一位は『釣りはいらねえ』だったりする。三位以降は考え中。

「ほら、ここにいるとまた霊夢に怒られるぜ。早く行った行った」

「あ……ありが、と……」

少女は何度も何度も水織を振り返りながらちよつとずつ歩いていき、やがて夜闇の中へと姿を消した。

何となく、心がスカッとした。

やっぱり女の子に暴力はいけない。

例えどんな事情があっても、女の子同士でも、だ。

「さて、霊夢を追いかけないと」

神社について霊夢に『さっき何してたの』と訊ねられたので正直に答えた。

晩飯が無くなった。

第六話 夜と遊ぶ少女（後書き）

何も更新してないのにお気に入りに入りユーザーがどんどん増えるW登録、ありがとうございます。

三日に一度つてのは意外とバランスいいかもしれませんね。

では、また三日後ぐらいに。

第七話 未だ見ぬ世界

「……………む」

視界に飛び込んでくる見覚えのない天井。

掛け布団を吹っ飛ばして跳び起きると水織はすぐさま自分の体を確かめた。

いつものシャツとズボン、傍らには愛用のジャンパーが無造作に置かれている。

しかし周囲には見覚えのない家具やら襖やら。

そして水織は思い出す。ここは博麗神社だった。

「やっぱり夢じゃないのか……………」

半ば諦めつつジャンパーを羽織って外に出ると神社入り口の取水場で顔を洗う。

寒いとまではいかないが、神社を包むひんやりとした朝の空気に水織は小さく身震いした。

「あら、早いよね」

気がつくくと霊夢が水織の後ろに立っていた。

ずいっとタオルを差し出されたので遠慮なくそれで顔を拭くと幾分か眠気が取れてスッキリした。

「まだ朝の六時よ。そんなに早く起きてどうするの」

「誰かさんが晩飯くれなかったから腹減って起きたんだよ」

どうせならメザシの一匹でもよこせってたんだ。

腹の虫がやや遠慮がちにくうと鳴く。

そんな話をしたせいで余計に腹が減ったではないか

「いいわ。少し早いけど朝食にしましょうか。色々と話さなきゃいけないこともあるし」

やれやれと首を振った霊夢の後を追って食卓につき朝食をとる。
白米、味噌汁、焼き魚に漬物……元いた世界でも馴染みの、至って普通の和食だった。

「んじゃ、いただきます」

食事の前で手を合わせ、早速箸で焼き魚をつまむとほぐれた身から湯気が湧き出て香ばしい香りがふわっと漂う。

料理は出来たて、しかも今の水織は空腹。味のほうは言うまでもない。

「……美味いや！ 腹が減ってるから余計にそう感じる」
「私の料理の腕にはノーコメントなのね。まあいいけど」

食器があらかた空になったところに霊夢が口を開く。

昨日戦っていた少女、ルーミアのことだ。

「ルーミア……？」

「アイツは歴れっきとした妖怪よ。『闇を操る程度の能力』で人を暗闇に閉ざし喰らうの」

「闇を操る能力……」

だからあの時急に目の前が真っ暗になったのか。

しかし、横文字の妖怪なんて初めて聞いたぞ。

妖怪っていうと、もっと小難しい漢字の名前ばかりだと想像していたのだが。

残っていた焼き魚の尻尾をかじる。

「そのわりには、自分の作りだした闇で視界を失くしてしまうらしいけどね」

だからあの時鼻先すりむいてたのか。

……？ あそこはただの一本道だったのに、いったい何に顔をぶつけたってんだ？

「というかさ、その『能力』って何だよ。ここの妖怪はみんなそういう『能力』ってのを持ってるのか」

「ええ、別に妖怪に限った話じゃないわ。私だって持ってるし、あの焼き芋姉妹も持ってるわ」

「霊夢の能力って？」

「私は『空を飛ぶ程度の能力』」

「空を飛ぶ……」

あの時霊夢が突然飛び上がったのはその能力の所為か。

残ったご飯を咀嚼しながら昨日のことを思い出す。

能力は、何となくわかった。

じゃあ昨日戦ってた時に使ったあの光や針は何なのだろうか。

「まあ、あれは私たちなりの決闘と言ったところかしらね」

「決闘？」

「そ。めんどくさいから細かい話は端折るけど、要は簡単に勝ち負けを決める方法よ。勝ったら勝ち、負けたら素直に負けを認める」

「ふうん……」

味噌汁の中身が無くなったので椀を霊夢に渡すと嫌そうな顔された。

おかわり禁止なら先に言え。

こっちは成長期なんだぞ、成長期。

「とまあ、そんなとこかしら。それぐらいの話ならあの姉妹にもわかるから何かあればそっちに聞いてちょうだい」

「ん、了解」

食事を終えて自分の食器を片づけると、途端にやる事が無くなっってしまった。

このまま適当にごろごろしてもいいのだがふと何となく廃墟が気になった。

霊夢に外出したいと告げると数枚の符を手渡された。

昨日の戦闘で見たものほとんど同じものだが、これは何となく違うような気がする。

「護身用よ。道中、また妖怪に襲われそうになったらこれを千切りなさい」

「え？ 今は朝だけ？ 妖怪なんて出るわけ」

「夜にだけ活動する妖怪なんてそうそういないもの。朝だって、スキあらば襲ってくるに決まってるじゃない」

じゃ、と素っ気ない言葉の後霊夢は社の方へと戻って行ってしまった。

手渡された札を見つめゴク、と唾を飲み込む。

「……ま、まあ大丈夫だろうよ」

鳥居を抜けて石段を駆け降り妖怪の山へと向かう。

朝日に照らされた人気のない田舎道は元いた世界とよく似ていた。そういえば異世界だというのに日本語で通じているっていうのは不思議だ。

よくよく考えれば、神社や妖怪なんて言葉もほとんど日本と同じだ。

ここは日本の何処かなのだろうか。

「何だか、妙な感じだな」

そうこう考え事しながら歩き続けて……三十分ほどだろうか。

時計が無いので時間の感覚がわからないが、気がつくとも最初に紫に案内された廃墟の屋根が水織の視界に映っていた。

……遠い。

本来、銭湯というのは近所にあって気軽に行ける環境の方が望ましい。

このままでは銭湯としては危うい立地だ。

「妖怪も出るって話だし、こんな辺鄙な場所で客が来るかなあ……ん？」

廃墟の前に、見覚えのある赤いスカートが揺れている。

帽子をしてないし、あれは恐らく静葉だろう。

「おはよう、静葉」

「あ！ 水織君！」

振り向いた静葉は水織の姿を見てビックリしたような顔をしていった。

そのままトトトと水織に近づき体のあちこちを見つめてきた。

「な、何だ何だ？」

「怪我とか、ないの？ 大丈夫？」

「いや、何ともねえよ。いきなりどうしたんだ？」

「え、えっと……ごめんね」

「……？」

何で謝られたのだろうか。

水織が首を傾げると、静葉は申し訳なさそうに顔を俯かせそばそと話します。

「昨日、水織君のこと放っておいて帰っちゃってさ。神様なのに人間を追いてっちゃうなんて……」

「ああ、そのことか。別に気にしてねえよ。オレも何にも言わなかったし」

「だ、だけど」

「いいって。そんな顔すんな」

神様だろうとなかろうと、女の子がそう簡単に暗くなっちゃあいけない。

女子は笑顔であるべきだ。

そしてその笑顔は、男子が作ってやらねば。

それから適当に雑談をしながらしばし廃墟の前でのんびり過ごす。昨日の夜の出来事、ルーミアという妖怪に襲われたことと助けたこと。

それから今朝の霊夢の話。

「なあ、静葉たちにも神社とかあるのか？」

「え……？」

水織は何となく気になって訊ねてみた。

静葉たちの家、というか神社とはどんなものなのだろう。

二人は秋を司っているという話だから神社というよりもっと大きな御殿とかになったりするのだろうか。

うわ、どうせならあんなちっぽけな神社よりそっちに泊りたかったかも。

すると、何故か静葉の顔が再び陰ってしまった。

「も、もしかして聞いちゃまずかったか？」

静葉は軽く微笑みながら首を振ったが、その笑みにも何処か影が差しているような気がするのはいのせいだろうか。

「う、ううん。私たちの神社は、その……」

「お姉ちゃん！」

妖怪の山の方から威勢のいい声が聞こえてくる。

振り返ってみると、山の斜面を裸足で駆け降りてくる穰子の姿があった。

「あ、水織！ よかった、無事だったんだ」

「何とかな。てか、二人ともここで何してんだ？」

「水織を探そうと思って来たの。だけどすぐ見つかってよかったわ」「うん。水織君が無事で安心した」

神社のことを聞きそびれてしまったが、静葉の顔が笑顔に戻っていたのでこれ以上は聞かないことにした。

別に今聞く必要もないし、また今度機会があるときに聞けばいい。

「それで、今日はどうするんだ？」

「にとりちゃんがもう少ししたら来るって言ってたし、それまで待

ってよっか」

そうして間もなく、妖怪の山の方からにとりが一人で姿を見せた。仲間は後から合流とのことで、とりあえず廃墟の中を見たいとのこと。

水織が玄関の鍵の旨を伝えると、にとりはレインコートのポケットから小さな針金のようなものを取り出す。

む、これ見覚えがあるぞ。確かキーピックとかいうヤツだ。こつちの世界でも女性が装備しているものなのか。

「これぐらいの鍵ならちよちよいの……？　どうかしたか水織？」
「い、いや。何でもない」

しかしあんな細長い針金でどうして鍵が開くのだろうか。イマイチわからん。

やがて力チ、と小さな音を立てて廃墟の戸が開くと埃っぽい空気がむわっと立ち込めてきた。

「う……でも、割と綺麗なんだな」

正面両手には小さなカウンター！

奥には二つの戸が左右に並んでいて、恐らくそこは脱衣所でその奥が浴場となっているんだろう。

土足のまま上がり脱衣所であろう部屋の戸を開ける。

案の定中には衣類などを置く棚が置かれていた。

そして最奥の戸を開けるとこれまた予想通りタイル張りの大きな部屋となっていた。

「うお、想像してたよりもかなりデカイな……」

浴槽の大きさは、一言で言うならだいたひ小学校の小プール程度、おおよそ20メートル前後ぐらいだろうか。

深さもそこそこあるし、これなら大の大人でもゆつたりと湯船につかれそうだ。

正面向かって右手の壁際には蛇口がしつかりと備え付けられているし、水さえあればすぐにでも営業できそうだ。

とはいえ、もちろんこのままでは意味が無いので。

「ボイラー室は何処だろな……」

部屋を出て探すが、ロビーにそれと思わしき扉は見当たらなかった。

裏口だろうか。ぐるっと建物を一周して歩くと小さな灰色の扉を見つける。

戸を開けて階段を下りていくと薄暗い部屋の奥で明かりがちらついていた。

「お、水織」

「にとりか。何でここに」

「何でって、ボイラーを見にきたのさ。もちろんここも直さなきゃいけないしな」

「機械に強いつてのはホントなんだな」

にとりの足元に散らばる工具の山がそれを物語っていた。

水織もしゃがみ込んで一緒にボイラーを覗きこむ。

といつても、かろうじて操作方法がわかるだけで機械などさっぱりなのだが。

複雑な機械を目の当たりにして水織が小さくうめく。

「……ホントに直るのか、コレ？」

「直さないで銭湯出来ないんだろ。これぐらい直してみせるよ」

「頼もしいカツパだな」

「こ、これぐらいどうってことないのさ」

にとりが工具を手に早速作業に取り掛かる。

仲間が来てからでいいんじゃないかと聞いたら『細かいところは今のうちに終わらせてしまおう』とのこと。

作業を始めたにとりの表情が真剣そのものになったので水織は大
人しく退散した。

このままいてもしょうがない。後できゅっりでも渡してやろうか。

……好きなのかどうか知らないけど。

「水織くん！ 何処？」

静葉の声が上から聞こえてくる。

何の用だろうか。

ボイラー室を出て玄関の方へ向かうと、静葉と穰子と、それから
紫の姿を見つけた。

「あら、おはよう水織君」

「おはようございます、紫さん」

「……私たちの時と態度が違い過ぎない？」

「気のせいだ」

「うっふふ。どう？ この建物使い物になりそう？」

「もちろんです紫さん。ただ、ちょっと問題が」

「問題？」

水織はこの銭湯の立地について紫に説明した。

妖怪が蔓延るこの世界で、しかもこんな辺鄙な場所では客が見込
めない。

そこで、以前話に聞いた人里に銭湯を移設したいと水織は訴えた。

「人里に移設……そうね。そうしないと儲からないものね。わかったわ。その件は私に任せてちょうだい」

「ありがとうございます、紫さん」

「だったら、人里に下見に行つてきてはどうかしら？」

「下見……か」

そういえば水織は妖怪の山と博麗神社以外の場所にまだ訪れていない。

銭湯の経営もそうだが、単純に幻想郷がどんな場所なのかは水織も興味があつた。

「じゃあ一緒に行こつか。私たちが案内してあげるよ」

「そう……だな。どんな場所で商売するのは知っておかなきゃいけないし、よろしく頼むよ」

「うん、頼まれた」

姉妹の簡単な説明を受けながら人里へと向かう道を歩き出す。

期待と不安で何だか胸がドキドキしてきた。

と、静葉が目の前を指差し声を上げる。

ただっ広い平原の真ん中に小さな集落が見えてくると、自然とその足取りは加速していた。

第七話 未だ見ぬ世界（後書き）

少し修正してたら遅くなりました；
すみませぬ。

ちよつと話のテンポが遅い気がするけど気のせい。
そして、恐らく一章の中で水織君の能力が覚醒することはなさそう
です。

では、また三日後くらいに。

第八話 幻想郷の人里

それはまるで、自分がタイムスリップをしたかのような不思議な感覚。

人里に辿り着いた水織がまず最初に抱いた気持ちはまさにそんな感じだった。

「まるで歴史の教科書みたいだな」

何となく想像はしていたのだが、いざ目の当たりにするとその衝撃は凄まじい。

行き交う人は皆一様に古めかしい着物姿。

水織が着ているようなズボンだとかジャンパーだとか、そういった類の恰好をしている者は誰一人いない。

しかしそんな彼らから見れば奇抜であろう恰好をして歩いているのに、周囲の視線が大して集まらないのは何故なのだろうか。

水織はそのままあれこれと考えながら姉妹と人里の中を歩いていく。

「あ、静葉様だ！」

「穰子様！」

里を歩いていると姉妹に手を振る少女や両手を合わせて拝む老婆の姿がちらほら見えた。

静葉も穰子も笑顔でそれに応えている。

流石は神様といったところだろうか。

歩き続けて里の中心部辺りにつくと三人で少し休憩をすることに
なり、静葉は近くの茶屋から饅頭と湯のみを持ってきた。

「おばさんがサービスだって」
「ふうん。神様ってのは役に立つんだな」
「ちよつとはありがたいと思いなさいよ」
「ううん……」

貰った饅頭を口に放り込んで考える。
確かに凄い話なんだろうけど現実味が無いというか、何度聞いてもイマイチしっくりこない。

別に海を割ったりするわけでもなし、静葉と穰子の姿から見てもそんな力があるようにはまるで見えないし。

隣で饅頭を美味しそうに頬張るその姿は何処からどう見ても普通の女の子のそれだ。

「そついえばさ、静葉にも穰子にも『能力』ってあるんだよな？」
「あるよ。私は『豊穣を司る能力』。そしてお姉ちゃんは『紅葉を司る能力』さ」
「豊穣と、紅葉……」

豊穣とは、その名の通り作物の穣が豊かに実ることだろう。
そして紅葉は……やはりあの、モミジやイチョウが色付くあの紅葉だろうか。

豊穣はともかくとして、静葉の紅葉っていうのは……

「何だか、地味な能力だな」
「あ、あう……」

む、静葉の顔がわかりやすく暗く沈んでしまっただれの目の前に右フックが迫りくがっはあ!?

「な、何しやがる穰子!？」

「お姉ちゃんが気にしていることを平然と言つな、バカ！」
「んなコト言つたつて、オレは思ったことを素直に」
「い、いいんだよ穰子。気にしてないから」
「お姉ちゃん、顔が真つ暗なんだけど」
「は、ははは……」

今の静葉にはどよんという効果音が世界一似合うと思う。
しかし、妹は豊穰だなんて立派な能力なのにどうして姉はシヨボ
いのか。

某大佐曰く『兄に勝る弟などいない』ではなかったのだろうか。
この場合は『姉に勝る妹』だけだ。

「お、お姉ちゃんはこの能力で紅葉を操つて、秋の侘^わび寂^さびを表現
するのが役目なの！」

「侘^わび寂^さび……？」

間を取ったらワサビだな、とか言ったら間違いなく穰子のデンプ
シーロールが待っているので口の中に閉じ込めておく。

「侘^わびと寂^さびは、言わば閑寂^{かんじやく}と清澄^{せいじやう}の世界。お姉ちゃんは紅葉で世
界に秋の雰囲気を出してあげてるの！」

「侘^わび寂^さびつてアレだろ？ 茶道とかで重視する雰囲気の」

「侘^わびは「わぶ」という『気落ち』や『辛いと思う心情』を表す動
詞から生まれた言葉で、寂^さびも同様に「さぶ」という『古くなる』
や『色褪せる』という意味の動詞が由来しているの」

やや顔を上げながらぼそぼそと静葉が説明する。

侘^わび寂^さびの通り、今の静葉の顔は穏やかで物静かで、少し寂しげ
だった。

「だから、私が頑張れば幻想郷が、この世界が秋に変わっていくの。それは静寂と、ほんの少しセンチな季節で……」

「あわわ……！ お、お姉ちゃんネガティブになるの早いよ！ まだ私たちの秋は始まったばかりで」

「そっか。でも、案外悪くない能力だな」

「え……？」

静葉と、ついでに穰子が意外そうな顔してこちらを覗きこんでくる。

湯のみをすすって一息つけてから水織は言った。

「風情があつていいじゃん。オレはそういうの好きだし。地味って言ったの、気にしてるようなら謝るよ。ごめんな」

「う、ううん。別に、私もそこまで気にしてないし。それに」

「それに？」

暗い顔が途端パツと明るくなって笑顔に戻る。

静葉の頬が仄かに紅葉色に染まっていた。

「褒められたの、初めてだから。嬉しい」

「ん。そっか」

「……えへへ」

水織は残った饅頭を口に放り込んで飲みこむと、茶屋の外に出てしばし里の様子を観察する。

今いるここはちょうど東西南北に道が伸びていて意外と人通りが多い。

真ん中にはぽっかりと広い空間が開いて今は子供たちがわいわいがやがや鬼ごっこらしき遊びを楽しんでいる。

……もしも、ここに銭湯を建てたらどうだろうか。

これなら里の何処からでも気軽に立ち寄れて客入りはかなり期待できる。

銭湯を移設するならこれ以上のベストポジションはないと思う。

「移設するとしたら、ここがいいな」

「銭湯？ だけど、子供の遊ぶ場所無くなっちゃうよ？」

「無駄にだだっ広いからその点は心配ないんじゃないか？ ……むしろ、オレはどうやって移設するのかを心配してるんだけど」

「そういえば、紫さんは任せて〜とか言ってたね」

「あの人って、何か胡散臭いんだよなあ」

「バカ。そこはミステリアスと言ってやるんだ」

「神様相手にバカ呼ばわりって………というか水織、紫さんと私たちとで扱いがずいぶん違うよね」

「気のせいだったの」

茶屋を出てほんの少し進み移設候補地を確認する。

十字路のど真ん中というのは非常に便利な立地だ。移設するならば是非ともここが望ましい。

「じゃあ、一旦あの廃墟に戻ろうぜ。その事を紫さんに話さない」と
「そうだね〜」

「水織、そういえば今日の宿はどうするの？ 決まってるなら私たちと行くよ」

「ん〜、そうだな。また霊夢のところに厄介になるのも悪いしな……」

これなら凶らずとも姉妹の神社に向かえそうだ。

素晴らしい御殿を頭の中で想像しながら水織たちは妖怪の山の方へと引き返して行った。

・
・
・

水織たちが戻ると、ついさっきまで廃墟だった建物が消え失せていた。

いや、消え失せたという表現は正しくない。

「す、すっげえ！ まだ半日ぐらいしか経ってないのに、もう直ってる！？」

水織たちの目の前には廃墟改め、立派な銭湯が出来上がっていた。

「おお、水織か。リフォームも全部終わったよ」

あまりの仕事の速さに驚愕する水織の前に、スパナを抱えたにたりが誇らしげな顔を見せた。

何ということでしょう。

あれだけ荒れ放題だった廃墟が河童の手により生まれ変わってしまいました。

いったい何処のリフォーム番組だ。

そしてあのリフォームの資金って何処から出てくるのだろうか。

説明で出てくる資金以上に人件費が凄そうなのだが。

「ま、私たちが本気を出せばこんなもんさ」

「私たちって、仲間とやらは？」

「リフォームが終わったもんだから焼き鳥屋に打ち上げ。私は説明がてら残ったのさ」

「そっか……へえ、すげえなあ」

正面玄関を抜けると、まず目についたのが予想以上に広々とした

ロビーだった。

両側のカウンターはピカピカに磨きあげられ自分の顔が映るほどにまで綺麗に仕上がっていた。

「脱衣所も完璧。残るは……！」

ガララ！ と小気味いい音を立てると浴場に踏み込む。

純白の壁に、薄く青みがかったタイルが敷き詰められ、元いた世界でも見た、それはまさしくオーソドックスな公衆浴場。

シャワーも蛇口も新品同様に光り輝き、今すぐにも熱いお湯を注いでくれそうだ。

「……あ」

「どうだ水織。これなら銭湯とやらが経営できそうか？」

「あ……ああ、バツチリだ。河童の技術って凄いな」

「ふふん。もっと見直してもいいんだぞ。ハッハッハ！」

妙にご機嫌なとりがボイラー室の使い方を教えるからと言って水織を残し浴場を出る。

確かに、あの廃墟を半日程度でここまで修復する技術は凄い。

完成した浴場を見て水織はそう思うのだが、一つだけ、心残りがあつた。

「……まあ、知らないんだから当然か」

浴場入って正面の壁は、真白なまま何も描かれていなかった。

・
・
・

やがて日が沈み、説明を終えたにとりが妖怪の山に帰ると、水織は銭湯隣に新しく作られた小さな小屋で寝転がっていた。

この小屋はにとりのサービスだそうで、水織の自宅代わりにどうかとのことだ。

「おかげで寝る場所には困らなくなったな。へへ、一人暮らしみたいで緊張するな」

とはいえ、家具は最低限なものだけしかないので今現在のこの部屋はがらんとしている。

物々しいよりかはマシだが、逆に何もないと妙に落ち着かない気もする。

さて、これからどうしようか。

去り際に穰子から貰った柿をかじりながらポケットしていると、部屋の戸がコンコン、とノックされた。

こんな時間に誰だろうか。

静葉が何か忘れ物でもしたのか、それとも穰子だろうか。

「へいへい。今開けますよっと」

引き戸を開けてフツと顔を上げると紫紺の瞳と目があった。

「こんばんわ、水織君」

「ゆ、紫さん！？ え、ちよ、わ、な、なな何の用ですか!？」

「何の用って、ついさっき貴方が銭湯を移設する場所が決まったって言ったから」

「え？ 紫さんにそんなこと言ったかな……?」

今日紫と会うのは朝と今とを合わせて二度目のはずなのだが。

紫は部屋へと上がりちよんと座布団の上に座り込む。正座してる姿も美しい。

「それで、人里の真ん中に銭湯を移設したいのよね？」

「は、はい！ 一番人通りも多いし、客入りが一番見込める場所だと思いますして」

「試しに聞くのだけれど、博麗神社の傍はどうかしら？」

「え？ 博麗神社ですか？ ううん……」

あの神社、こう言っでは失礼だが参拝客があまりないような気がする。

里から見ても遠いし、その道中には妖怪も出るし危険で客入りとしては微妙だろう。

神社の近くに銭湯、というと逆に何かご利益がありそうなのだが。

「まあ、それは冗談だからいいわ。今日はもう遅いし、移設は明日でもいいかしら？」

「は、はい！ でもあの、どうやってこの建物を移設するんですか？」

「ん？ 聞きたい？」

紫は扇子をそつと口元に寄せ、ふふふつと何か意味ありげな妖艶な微笑を漏らす。

怪しい、いや、妖しく美しい顔だ。

自分の顔が意味もなくどんどん熱くなっていくのをただただ感じていると、やがて紫が声を上げて笑いだした。

「ふっふふ。そんな顔していったい何を考えているのかしらねえ？」

一度貴方の心の中を覗いてみたいわ」

「ど、どうぞ遠慮なく！？」

「ふふふ。じゃあまた明日、ね」

帰る直前、茶目つ気たつぷりにウインクを残して紫は部屋を去っていく。

ポカンと呆け、そのまま呆けたままいつしか水織は眠りについてしまっていた。

そして……

・
・
・

「……あれ、オレ寝てたのか」

何も着替えず、そのままの姿。

適当に雑魚寝したせいか少し体が痛い。寝違えたかもしれない。

苦にならない程度に体をほぐし、洗面台で顔を洗いタオルで拭く。

……と、何やらがやがやと人のどよめき声のようなものが聞こえ顔を上げる。

「え……？　ここ、妖怪の山の麓だぞ？　何で人の声なんか……」

気になって窓辺に近づきカーテンを開く。

目の前には訝しげにこちらを見つめたり指を差したりする人々の姿。しかも大量に。

それはまるで、下見に行った人里の住人がこの銭湯に集結したかのような光景だった。

「うお、すごい……！　まだ開店もしてねえってのに……」

とにかく、今にも押し寄せてきそうな彼らに事情を説明しなくては。

慌てて靴をはき玄関の戸を開け放ち外に出る。

「……す、すみません！ まだお店は開……店、してな……」

突如姿を現した水織に一旦どよめきが止まり、そして水織の言葉も止まる。

何故か。理由は至極単純。

「は……？ は……？」

見覚えのある木造建築群。

目の前の人は古めかしい着物姿。

親の背に隠れる少年少女の姿は、昨日鬼ごっこをしていた子供たち。

「ど、どうなってんだあああああ！？」

水織が寝ている間に摩訶不思議な天変地異が起こったとでもいうのだろうか。

それは、寝起きの頭では理解できないような、あまりに突拍子なく信じ難い光景。

水織は今、人里の中心で張り裂けんばかりの奇声を発した。

第八話 幻想郷の人里（後書き）

またまたユーザーも、お気に入り登録件数も増え、ありがとうございます。

読者の皆様にはいつも感謝感謝です。

そして今日も調整して遅れてすみませぬ；
最近チェックが雑なので、また誤字とか脱字とかあるかも……ガクブル。

感想、コメント等、何方でもどんなことでも、気軽に書きこんでいただければ嬉しいです。

ではまた三日後くらいに。
それでは。

第九話 名付けて『秋の湯』

「ほえ……ホントにあっさり移設しちゃったんだねえ」

人里のど真ん中、静葉は出来上がったばかりの銭湯の屋根を見上げながらぼんやりと呟いた。

屋根の向こうには見事な秋晴れが広がっていて、まばらな雲が空を泳ぎ澄み切った青の空に彩りを添えている。

「朝起きて外に出たら里の人たち全員に変な目で見られた。恥ずかしいわ気まずいわ……」

静葉から貰った栗をつまみながら水織がやれやれと嘆息しながら呟く。

おかげで静葉たちが来るまでずっと部屋にこもりつきりで何も出来なかった。

「あの紫って人の仕業なんだろうけど……とんでもない人だね」

「流石紫さんだ。そこに痺れるし惚れる」

「……水織、八雲紫は妖怪だって」

「おはよう、三人とも」

「うわ！？ 紫さん！？」

いつしか水織と姉妹の間に日傘を携えた紫が現れていた。ほんの少し眠たげな表情で、小さな欠伸を扇子で優雅に隠していた。

「銭湯の位置はここでいいのかしら？ 人里の真ん中だと聞いたから」

「で、でもいきなりやることはないんじゃないですか？ オレ朝起きたら人里でめちゃくちゃビックリしたんですけど」

「夜じゃないと目立ってたまらないもの。まあ、結局目立ってしまっうんでしようけど」

「そりゃあ……」

人里のど真ん中に突如現れた巨大な謎の建物。

元いた世界なら新聞の一面を余裕で飾れるし、朝のニュースならまず一番最初に紹介され生中継ものだろう。

……そういえば、この世界のメディアってどんなものなのだろう。やはり古式ゆかしくかわら版とかだろうか。今のところそんな看板見かけたことないけど。

「さて、私はそろそろ退散するわね。少し疲れてるし、ここでとやかく追及されるのも面倒だから」

「え？ 追及？ いったい誰に」

「しっつれ〜いしまっす！」

突如水織の目の前に漆黒の影が過ぎたかと思うと、そこには黒髪の少女が立っていた。

白シャツに黒のスカートというシンプルな姿で、手には小さなメモ帳とペン。

無垢な好奇心な瞳の少女は、パツと見かなり可愛い。

しかしながら一番目についたのは彼女の背の、漆黒の翼だった。

「うわ……！？ 空から女の子が落ちてきた！？」

「失礼な。私は華麗に着地したじゃありませんか」

「あ、天狗の新聞記者さんだ」

「天狗の、新聞記者……？」

天狗って、あの鼻が高く赤い顔のあの妖怪だろうか。

だが目の前の少女は漆黒の翼はあれど、別に顔が赤いわけも無し特別鼻も高いわけではない。

静葉は彼女を天狗の新聞記者と言っていたが……

「どうもこんにちは。私、清く正しい射命丸と申します。はい、こちら名刺」

「ど、ども」

名刺なんて初めて貰った。

小さな名刺には『射命丸しやめいまる 文あや 文文。新聞編集長』と書いてある。

「ぶんぶん新聞……か？ ずいぶんダサイ名前の新聞だな」

「そんな読み方する人初めて見ましたよ。文文まる。新聞！ ですよッ」

「……結局ダサイな」

横で静葉と穰子が口元を手で覆って笑いを堪えている。

この『文文』の後の句点はそう読むのか。おかげで妙な恥をかいってしまった。

こほん、と仕切り直し文は手帳を開きペンを水織の鼻先にズバツと突きつける。

「さて、早速取材です。えと、まずお名前は？」

「み、水織です。草津水織……」

剣幕のせいかわず敬語が出てしまった。

名前を聞いた途端、文はすぐさま手帳に何かを書き始めた。恐らく水織の名前だろうけど。

「では次。こちらの建物はいつたい何なんですか？ 先ほど、あな

たはあちらの小屋から出てきたようですけど」

「こ、これは銭湯です。えと、あの小屋はオレの自宅というか、何
というか」

「ふむふむ……して、あなたは何のために銭湯を？ 何故ここに？

あなたの出身は」

「えっと、それは……」

矢継ぎ早に繰り出される質問に押されっぱなしの水織。

勢いのまま様々な質問に答えさせられることとなってしまった。

もちろん水織が外から来た人間だということも。

そして何故か個人的な情報まで根掘り葉掘り洗いざらいに。

「はいはい。これにて取材は終了です。お疲れさまでした」

パン、と手帳をたたむ音で取材終了。

文の取材を終えた水織はマスコミに追われる芸能人のような気持ち
だった。

ただの質疑応答だというのに、この短時間で体にドツと疲れが押し
寄せてきた。

「では、早速号外を出させていただきますね！ それでは、っとお
ッ！」

何をそんなに急いでいるのか、文は手帳を胸ポケットにしまい込
むとすぐさま地面を蹴って飛び上がった。

気がつくくと文の姿は彼方へと消え失せ、銭湯前にはポカンと立ち
尽くす水織と姉妹だけが残された。

「……何なんだ、あの人」

「幻想郷最速の新聞記者さんだよ。私たちも、時々新聞読ませても

らってるの」

「早速銭湯のことが記事になるんだろっね。ちょっと楽しみだけど、あの人の記事は玉石混交（たけいせきまじりこうじょう）というか、何というか」

「ふうん……」

しかし、ある意味では幸先の良いスタートかもしれない。

新聞というメディアにこの銭湯のことが書かれていれば良い宣伝となる可能性が高い。

誰かしら記事を見れば興味を持ち、この銭湯を利用してくれるかもしれない。

最も、まだオープンしてはいないしその日にちも決まっていないのだが……

「水織君」

「ん？」

「それである、銭湯のことなんだけど」

「ああそっだな。ここで立ち話してもしようがないし中に入ろうか」

銭湯自体は出来上がったのでこれからの経営のことを考えなくてはいけない。

三人は正面の玄関をくぐり銭湯内へと入っていった。

・
・
・

「水織君、それでね」

「わかってるよ。お店自体は出来たんだから次は経営の話だよな」

カウンター奥の事務所で三人で座って早速会議。これから決める

こと、やることが大量にある。

「まず最初に決めるのは」

「お店の名前ね」

「……多分違うと思うぞ穰子」

最初に決めるのはもちろん……残念ながらそこから先が出てこなかった。

「……な、何から決めたらいいんだろうな？」

「え〜？ 水織君、しっかりしてよ」

「んなこと言ってもなあ……」

ここからは経営の話。

そもそも、まだ中学生の水織に銭湯とはいえ一つの店を經營しろという方が無理難題なのだ。

本当に銭湯の名前から決めるのか？ それとも料金？ いや、営業日や営業時間か？ 肝心の銭湯はどうする？ 石鹸などの備品は何処から？

考えることが多過ぎて水織の頭の中が思考で埋め尽くされていく。何からやればいい。

何処から考えればいい。

そんな中、穰子がひょいっと手を上げた。

「……何だ？」

「そもそもさ、銭湯ってどうやって使うのになって思ってたさ」

「ああ？ んなもん金払って風呂に入るんだろ」

「だからさ」

穰子がニコニコと何故か得意気な笑みを浮かべている。

何か妙案でもあるのだろうか。
水織が首を傾げていると、指を上げてこう言った。

「私たちにさ、最初から順序通り教えてよ。まず最初は何をして、次に何をやるのか」

「何って……そうか」

「ん〜？」

穰子の考えが読めた。

反対に静葉はさっぱりわからない様子で首を振り子みたいに左右に揺らしていた。

「そうだな。最初から考えりゃいいんだ。んじゃ実演しますかね」

「ま、待ってよ二人とも」

水織は事務室を出て、銭湯正面の入口に立つ。

「まず最初はこのカウンターで料金を払うんだ」

店によっては後払いという店もあるが、とりあえずここでは最初で。

「じゃあ、まずはお金だね」

いつの間にか穰子の手にはメモ帳が握られている。用意がいいじゃないか。

第一に、料金。

料金を一律にするのか、それとも年齢層で分けるのか。

ここはやはり大人と子供で分けるのがセオリーか。しかしあまり細かく分けてしまっても面倒なだけで。

「穰子、メモに大人と子供で料金を分けるってメモしておいて」
「うん。それじゃ、肝心の金額はどうするの？」

「ううん、そうだな……」

ちなみに、実際の銭湯での入浴料金は物価統制令という勅令の規定により、各都道府県の知事の決定で料金の上限が定められる。平均で考えると地方によって多少の差異はあるが、大人ならだいたいの四百円程度、子供はその半額ぐらい。

さらにちなみに、上記の料金分けは幻想郷用にと大人と子供だけと簡略化してあるが、実際は『大人』（中学生以上）、『中人』（小学生）、『小人』（未就学乳幼児）と細かく三つに分けられる。

そういえば幻想郷のお金って、元いた世界と同じなのだろうか。

試しに穰子に聞いてみると、見覚えのあるようなないような銅銭を差し出してきた。

……何だっけコレ。

確か、和同開珎わどうかいちんだっけか。

それとよく似ているような、元いた世界じゃ滅多に見られないような穴の空いた古ぼけた銅銭だ。

価値は……古銭収集家というわけじゃないしよくわからない。

「ううん……イマイチ価値観がわからないから、そこは穰子に任せよう」

「うん、了解」

ふんふんと鼻歌交じりにメモをとっていく。

さて、基本料金が決まったところで次は何だろう。

「水織、銭湯に入る時気をつける事とかあるの？」

「気をつけること?」

脱衣所を抜けて出来上がったばかりの大浴場で穰子が水織に訊ねた。

銭湯で気をつけること……か。

「石鹸で滑って遊ばない。うつ伏せでロケットスケートやると色々悲劇……」

「何の話よ」

「昔そんなことをした巡査がいたって話」

「???」

冗談はさておき、銭湯では色々とマナーがあるのは事実だ。

穰子は恐らくそれを自分に確認してくれてるのだろう。

姉が少しマイペース過ぎるせいか、彼女はどうかやしっかり者らしい。

「そうだな……風呂のお湯がどんなに熱くても、水で温くしちゃうんだな」

「え? 何で?」

「銭湯は共同の浴場だからな。個人の都合で勝手に水を足したりしちゃダメだ。熱いお湯が好きって人に迷惑だろ?」

「でも、それじゃ熱いお風呂苦手な人は入れないよ?」

「普通お風呂に入る時は最初に体を洗って体を慣らすもんだろ。だから多少熱くても我慢すること」

「ふえ……」

ほとんど銭湯を知らない子供向けの注意書きを、箇条書きで穰子が一通りメモしていく。

これを後で脱衣所辺りに張っておけば大丈夫だろう。

それから三人で水織の実演を交えながら細かな部分を確認すると、いつしか茜色の空模様となっていた。

やはり秋の夜は早い。

何時しか人里にも提灯の明かりがぼつりぼつりと灯り始めた。

「……じゃあ、営業時間は普段は夕方から深夜まで。たまには早朝営業もして、水曜日が休業日ってことでいいか」

「うん。うわあ、何だか緊張してきちゃった。これから忙しくなりそうだね」

「これも信仰のためだよお姉ちゃん。三人で協力して頑張らないとね」

「あ、水織君。この銭湯の名前は？」

おつと。ここまで考えて肝心な事を忘れるところだった。

しかしこの銭湯の名前に関しては既に一つの候補を考えてあった。

「そうそう。この銭湯の名前なんだけどさ」

「うんうん」

ニツと笑みを浮かべ水織は銭湯の名を二人に告げた。

「静葉と穰子は秋の神様だろ？ だからさ、シンプルに『秋の湯』ってどうよ」

ちょっと気を利かせた水織会心の命名。

姉妹二人の表情は言うまでもなく、こうして幻想郷に初の銭湯『

秋の湯』は誕生したのであった。

第九話 名付けて『秋の湯』（後書き）

どうにか人里の中心で銭湯を開店した水織と秋姉妹。

現世の人間と、幻想の秋の神。

奇妙な形で繋がった三人の銭湯経営は、果たして上手くいくのだろうか？

静「私たちの物語はこれからだ」

穰「って、これじゃ打ち切りみたいじゃないの!？」

それと、幻想郷のお金の設定はわかりやすくするためのオリジナル設定です。

次回更新はやっぱり三日後くらい。

そして次回より第二章が始まります。

第十話 絵描きさんを探して

「なあ、お兄ちゃんや」

週に一度早朝営業をする日曜日。

浴場をデッキブラシで掃除をしていた水織は、湯船につかる老人にちよいちよいと手招きされて視線を向けた。

「ん？ どつたの爺ちゃん」

老人は真後ろの壁を指差して水織に言った。

「この壁、真っ白で味気ないのう。何か絵を描いたりせんのか？」

「あ……それは」

実は水織も秋の湯が出来た時からずっとこの壁が気になっていた。何も描かれていない、真っ白な壁。

本来の銭湯なら、ここにペンキ絵と呼ばれる銭湯の象徴ともいえる特殊な絵を描くのが普通なのだが、依然として秋の湯の壁は未だに白いまま。

このままでは少し、いや、かなり寂しいものがある。

「ごめんな爺ちゃん。本当は大きな絵を描く予定だったんだけど、出来上がったばかりでまだ描いてないんだ」

「そうかそうか。ちいと残念じゃのう」

「うん……」

真白な壁を見上げ水織は眉を寄せた。

やっぱり、真っ白なままじゃダメだ。

どうにかして、この秋の湯の象徴となる“ペンキ絵”を描かなくては。

掃除用具を抱えた水織は老人にごゆっくり、と一言残してから男湯を足早に出ていった。

・
・
・

「え？ 絵の上手い人を知らないかって？」

カウンターでお客さんに釣銭を渡していた穰子はううんと小さくうなつて、該当しそうな人物を思い描いたが、やがて首を振った。

「……私の知り合いには、そんな人いないかなあ」

「ん、そっか……」

「どうしたの急に。もしかして水織の趣味？ イモ判でよければ作ってあげよっか？」

「いや、いらねえ」

小さ過ぎてペンキ絵に使えるわけがないし、というか何故イモ判だ。凝った年賀状作るとき以外で耳にしたの初めてだぞ。

「あれ？ 何の話してるの？」

休憩を終えた静葉が事務所から顔を出す。

「ちょうどいいから二人にも事情を説明しようか。」

「実はさ……」

・
・
・

「なるほど。それで絵の上手い人ってわけね」

事務所に場所を移して三人で小会議。

水織は早朝の老人のことと、それから元いた世界でのペンキ絵のことについて話をした。

静葉も穰子もうんうん頷きながら話を聞いてくれている。

穰子はともかく、静葉の方はちゃんと理解しているのか少し心配だったが。

「でも、幻想郷で絵の上手い人って聞いたことないねえ」

「私も思い浮かばないな……」

「ちなみに二人とも絵は描けるか？」

「へのへのもへじなら上手いよ？」

「……それは落書きじゃないのか」

それぐらいならオレも描ける。

しかもただの絵ではなく、銭湯専用のペンキ絵となるとずいぶん勝手は違う。

仮に絵の上手い人を見つけたとしてもそう簡単に描けるような代物ではない。

「ほら、前に言ってた能力。絵が描けるって能力の人とかさ、いないのか？」

「いるんならとっくに教えてるって」

「そうだよなあ……ううん、困ったな」

水織自身も流石にペンキ絵となると描けない。

ただ絵筆を走らせる絵画とは違ってかなり大がかりな作業になる。

もちろん一人では描けないから、誰か他の人の助けも借りなくてはいけない。

「お困りのようですね？」

と、いつの間に現れたのか射命丸文が事務所の戸にもたれながら立っていた。

「うお、あなたはいつぞやの新聞記者の」

「清く正しい射命丸です。覚えてくれたんですね」

ニコニコ笑顔の文はペンをくるくる回しながら手帳を取り出すと、ぱらぱらとページを捲りやがて止まる。

何が書いてあるのだろうと水織が覗きこんだら額を叩かれた。

「ダメですよ。この手帳は幻想郷のトップシークレットです。さて、お探しの絵描きさんですが、森に行ってみてはどうでしょうか？」

「森？」

「ああ、魔法の森だね」

穰子が水織のフォローをする。

文は場所を知らないという水織のために手帳に手製の地図を書きだしそれを干切ると水織に手渡した。

この里からそう遠くない位置にあるようだ。

「魔法の森の近くに香霖堂と呼ばれる道具屋さんがあります。その店主は外の世界のものも集めておりますし、話をすれば何か力を貸してくれるかもしれませんよ？」

「香霖堂……外の世界のものも集める道具屋か」

外の世界のもの、か。かなり興味がある。

それに、いざとなれば画材やペンキを買わなければならないのだから都合がいいかもしれない。

……まあ、売っていればの話だが。

「決まりだね。香霖堂に行つてまずは道具を揃えろ」と

「先に道具を集めるつても何だかなあ。タヌキの皮算用みたいな」

先に絵描きを見つける方が順当な気もするが、水織は魔法の森へと向かうことを決めた。

「それじゃ、明日にでも行つてみるか」

「おー」

「うん。そうだね」

「いや、静葉か穰子はここに残らないといけないぞ。店番がいなくなつちまうから」

「明日は臨時休業つてことで」

「……仕方ないな」

いきなり臨時休業する銭湯というのはどうなのか。

結局何をしに来たのかわからない文を見送ると、水織は次の日に備えて早めに寝ることを決めてからボイラー室の方へ向かっていった。

・
・
・

そして迎えた次の日の月曜日。

本日の空は生憎の曇り空で、遠くには薄く黒ずんだ雲まで見える。

「こりゃ、一雨きそうだ」

「森の中なら多少は雨宿りできるから大丈夫でしょ。ほら、見えてきたよ」

人里から北東へ向かって歩き出してから十分程度だろうか。

視界の先にうっそうと広がる森林地帯が見えてきた。

入り口にいざ立つと、暗い。

森の木々がただでさえ少ない陽光を遮り、奥は一層の闇が広がっている。

顔のようにも見える樹木の表面が何とも不気味な雰囲気醸し出している。ここで肝試しとかやったらすごく楽しそうだ。

「んじゃ、香霖堂とやらを探し……お、おい。どうしたんだよ穰子」

姉妹は水織の背中にくっついたまま一向に離れようとせず、がくがくと小刻みに震えていた。

穰子が青い顔して震えた声音で告げる。

「こ、こここ恐くないよ？ 全然、まったく、これっぽっちも！」

「んじゃ手を離せよ。動きにくいっいたらぎゃああッ！？ おま、ばッ、それ関節入ってるぞオイ！？」

「穰子ちゃん、オバケとかダメだもんねえ。寝る時いつつも私にくっもごもご？」

片手で水織にしがみ付きながら、もう片方の手で静葉の口を塞ぐという何とも奇妙に器用な動きを見せると、穰子は涙ぐんだ顔で叫ぶようにしていった。

「い、いいから行って！ わ、私は水織の背中と守るからさ、水織

は365度全方位見張ってちょうだい！」

「全方位って、5度多いじゃねえか」

体にくっ付いたままの穢子を引きずるようにしながら歩きだす。

日の光があまり届かないせいか、この森に入った途端一気に体感温度が下がったような気がした。

薄闇の中でどうにか見える視界では奇妙な色をしたキノコがうねうねと身をよじっているのが見えた。

何なんだこの森。

薄気味悪いつてレベルじゃない。

本当にこんな場所に道具屋を営んでいる人がいるというのだろうか。そしてそれはいつたいどんな人物なのだろう。

興味があるような、しかし出来たら知りたくないような複雑な心境だ。

ジメジメとぬかるんだ道を適当に進んでいくと、やがて道の向こうが白み始めてきた。

光の向こうには開けた場所、それから小さな小屋が見えた。

「あれが……香霖堂って道具屋か？」

古びた外見に、所々剥がれ落ちている瓦屋根。

店先の看板はボロボロで、何か書いてあるだろうはずなのに全く読み取れない。

恐る恐るといった感じで水織が近づいて中を覗きこんでみると、店内は雑貨なのかガラクタなのか区別のつかないような物でごちゃごちゃとしていた。

「う、うめんくださーい……」

声が店内に響き意味もなく虚しくなる。

埃っぽい店内は見た目通り古びたカビと埃の匂いで包まれていた。

「……誰も、いないのか」

「だけど、いたような跡はあるよ。ほら」

静葉に指差され気がつく。

店の奥、店主の自室と思わしき部屋のちゃぶ台に、湯気のものぼる湯のみが見えた。

それはつまり中身を入れてまだ久しく時間が経っていないということ。

「ってことは、待ってればお店の人が来るのか」

「じゃあ、ちよつと待ってよっか」

「……穰子、いい加減離せ」

「も、もうくっ付いてないでしょ！」

そうしてしばらく店内でぼんやりと過ごす水織たち。

水織は店内のガラクタを適当に眺めたりして、静葉と穰子は、何処かの温泉旅館の紅葉饅頭のパンフレットに釘付けになっている。

まさか実家じゃないだろうな、と覗きこんだが見たこともないような旅館だった。

「おや、お客さんかな」

凜と澄んだ、落ち着きのある声が聞こえて振り向くと、そこには銀の髪で眼鏡の少年が何かを抱えたまま玄関で立っていた。

「よかったら、手伝ってくれるかな。一人で運ぶのは意外と苦だね」「り、了解っす」

そのまま少年の荷物を倉庫のような小部屋の奥へ運ぶと、少年は水織に微笑みながら礼を述べた。

とても誠実そうで優しくそうな少年だ。落ち着いた印象もあってか、少年は水織よりもいくらか年上に見えた。

「ありがとう。おかげで助かった」

「いえ、これぐらいどうってことないっす。えと……」

すると、少年は水織が言わんとする言葉をわかっているかのように水織の口元を手で制し、少しずれた眼鏡の位置を直した。

「自己紹介がまだだったね。僕はもりちかりんのすけ森近霖之助。ここで商いをさせてもらってる者だ」

「草津水織っす。あの、実はちょっと訊きたいことが」

「ああ、いいよ。とりあえず店に戻ろうか。神様を待たせちゃいけないしね」

霖之助と名乗った少年は水織の腋をぬけて店の方へと戻っていった。戻ってしまった。

「……あれ？ オレ、静葉たちのこと話したっけ？」

「水織君、こっちだよ」

「う、ういっす」

霖之助に呼ばれ、水織は小走りでその後を追いかけた。

第十話 絵描きさんを探して（後書き）

新章、突入。

そしてこっさり飛び出したバカテスネタ。

お気に入り登録件数40件突破、ありがとうございます。

今回、全体的にちょっと地味なお話だなあ……

二章のタイトルを更新したら、今日はパパッと寝ちゃいます。

最近片頭痛が酷くて酷くて……；

第十一話 秋の湯のペンキ絵

「なるほど。銭湯の象徴ともいえるペンキ絵を描く材料と、そしてペンキ絵の描き手を探してるわけだね」

事情を霖之助に話すと、彼は興味深そうに眼鏡の縁を少し持ち上げた。

よく見るインテリのポーズだ。

水織は眼鏡などかけないから無縁だが。

「それである、霖之助さんはペンキ絵を描ける人を知りませんか？」

「ペンキ絵か……ふむ」

瞳を閉じ、腕組みしながら思考するその姿が眼鏡と相まって様になっっている。

やがて霖之助は口を開いた。

「残念ながら、僕にも思い当たる人物が浮かばない。絵描きを能力ちからとしてる人もいないんじゃないかな」

「そ、そうっすか……」

霖之助の言葉に、水織は落胆しがくんと肩を落とす。

これで秋の湯のペンキ絵計画がふりだしに戻ってしまった。

あの爺ちゃんが悲しむ姿が脳裏に浮かぶ。

せつかくの銭湯なのに、秋の湯の壁は何も描かれない真っ白な壁。それはまるで、ジャムの入っていないジャムパンをかじるような気持ちだ。

どうにか、ペンキ絵を描けないものだろうか。

と、不意に霖之助は一つうなずきこんなことを口にした。

「でも……そうだな。僕でよければ協力しようか」
「え？」

突然の霖之助の言葉に首を上げ水織は目を丸くする。

「といつても、下手の横好き程度の画力しか持ち合わせていないけど。それでもいいかな」

「霖之助さん……！」

「霖之助でいい。さんは要らないよ」

ガツシと霖之助の手を握り（ほとんど潰すような勢いで）、水織は何度も何度も上下に振りまわした。

「ありがとうございます！これで、ペンキ絵が出来るッ！」
「そういえばさあ水織。ペンキ絵ってホントに必要なおあだあッ！？」

水織の鉄拳が穰子の脳天に直撃し、その愚鈍な言動を止める。
当然穰子は涙目で水織に訴える。

「な、何するんだ水織！？ 神様を殴るとか罰当たりだ！」
「罰当たりもくそもあるか！ 銭湯には必要不可欠なんだよ。本当は、もつと前にオレも描きたいと思ってたんだけどさ。にとりたちにまた手伝わせるのも悪いと思ったから、言うに言えなかつたんだ」
「そ、そう……なんだ。あたた……」

他者にはなるべく迷惑をかけるべきではない。

それが女の子なら尚更、自分がお世話になつた女の子なら絶対、だ。

だから水織としては自分の力で、あるいは自分の行動で解決したかったのだ。

水織の手がほどけると、霖之助は早速小さな紙と筆を取り出し、ペン回しの要領で筆をクルクル弄びながら訊ねた。

「さて、ペンキ絵として描くなら何を描くのかな？」

「あ……えっと」

ここまでやって、すっかり忘れてた、とは言いづらい。

その場で脳みそをフル回転させ浮かび上がったイメージは、ペンキ絵としては最もベーシックな絵だった。

「……山っす、山。あっちの世界じゃ、ペンキ絵って言ったら大抵富士山って言う日本で一番大きな山を描くんです」

「なるほど。幻想郷で言うなら妖怪の山と言ったところか」

すると霖之助がフリーハンドで紙に筆を走らせていく。

緩やかな曲線で山の斜面を描き、背景には雲と太陽を上らせる。

驚くべきことに、彼は下書きも何もなしに見事な水墨画を描いてしまった。

今すぐ額に飾ったらいくらか値が付きそうで、それはとても下手の横好きとか言うレベルの代物ではなかった。

「す、すげえ！？ 霖之助、絵がめっちゃ上手い！」

「それほどでもないよ。これは落書きさ。実際はこんな小さな紙に書くんじゃないかって銭湯の壁に描くんだろう？ もっと大掛かりになる」

「そ、そっか……それもそうだな、うん」

「他にはどんな絵があるんだい？ もっとイメージを膨らませて、候補を描いていこうじゃないか」

「う、うっす！」

水織が絵のアイディアを出し、霖之助がそれを描いて、二人で思案する。

この一連の流れを、彼らはこのまま夕刻まで続けることとなった。

「私たち、暇だなあ……」

「これなら、水織だけで来た方がよかつたんじゃ」

「おい、静葉、穰子も」

姉妹が退屈で不貞腐れていると、水織が数枚の紙を握りながら手招きしていた。

何の用だろうか。

二人が首を傾げていると、水織は純粹無垢な子供のよう笑いながら一枚の絵を取り出した。

「秋の湯のペンキ絵なんだからさ、当然秋の山の方がいいよな？」

「あ……」

それは、妖怪の山を背景に紅葉を散らす、秋満載の風情ある絵だった。

・
・
・

そして次の日。

この日、秋の湯は二日連続しての臨時休業となった。

里の人には迷惑をかけるかもしれないが今日だけは我慢してほしい。

「まさか昨日出たあの絵をいきなり描くとはね。驚いた」

「善はマツ八だって言うからね」

「音速で善いコトをする、か。それはそれでご利益もマツ八で来そうだ」

昨日分かったことだが、霖之助はかなり頭が切れるらしい。少なくとも水織よりは確実に。

水織としては、まるで兄のような存在で非常に頼もしい存在だった。

どうせなら霖之助のような兄が欲しかった。

……出来ればあの姉と交代してくれないだろうか。

「それにしても、これが君たちの秋の湯か。綺麗な店じゃないか」

「まだ出来て間もないですから」

「……そういえば、どうして秋を司る君たちがこの店を？」

「まあ、色々と事情が……」

「ふむ……まあ、余計な詮索はしないでおくさ。さ、作業を始めようか」

香霖堂から持ってきたペンキ絵用の特殊な塗料や大きな筆などの画材を抱えると浴場へと向かう。

今日はもちろん誰もいないしお湯も出していないため、大浴場はひんやりとした空気で満ちていた。

向かって正面の壁、湯船のすぐそばにある真っ白な壁。

霖之助は湯船の中に道具一式を置くと早速支度を始めた。

水織もジャンパーを脱いでアンダーウェア姿になる。

「う、ちっと寒い」

「むしろ着てた方がいいんじゃないのかい？ ペンキが肌について

しまつよ」

「いや、このジャンパーは気に入ってるんで」

丁寧にジャンパーを折り畳んで邪魔にならない場所に置く。

霖之助はペンキ絵専用のペンキを用意していてバケツにそれぞれの色ごと分けて流し込む。

戸を全開にして換気扇も回し空気の循環は確保。

そして、この秋の湯に描くペンキ絵のラフィラストのメモを取り出すと、二人して壁とイラストとを何度も見比べる。

「それで……どこから描けばいいのかな」

「えっと、確か」

頭の中の記憶を掘り起こし思い出す。

ペンキ絵は細かな下書きをあまり必要せず、フリーハンド且つ大雑把に描く。

例えば、最初は山の斜面のラインだけだとか、背景の雲の位置を適当に目印付けるとかその程度だ。

ふと、ペンキ絵は芸術ではなく男気だ、とか委泉が楽しそうに言っていたのを思い出した。

そういえば祖父は妙に銭湯というか、お風呂が好きだった。

別に水織は嫌いではないが、かといってそこまで情熱注ぐほどでもない。

そんな自分が今ペンキ絵を描こうとしていると思うと、何だか不思議な心境だった。

「ホント適当で大丈夫っす。最初に背景ちょこつと描いて、それから妖怪の山のライン描いて色をつけて」

「なるほど。じゃあこんな感じでいいか」

黒のペンキの入ったバケツに大きな筆を浸すと、霖之助は早速筆を走らせた。

背景には茜色の空と雲、それから紅葉を描く予定で、霖之助はそれらのだいたいの位置に薄く描いて、さらに山の斜面を描いていく。流れるような動作に水織は思わず見とれてしまっていたが、慌てて背景用のペンキを取り出しバケツに注ぐ。

水織も脚立を使って壁の上部に雲を描いていく。

その下で霖之助は妖怪の山の斜面を描き終わり、今は木々の部分を塗る色を調整していた。

「あ、ちょっと待ってください」

「ん？ どうかしたかな」

左右を飾る紅葉の葉を描こうとしていた霖之助を水織が止める。

「えっと、ペンキ絵は遠い方から順に塗り重ねていくのがベストだと思います。だから最初に山と背景を完成させて、それから紅葉なんかの飾りを」

「ん、わかった。じゃあ僕もそつちを手伝うよ」

二人で上から下へと少しずつ絵を描いていく。

背景は空色に、山の斜面を紅と、所々にイチヨウの黄を混ぜながら染める。

段々と出来上がっていくペンキ絵を見つめながら、ここまで全く仕事のない姉妹は呆けるようなため息をついていた。

「しかし、やることないわね……ちょっと面白そうなのに、見てるだけじゃつままないわよ」

「……あの絵、綺麗だね」

「そりゃ、私たちの秋の山を描いてるんだから綺麗に決まってるよ」

「だけど、今年はやっぱり色が薄いような気がして……」
「気にし過ぎだよ。信仰とかそんなことより、ホントはお姉ちゃんがネガティブ過ぎるからいけないんじゃないの？」
「そう……かなあ？」

実際、人里から見える妖怪の山は見事なまでに紅一色で、静葉の言うような色の薄さなど微塵も感じられない。

やっぱり、姉の考え過ぎなのではないのだろうか。
役目を終えた冬になれば二人して落ち込むことはあるが、今はまだ冬じゃない。

「あ、そうだ。お姉ちゃん、私ちよつとだけ出かけてくるね」
「え？ うん……？」

何故か穰子は浴場を出て何処かへと行ってしまった。
私も一緒に、と思ったがペンキ絵のことが気になって結局追い掛
けはしなかった。

そうこうしているうちにペンキ絵はどんどん出来上がっていく。
いつの間にか半分以上出来上がっているではないか。

「わあ……すごい……」
「あれ？ 穰子は？」
「さっきどっか行っちゃった」
「そうか。ここまでの感想でも聞こうかと思っただけだな」
「綺麗だよ。すっごく。本物より、綺麗」

静葉の目の前で広がる、紅に染まる妖怪の山は出来かけではあつたが本当に綺麗だった。

本心での発言だったのだが、水織はぶんぶん首を振りながらそれを否定した。

「いやいや。本物には負けるさ。絵で見る妖怪の山と、目で見る妖怪の山は別物なんだし」

「負けず劣らず、つてとこなんじゃないかな。僕も初めて描いたけど、なかなか良い出来だと自負しているよ。後は、残った部分を塗ってそれで完成だ。男湯が終わったら女湯も描かないと」

そして二言三言適当に言葉を交わすと二人は再び作業に取り掛かってしまった。

仕方なく静葉は壁から距離を置いて二人の作業を見つめた。

「お姉ちゃん」

「穰子。それは……？」

いつの間に帰ってきたのか、穰子は浴場の戸口で息を切らせながら立っていた。

手には何やら良い匂いのする紙袋を握りしめていた。

多分、穰子の大好物の焼き芋だと思う。

「水織も、あの人も頑張ってるのに何にもしないのって悪いと思っただからさ。差し入れにして」

「穰子は偉いなあ。私なんて何も出来ないのに……」

「じゃあ、お姉ちゃんも手伝って。お茶も淹れてあげたいからさ」

「あ……うん。わかった」

そして水織たちが男湯の絵を描き終わったのを見計らって二人は焼き芋とお茶の入った湯のみを差し出した。

「さ、差し入れです！」

「お、ありがと静葉。はい、霖之助のも」

「ああ、ありがとう。ちょうど喉が渴いていたんだ」

出来上がったペンキ絵を見上げながら水織はお茶を一息で飲み切ってしまった。

そして受け取った紙袋から漂ってきた甘い香りに水織は苦笑を漏らした。

「……この焼き芋は穰子か。お前本当に芋好きだな」

「い、いいでしょ別に！ 文句があるなら返してちょうだい」

「しかもお前、何を勘違いしたのか三つしか入ってないぞ」

「ええ！？ そ、そんなハズは……」

紙袋から出てきたのは小振りの焼き芋が三つ。

穰子が勘違いして三つと頼んでしまったのか、それとも店主がうっかり間違えてしまったのか。

何にせよここにある焼き芋は三つだけだ。

「ご、ごめんなさい！ あの、えっと、また買ってくるから」

「ちよつと待った」

駆け出そうとした穰子の肩を掴むと、水織は自分の焼き芋を半分に割って差し出した。

「オレの半分やるからさ。それでいいだろ」

「でも、それじゃ」

「いいって。それに、たかが焼き芋一つで泣くな」

「だ、誰が泣いて……！」

声を荒げた瞬間、穰子の瞳から一粒だけ雫が零れ、水織はニツと笑い、穰子は顔を深紅に染めた。

「差し入れ、ありがとな」

「あ……」

それだけ言って水織は壁の方へ戻っていくと、早々に後片付けを始めた。

ポカンとその場に立ち尽くしていると、背後から静葉がニコニコしながら耳元で囁いた。

「どうしたの？ 顔、赤いよ？」

「そ、そんなコトないよ！？ ちょっと、お芋が熱かっただけで」

「いいなあ。私も半分こしてもらいたかったなあ」

「お、お姉ちゃんってば！」

ただでさえ赤くなっていた顔をさらに赤く染めると、穰子は逃げ出した姉を追いかけて浴場を飛び出して行った。

第十一話 秋の湯のペンキ絵（後書き）

最初、ペンキ絵は妹紅に描いてもらう予定でしたが、そもそもどうやって彼女と会うのだろうか、と考えたらボツになっちゃいました。妹紅だと豪快に描いてくれそうだったんだけどなあ……w

ひとまず、これで秋の湯のペンキ絵は完成ですかね。

さて、これからお話はどう転がっていくのか。

拙い文章で申し訳ないですけど、乞うご期待なのです。

むむむ……穰子のキャラがぶれだしてきた；

第十二話 秘湯の噂

それから二日ほどで営業を再開したその日。

水織は出来上がったばかりの秋の湯のペンキ絵を見上げながらデッキブラシの上で器用に頬杖をついていた呆けていた。

別に掃除をサボっているとかそういうわけではなくて、ただ何となく、元いた世界を思い出していたのだった。

「あれから結構経ったけど、姉貴や葉月さんはどうしてるんだろう……？」

この世界に来るといふか、半ば無理やり引きずり込まれたといふか、そのせいで家族や親しい友人には何の連絡も告げていない。

向こうじゃ今頃大変な騒ぎになっているのではないだろうか。

突然、一人の人が消えたのだ。

水織の実家がどんなに田舎だとしても警察は動くだろうし、少なくとも新聞にだってなっているはずだ。

旅館を経営する姉貴の迷惑になっていなければいいが……

「こら水織！ サボるな！」

「サボってねえよ！ ちょっと考え事してたんだ」

頭の片隅で元の世界のことを考えながらデッキブラシで床をガシガシと乱暴に擦る。

今日から仕切り直して銭湯を始めるわけだから綺麗にしておかなければならない。

しかも今日は霖之助が秋の湯に遊びに来ることとなっている。尚更綺麗にしておかねば。

そして浴場の掃除を終えて石鹸の補充などの適当な雑務も済ませ

ると、水織は自分の担当しているボイラー室へと向かった。

銭湯のお湯を管理する大事な場所。

利用してくれるお客さんの好みもあるだろうが、ひとまず温度は熱めの42度に。

来てくれる子供も最初は熱いだの何だの文句を言うが、結局最後には牛乳片手に笑顔で帰っていく。

その笑顔を見ると、ちよっと嬉しいというか、楽しいというか。

委泉も、こんな気持ちを体験していたのだろうか。

「さて、と」

ボイラーの調整以外でこの部屋に用はないため外に出て秋の湯正面に立つ。

妖怪の山に沈みかけた夕日が黄昏色に染まっている。

もう間もなくすればお客さんが秋の湯に足を運ぶころだ。

「水織君、夕御飯の支度出来たよ」

「おう、わかった」

夕食を済ませたら早速営業再開だ。

ほんの少し気合いを入れ直すと、水織は自宅の方へと向かった。

・
・
・

「秋の湯に、ようこそ」

「いらっしゃいませ！」

秋姉妹が笑顔でお客さんをお出迎え。

そういえば幻想郷の人たちにとって、秋の神様に微笑みかけられながら暖簾のれんをくぐるというのはやはり神聖な気持ちになるのだろうか。

でも、普通に接する人もいればちゃんとお辞儀をしたり、中には銭湯の料金とは別に賽銭を置いたりする人もいる。

しかし、これって銭湯としてはどうなのだろう。

神様商法ってちょっと卑怯なんじゃないだろうか。

「やあ、水織」

「あ、霖之助。こんばんわ……ん？」

すると、霖之助の後ろから見覚えのある赤いリボンの少女と、見覚えのない金の髪の少女が現れた。

「リア充爆発しろ」

「な、何でそんな怖い顔してるんだ水織……？」

「おーおー、ここが銭湯ってヤツか。へえ……」

見覚えのない方、金の髪の少女は不思議な格好をしていた。

御伽噺の魔法使いがかぶるような三角帽子。

服は黒地に白いレースがあしらわれたドレスのような、ローブのような出で立ち。

一見すると、典型的な魔女のような姿だった。

「いつつもシャワーばっかだと風呂も恋しくなるからよ、銭湯ってのはありがたいぜ」

「魔理沙、ちゃんと金は払いなさいよ」

「銭湯ってのは読んで字の如く金を払うもんなんだろ？ それぐらいは図書館で予習済みだぜ。お前こそちゃんと払うんだろっな？」

「水織、私はツケで」

「銭湯でツケは利かねえよ!？」

「でも紫はほぼツケだと言っていたのだけれど」

「それはそれ。これはこれ」

静葉が水織の言葉に反応して台帳を掲げてきた。

「え〜？ 水織君、紫さんの料金ってツケだったの？」

「色々お世話になってるし当たり前」

「あ、水織!」

「？」

「そういえば、私も前に一度アンタを助けたわよね」

「し、しまった……」

時既に遅し。

霊夢は我が物顔でカウンターを越えるとずんずん脱衣所に入って行ってしまった。

もちろん料金など微塵も出さないで。

霖之助の苦笑が横で聞こえる。

「ま、まあ、彼女の分は僕が払うから。気を悪くしないで」

「あ、ずるいぞ香霖。それならアタシの分も払っておいてくれよな
じゃ」

「おい！ 魔理沙の分まで払うとは一言も」

脱衣所の戸がピシャリと閉められその声は届かず。

霖之助の苦笑いと、水織の鋭く突き刺さるような視線だけがこの場に残る。

「ご、誤解してるようだけど、彼女たちとは何の関係もないからね？
ただの友人だ」

「そういうことにしておいてやる」
「手厳しいなあ……八八」

三人分の料金を払って脱衣所に向かう彼の背中へ、心無し猫背のように見えた。

……しかし、まさかこの世界にもリア充がいるとは思わなんだ。

「あ、売り物の牛乳補充しとかないとな」

コーヒー牛乳、フルーツ牛乳は鉄板だ。

風呂上がりのこれのためだけに秋の湯を利用してくれるという人もいるくらいだし補充は欠かせない。

個人的にはイチゴ牛乳が好みなのだが何故か銭湯では見かけない。何故だろうか。

「だ、ダメですって！ まだ痛みが引いてないのに歩いちゃ……！」
「……何だ？ 女の子の声？」

倉庫から牛乳の入ったケースを持ってきてカウンターに戻った時、甲高い声と口論するのが聞こえてきてふと手を止める。

声は秋の湯の玄関から聞こえてきて、水織が早足で向かうところには見覚えのある老人と少女の姿があった。

「あ。爺ちゃん」

「おお、兄ちゃんか。こんばんは」

水織の呼びかけに、その老人はニカツと歯並びの悪い笑顔で振り返ってみせた。

しかし、何故か後ろに立っている少女はご立腹の様子で、老人の腕を握ったまま放すことはなかった。

「まだ動いちゃダメですって！ 家で安静にしてないと危ないですよ！」

「たかがぎっくり腰程度で大袈裟なんじゃ。わしゃ別にこのぐらい何でも……はうツ！」

「じ、爺ちゃん!？」

痛みのせいか、老人は苦悶の表情を浮かべるとその場でぐらりと揺れ崩れてしまった。

少女がその体をどうにか受け止め支え、水織も肩を貸した。

「すみません。ご迷惑をかけて」

「いいよ。気にすん……?」

改めて少女の姿を見つめ思わず言葉に詰まる。

幻想郷の住人の、一部例外を覗いてほとんど和服や着物のような古めかしい姿をしているはずなのに、彼女の姿はどう見ても学校の制服のようだった。

セーラー服じゃなくて、ブレザータイプの。

そういえば水織も幼稚園の時に一度着たような覚えがある。

いや。特筆すべきは衣服だけではない。

彼女の頭には何故か、網タイツ姿で、胸ぼーんの腰きゅッなお姉さんが付ければバッチシ似合いそうなウサギの耳がピコピコ揺れているのだ。

ブレザー姿にウサ耳とはどういうセンスだ。

この老人に付き添っているとはつまり……

「あ、アンタこの爺ちゃんの孫娘か？」

「え、ええ!？ 違いますよ。私は鈴仙と申します。今は、お師匠様のお仕事の手伝いでこの方のお薬を届けに来たんです」

「薬……お医者さんってことか」

「えっと、まだ見習いのようなものですけど」

ブレザーでウサミミで看護婦見習い？

どっかの大きなお友達向けな属性だなオイ。

「この人、腰を痛めているというのに銭湯に行くんだと聞かなくて」「湯治というものを知らんのか！ 腰も温かくしてりゃ治るわい、ツつつ……」

「だから、無理しちゃダメだって……」

痛みを伴い尚も立ち上がるうとする老人を鈴仙が制する。

言動は元気だがその額にはかなりの汗が滲んでいる。相当な無理をしているのは火を見るよりも明らかだ。

「あの、どうしてそんなに銭湯にこだわるんですか？ 前はそんなことなかったのに」

「もちろん、出来上がったばかりのペンキ絵を拝みに行くためじゃよ」

「爺ちゃん……」

水織の心がブルツと震える。

早朝に会ったあの時から、この老人は秋の湯のペンキ絵をそこまですれしみにしていてくれたのだろうか。

でも、何故だ？

幻想郷に銭湯の文化はないはずで、故に素人が見てここまで感動されるほどのものだろうか。

……いや、違う。

水織は心の中で首を振った。

そんな細かな理屈とかはどうでもいい。

今は、この老人のために出来ることをしてやればいいのだ。

「鈴仙、ちょっといいか？」

「はい？」

「オレがこのまま爺ちゃんを担いで行くから、今日だけ勘弁してもらえないか？」

「いや、でも症状が悪化したらお師匠様に怒られちゃうし……」

「医者の見習いだって言ってたっけな。一つだけ教えてやる。世の中にはな、湯治とじっていう治療方法があるのさ」

「湯治……？」

鈴仙にとっては知らない言葉だろうし聞き慣れない言葉だろう。

首を傾げるのも無理はない。

と言っても、水織自身もそこまで詳しく知っているわけではないが。

「銭湯とかで体を温めるとな、筋肉痛とか皮膚病とかに効果があるのさ。昔っから伝わってる伝統的な健康法ってヤツだ」

本当は、半分嘘で半分事実なのだがこの場を誤魔化すにはちょうどいい。

少なくとも、目の前の鈴仙の瞳がキラキラと輝いているから効果はあつたみたいだし。

……？ こいつ、本当のウサギみたいに紅い目してる。

「湯治……ですか。今度、お師匠様にも質問してみないと」

「今日だけ勘弁してくれ、な？」

鈴仙は渋々と言った感じで小さく頷くと老人を水織に任せ、夜の人里を去っていった。

しかし、こんな夜に女の子一人で大丈夫だろうか。
水織の時同様、妖怪に襲われなきやいいが……つと、鈴仙も気になるが今はこの老人が最優先だ。

「でも、銭湯のお湯じゃあんまし効果ないんだよなあ。結局はただのお湯だし」

「そうじゃのう。せめて、噂に聞く鬼の秘湯ならば、効果はあるかもしれないん」

「鬼の秘湯……？」

「少し前に、新聞で見た噂なんじゃがのう」

少し前、この人里から遠く北東で間欠泉が吹きだすという事件があったらしい。

その一連の騒動の中、地底世界のある場所で偶然小さな秘湯が出来上がったという。

しかし、そこはどうも鬼の住処となっているらしく、現状ではほぼ鬼たちの占領状態なのとか。

いったいどんな物騒な記事だ、と言いかけてあの新聞記者を思い出した。

そういえば、静葉たちが彼女を幻想郷最速の新聞記者だと言っていた。

つまり、逃げるのも容易だったということだろうか。

実はとんでもない新聞記者なんじゃないか、アイツ。

「そんな秘湯にでも入れれば、こんなぎっくり腰なんぞあつという間に治るんじゃないかなあ」

「そうだなあ……」

老人の手伝いをしながら、水織は少し思考を巡らせていた。

この秘湯とやら、上手く活用できないだろうか。

例えば、そのお湯を……いや、ダメだ。

「いくらなんでも、パイプ使うとしても距離が遠すぎる。未来から来たネコ型ロボットじゃないんだし、空間と空間繋げるなんてこと出来な……ん？」

水織はあることを思い出す。

この秋の湯を、たった一晩で妖怪の山から人里まで移動させた彼女を。

もしかしたら、彼女に協力してもらえれば何とかなるのかもしれない。

「……明日、ダメ元で聞いてみようか」

老人の歓声が聞こえる脱衣所の中、水織は神出鬼没な八雲紫とコンタクトを取る方法を考えていた。

第十二話 秘湯の噂（後書き）

静「どうもこんばんは。今日は夜斗さんの代わりに、私たちがあ
とがきを担当させていただきます」

穰「え？ アイツは何処行ったのよ？」

静「んつとねえ、なんか小綺麗なスーツ着て『オレ、千早をトップ
アイドルにしてくる（キリッ』とか言っ出て出かけちゃった」

穰「……千早って誰よ？」

静「さあ……？」

穰「せっかく昨日誕生日だって聞いたから、スイートポテト作っ
持ってきてやったのに」

静「残念だねえ。さて、次の更新は10月31日更新予定です」

穰「うん。お楽しみに」

静（穰子、タグには気づいてないみたい……くすくす）

第十三話 繫げ、スキマパイプライン

「おはよう水織君。さっそくで悪いけど、朝一番のお風呂を頂いたわ」

早朝営業の日曜日。

今の今まで水織が何とか会えないかと画策していたのに、当の八雲紫は水織のそんな努力をあざ笑うかのような形であっさりと秋の湯に現れた。

朝風呂を浴びてさっぱりとした顔で、白く滑らかな肌が輝きを増してつやつや輝いている。

「今日も素敵ですね紫さん」

「ふふふ。褒めたって何もあげないわよ？」

店の冷蔵庫を勝手に開けて牛乳を飲む。

腰を片手に一気飲みする姿が眩しい。美人は結局、何をしても美人なのである。

「……あのー、お金は」

「ここに秋の湯を移設させたのは誰の」

「あーあーわかりました。ツケですなえー」

半ば投げやりに呟き穢子が台帳に赤線を引く。

どうやら紫のツケは全部すっかりとメモをしているらしい。

……そういえば、どっかの高校生もパシリにされた時のツケをメモしてたっけ。

同じように返す時は恐ろしいのだろうか。

「それで、私に何かご用？」

「ああ、はい。実はちよつと訊きたいことが」

水織は老人から聞いた地底にあるという鬼の秘湯のことを話し、それからそのお湯をどうにか紫の力で引けないものかと訊ねた。

一応、引く、という言い方でどうやら通じたらしく、紫はふんふんと頷きながらほんの少しずつ口の端がつり上がっていった。

「なるほど……つまりこれを利用すれば、私はただで温泉に入り放題、と……」

「いや、アンタなら勝手に地底世界にでも下りりゃ入れるでしょう」
「よ」

「え、やだあ？ 地底の世界とかこわあゝい」

静葉、ティッシュ。

「……ご、ごほん！ それで、あの、出来るんですか？」

「そうねえ。ただ空間を繋げるだけだし他愛もないでしょ」

「ありがとうございます！」

「あら、まだ手伝うだなんて言っていないわよ？」

「づぐっ……」

期待させて、あっさり落とされた。

それはまるで紫の手の上で転がされてるような気持ちだったが、あの老人のため。

ここで簡単に引き下がるわけにはいかない。

「え、えつと。毎日牛乳をサービスで付けます！」

「づうん……」

首を縦に振らない。

というか、これは毎日やられてるから意味がないな。

「じゃあ、オレが毎日お風呂上がり紫さんをマッサージうぼがあッ!?」

「変態水織いッ!」

「そうねえ……でも、マッサージチェアとかは欲しいわねえ。あの河童にでも依頼しましょうか」

穢子にバックドロップ喰らってる間に話が違う方向に反れた。

……それにしても、どうにか紫の首を縦に振らせるような良いアイデアはないものだろうか。

「あ、そうだ」

天地がひっくり返った状態の水織が思案しているとポンと紫が手を叩いた。

「温泉タマゴ。私あれが食べたいわあ」

「温泉……タマゴ?」

「ああ! それなら私も食べてみたいかも」

「ええ……? 温泉タマゴなんか食べたいの?」

目を輝かせる紫と穢子を交互に見ながら水織は姿勢を直して強打した首をさする。

死ぬかと思っただが、一応折れてなかった。うん。

「そうよ。温泉と言ったら温泉タマゴでしょ」

「私も、一度でいいから食べてみたいと思ってたんだあ。水織、温泉行けば作れるの?」

「一応作れるけど……そんないいもんじゃ」

ドン！ とデカイ音がしたかと思うと、いつの間に用意したのか、カゴいっぱいのお卵と何故か雌鶏一羽。

卵はともかく、雌鶏は必要ないだろうと思うのだが。

「じゃあ、水織君と貴女たちで行ってらっしゃいな。地底の大穴の場所は知ってるでしょう？」

「いや、でも店はどうするんだよ」

「臨時休業だね」

「……開店してから臨時休業多いなこの銭湯」

迷惑ではなくお湯をかけるのが銭湯なのだが。

何だかお客様に申し訳ないな。

すると、紫が水織の方を見つめながら小さく唸っていた。

「あれ？ どうかしたんですか？」

「いやね、流石に何の装備も無しに地底世界に行くのは危険だと思っただから」

「お、オレのこと心配してくれるんですかッ!？」

「ううん。何か武器かなにかを持たせないと思うってね」

「……武器？」

そして思い出したのだが、水織たちが今向かおうとしている場所は鬼の住処となっている地底世界。

確かにそんな場所に丸腰で行ったら命の保証はない。

……というか、今頃になってそんな危険な場所に向かうと思ったら体が震えだした。

一歩間違えたら死んでしまう。

少なくともこの世界には本物の妖怪がいて、神様がいて精霊がい

る。

そんな世界だから、この世界の鬼も、恐らく水織の頭の中にある通りの筋骨隆々な化け物であるはず。

「あの、そんな危険な場所に静葉や穰子、ましてやオレなんか行つて大丈夫なんですか？ 普通にオレ死んじやうんじや」

「そうならないために武器を用意するの」

そこはどちらかと言えば防具を用意するのでは？

まさか攻撃は最大の防御とか言っくんじやないだろうな。

それとも紫は、RPGで言つところの、防具よりも武器に金をかけるタイプなのだろうか。

水織の不安など露知らず、紫は適当に用意すると言つて右手を薙ぐと、また何処かへと姿を消してしまった。

静葉も穰子も、別段恐怖を感じているようには見えない。むしろ嬉々とした表情で談笑している。

この先、大丈夫なのだろうか。

「ああゝあ。どっかに緑色の自分が一つ増えるキノコ落ちてないかなあ……」

出来れば本当に欲しい。

今ほどあの配管工兄弟が羨ましいと思つたことはない。

・
・
・

そして迎えた次の日月曜日。

臨時休業の立て看板を置いた秋の湯は何となく寂しそうな顔をし

ているように見えるのは、気のせいなのか、それとも水織の心情なのか。

水織は紫に家で待っているとわれ待っているのだが未だに姿を見せない。

姉妹の方はもう少しすれば来るだろう。

欠伸をしながら玄関の前で待っているとトントン、と肩を叩かれ
回れ右。

「お待たせ」

「うお、紫さんか。おはようございます」

今日も変わりなく美しい。

朝日を反射する金の髪はライ麦畑の穂のようにキラキラと輝いていた。

「それで……そうそう。貴方の武器持ってきたわよ」

「あ、ありがとうございます……す………」

ほい、紫に手渡されたものは、元いた世界でも見覚えのあるものだった。

木製の棒にグリップ、先端は西洋の剣のような先端をしていてスプーンのように僅かな窪みがある。

それは、それは地面を掘る時にあれば間違いなく役に立つこと間違いないのアレ。

何処からどう見ても、アレ。

「……………これ、スコップですよね」

「そうよ。スコップ」

冷たい風が一陣雑いで沈黙が流れる。

早朝だというのに、水織の思考回路はオーバーヒート寸前まで加速する。

どうしてスコップなんだ。これって武器じゃないし、というかただの道具、道路工事のあれだよ。これが武器っていったいどんな世界だ。緑色の勇者のように魔法弾跳ね返せってか。地面掘ってお金稼げってか。ひっくり返してみても斜め四十五度から見下ろしても至って普通の剣スコップだよコレ。え？ え？ いったい紫さんは何を考えているんだ？ ああ！ わかった。このスコップでボケろってことだな。つまり紫さんは、早朝からオレのウィットに富んだジョークを期待してるんだな。そうと決まれば何か一芸を披露せざるを得ない。そしてあわよくば紫さんが水織君キヤーステキー！とか言ってくれるんじゃないかと。あれ、ハッピーエンドなんじゃないかコレ。

「……結婚してください」

「いったい朝から貴方は何を考えてるのかしら？」

それはこっちの台詞だよ！ とか死んでも言えない。

死んだら言えないけど、絶対言えない。

一応水織は紫に異論を申し出る。

「あの、普通武器って言ったらもっとこつ……殺傷能力のあるものをですな」

「スコップで刺されたら痛いわよ？」

「そうですね……もっとこつ、剣とか槍とか、そういうのを武器って言うんじゃないんですか？」

「何の技術も持たない人間が、いきなりそんなもの振り回したらそれこそ危険よ」

「そりゃあ、そうですね……」

紫の言うことももつともなのだが、だからって何でスコップなんだ。

これなら洗濯物を干す物干し竿の方がマシな気がする。

「あ、水織く〜ん」

そうこうしているうちに秋姉妹も駆けつけて全員がそろった。

「何でスコップなんて持つてるのさ」

「いや、紫さんに武器だつて渡された」

「はあ………？」

「あそうそう。水織君にこれを渡しておくわ」

紫は胸元をこそごと探ると小さな二枚の札を取り出した。

あ、霊夢から貰った術符とか言うヤツだ。

そんなことより胸元からそんなもの出さないでください。

「静葉、ティッシュ」

「はい」

二枚の札は何やら異なる紋様が描かれており、紫色の縁に一方は赤い字で、もう一方には青い字で書かれていた。

紫がそれぞれの術符を指差しながら解説。

「これは私の能力に似せた術符で、この二枚で空間を繋げるの。赤いほうが入り口で、青い方は出口よ」

「へえ………何か、天狗の抜け穴思い出しちゃったな」

「何それ？」

「いや、何でもない」

あつちはテープなんだけど。

受け取った術符はジャンパーの内ポケットにしまい込み、水織は温泉タマゴ用のタマゴが入ったリュックサックを背負う。

「じゃあ、気をつけて行ってらっしゃい。良い報せを期待してるわ」

「はい。必ず紫さんの元まで帰ってきます」

「温泉タマゴ、忘れないで頂戴よ。私の友達も楽しみにしてるんだから」

「んじゃ、れつつごー」

紫さんの友達？

いったいどんな人物なのだろうか。

多分おそらくきつと紫さんと同じくらい美人なのだろうけど、何だか想像つかない。

「あの、水織君」

「ん？ 何だ……あれ？」

振り返ると、いない。

静葉と穰子の姿が影も形もなくなっていた。

くすくすと小さな笑い声が頭の上から聞こえてきて見上げると、二人はふわりふわりと飛んでいた。

「歩いてちゃ日が暮れちゃうよ。ほら、掴まって」

「お前らはいいいよなあ……オレも空を飛んでみたいや」

「ほら、私とお姉ちゃんの手に掴まりなっ」

「いや、待ってくれ。もう少し」

「え？ 何で？」

「もう少しでパンツ見えぶふッ！」

穰子に踏み潰された。

大きな足跡とあざが出来てパンダ顔になった水織は、二人の手を借りて空へ飛び上がると地底へと続く大穴を目指した。

「あれが、地底の大穴……」

人里からまっすぐ北東。

綺麗に円形にぽっかりと口を開く大空洞は、まるでブラックホールのように何もかもを吸いこんでしまいそうな闇が広がっていた。

第十三話 繋げ、スキマパイプライン（後書き）

すげえタイトル、そして温泉タマゴのためだけに手助けしてくれる紫さんって……

夜「そして、私は帰ってきたあ！（ＣＶ大塚明夫風味）」

静「お帰り〜」

穰「で、今度は私たちをトップアイドルにしてくれるの？」

夜「ティンと来ないから無し」

穰「……解せぬ」

静「ほら、あそこで紫さんがプロデュースしてほしそうな目でこっちを見てるよ」

夜「え、アイドルって少女しか（ピチューン）」

……し、しかし。もし東方キャラでアイマスやるんなら1、早苗さん2、椛3、幽香だな」

穰「歌って踊れる幽香さんを想像できないです」

夜「奇遇だな。俺もだ」

お気に入り登録、評価ポイントありがとうございます。

ホントはあてな主役のハロウィン短編書くつもりだったんですが、手違いで消しちゃった（死にてえ……

次回更新は11月3日。

いよいよ水織君の能力開花か？

そして地底で待ち受けるものとはいったい……！？

感想やご意見、作品作者に対する質問などなど、サイト登録の有無関係無しに書けるよう設定してありますので。何かあればいつでも何でも気軽に書き込みくださいな。

それでは、待て次回。

第十四話 姐御肌な鬼娘

「ゆっくり下りるからさ、ちゃんと掴まってよ」

麗らかな日の光すらも吸い込み、漆黒の闇へと帰ってしまう大空洞。

二人の手を強く握りしめながら三人でゆっくりと降下し、水織はその闇の向こう側の世界に期待と不安の両方がない交ぜになったような気持ちで臨んだ。

大空洞の闇が文字通り地の底から這い上がるようにして広がり、不意に上空を見上げると静葉と穰子の後ろには針で空けた穴のようなほんの小さな光源だけが見て取れた。

いつの間にかこんなに下りたのだろう。そして、いつになったら地面に着くのだろう。

自分の足が地に着かないこの感触は初めてで落ち着かない。

そうした不安に駆られていると、やがてトンと水織の靴が地面に触れ同時に姉妹の手が離れた。

「なあ、明かり……あれ？ 明るいぞ……？」

確かに自分たちは闇の中を降下していたはず。

それなのに自分の手足も見えれば影だつて伸びている。

視線を上げると、何やら白い光を放つ物体が洞窟の天井をまるで夜空を埋め尽くす満天の星空のように輝いていた。

「そういえばさ、鬼の秘湯って何処にあるんだろうな」

「え？ 水織知らないの？」

「いや、知らねえよ。オレはあの爺ちゃんからそういふ噂があるって聞いただけだし」

「……そういつの、もっと早く言って頂戴よ。はあ」

穰子が心底呆れた様子でため息を吐く。

しかし、いつまでもここに留まっていたとしてもしょうがないので先を往くことにした。

妙に綺麗な洞窟の道を歩きながら水織は二人に訊ねた。

「なあ、ここってどういう場所なんだ？ 鬼の住処とは聞いていたんだけど……」

鬼どころか、虫の一匹すら見当たらない。

時折前方から生ぬるい風が拭いてくるだけで、特に危険な場所には到底思えなかった。

こんな洞窟があれば、家の近くになれば秘密基地にして遊びたいような気もする。キャンプとかもいいかもしれない。

「ここは地霊が住まう地底の世界よ。大昔は地獄として機能していたの。前に一度、間欠泉と一緒に地霊が沸き起こる異変があったのだけれど、霊夢や魔理沙がこれを解決したの」

「じ、地獄……？ っていうか、異変って？」

「んつと、この世界で言う事件って思ってもらえばいいのかな？」

「そう……か。あの霊夢って凄いヤツなんだな」

あと魔理沙ってヤツも。

しかし二人ともそうは見えないんだけどなあ。

そのまま何度か質問を繰り返しながら道を歩いていくと、やがて目の前に人工的な道が現れ雰囲気が一変した。

石を敷き詰めて出来た長い道を抜けると、やがて目の前に巨大な木造の橋が見えてきた。

「立派な橋だなあ。元いた世界じゃもうこんな見れないと思……」

橋の中央に人影を見つけ足を止める水織。

人影はどうやら少女らしく、地底の明かりに輝く金の髪が見て取れた。

コツ、コツ、と橋を鳴らしながらゆっくりとこちらに近づいてくる。

「この地に何の用かしら。人間と、それから……？」

水織と、それから横の姉妹を見つめ訝しげな表情をする少女。

色の薄いやや地味な服装で、何故か彼女の耳は尖っていた。

……たぶん、俗に言うエルフ耳ってヤツだ。実物を見るのは初めてだった。

若干キツめな視線に威圧するような声音、こちらを警戒しているのは明らかだった。

「えっと、こんにちは。それとも、こつちじゃこんばんはなのかな？」

「呑気な挨拶はいいのだけど……貴方達のような者が何の用かしら。少なくとも、ここは貴方達が来るような場所ではないわ」

「え、えっと……水織君、お願い」

「またかい。……えっと、実はその」

目の前の少女にこちらの事情を全て話してもよいものか少し悩んだが、ここの地理に詳しくないこちらとしては何か手掛かりが欲しい。

水織は外から来たということ、それから自分たちが経営している銭湯のこと、ここに来た目的、一通りのことは全て話しそして本題

へ。

「それでき、鬼の秘湯っていうのを探してるんだ。何か知らないか？」

「鬼の……？ 私は心当たりがないからわからないわ」「そっか……」

でも、と少女が付け加え答える。

「知り合いに鬼ならいるから、彼女に聞いてみたらどうかしら」「ホントか？ 助かるぜ……？ ん？ かの……じょ？」

聞き間違いだろうか。

目の前の少女は、鬼を、彼女と言っていたような。

鬼にも性別があるのか？

水織が知っている御伽噺の中で、女の鬼というものは見たことも聞いたこともないのだが。

トラ柄パンツに晒sunでも巻いているのだろうか。

「この時間ならいつもの酒場で飲んではずだから……いいわ。少しだけ手伝ってあげる。別に私たちの力目当てってわけでもないみたいだし」

そう言うと少女はついてきてとだけ言い、水織たちに背を向けて歩きだした。

「……なあ、ここは何なんだ？ 地底世界、なんだよな？」

「そつよ。そしてここは地底の都。旧都と呼ばれることが多いわ」

水織の質問に、淡々と答える少女。

橋を越え旧都の内部に入る。都と言うだけあって活気づいた声があちらこちらから聞こえてくる。

こっそり、視線を動かしてみる。

活気に溢れていいのだが、その全員が人外で居心地はお世辞にもいいとはいえなかった。

人生に絶望したのか路地に座り込む妖怪。今日の獲物でも見つけたかのように爛々と瞳を輝かせる図体の大きい人のような形をした者。

スラム、とまではいかないがパツと見あまり治安はよろしくなさそうだ。

「……幻想郷つてのはよくわからねえな」

地の底にまで蔓延る妖怪。

だが、どうして彼らは外に出ないのだろうか。

ここにいるのは頑強な妖怪たちと、例外はあるがどう見ても凶暴そうだ。

睨みこそしてくるが、皆一様にこちらに襲いかかってくる様子はない。

夜ではないからか？

でも地底に夜も何もあるのだろうか。……頭が混乱してきそうだ。思考を止めて前に向き直ると、赤い提灯を吊るした一軒家が見えてきた。と同時に香ばしい匂いまで漂ってくる。

何を焼いているのかはわからないが美味しそうな匂いだ。

「勇儀、いるかしら？」

ガラガラと店の引き戸を開けた瞬間、強烈なアルコールの香りがむわっと広がり思わず水織は顔をしかめる。

未成年にはキツ過ぎるほど強烈なアルコール臭は飲んでもいない

のに体がふらつきそうだ。

「お、パルスイじゃないか。橋の守護はどうしたんだよ？」

「今少しだけ休んでいるわ。外の世界からの珍客のせいで、ね」

「ああ？」

少女と誰かの話し声がこちらにまで聞こえてくる。

彼女、パルスイと言っらしい。

そういえば名乗ってもいないし名前を聞いてもいなかったな。

店の前で棒立ちしていると、暖簾の向こうから腕だけにゆつと出てきて指がちょいちょいと動いた。

こちらに來い、と言っことらしい。

「……でもよ、未成年がそっいう店に入るってのは」

「いいからホラ！ さっさと入る」

「お、押すなよ穰子」

当たり前ですが、お酒は二十歳から。

もちろんお店に行くのもダメです。ゼツタイ。

くたびれた暖簾を押し退けて店に入るとアルコールの匂いが数段強くなった。

心無し視界がぐにやりと揺れる。

マズイ。飲んでもいないのに二日酔いになりそうだ。

「う……く、ッ」

あまりに匂いが強過ぎるせいか、それとも水織に耐性がないのか、或いは両方なのか。

水織の視界が、まるで天地が逆転するかのようにくにやりと歪み

立っているのでさえ覚束なくなり　トン、と誰かの腕が水織を抱きとめた。

「お、おいおい。大丈夫かお前？　待つてな。今冷たい水でも用意してやつから」

霞む視界の向こうで声だけが聞こえる。

この声は……穰子か、それとも静葉？　さっきの少女？　まるで思考が定まらない。

次いでタタタ、と足早に駆け寄る足音。そして大きく振りかぶる謎の人影。

……おかしい。

さっきの声は、冷たい水を持ってきてくれると言って　バシヤーンッ！

「うおおあああ！？　つ、冷たあああ！？」

突然顔面に冷水を叩きつけられ、水織の体が否が応にも飛び上がる。

二日酔い（？）は確実に醒めたがおかげで全身がびしょ濡れ。

「だ、誰だ！　冷たい水を寄越すんじゃないやなくてぶっかけたアホは！？」

冷水で冷えた体を烈火の如く燃え上がらせると、視線をあちこちに動かしてこんなバカげたことを仕出かした犯人を探す。

店には苦笑するパルスィと、おろおろと狼狽える静葉と穰子、それから……

「せっかく助けてやったつてのに、開口一番アホ呼ばわりかい？

最近の人間ってのは礼儀つてのを知らないみたいだねえ」

カウンター席の椅子で器用に胡坐をかく、朱色の杯を手にした少女の姿。

その隣には恐らく冷水の入っていたと思われるバケツが無造作に転がっていた。

犯人は間違いなく、ヤツ。

「だ、誰だよお前は……ッ！」

少女が振り返り、そして水織は驚愕の表情を浮かべた。

額に一角を生やしたその少女の姿は、まさしく伝承や御伽噺の鬼そのもの。

……いや、そんなことはどうでもいい。

水織が最も驚いたのは、その鬼が金棒を持っていないだとか、トラ柄パンツに晒を巻いていないからでもない。

ただ、単純に。

「……綺麗だ」

「あ？」

彼女が綺麗だったから。その一言に尽きる。

流れるように華麗なスタイルには無駄がなく、洗練されつつも女性らしさを損なわない見事なまでのプロポーション。

水織の頭の中で踊っていた筋骨隆々の鬼のイメージが一瞬で塗りかえられ、そして同時に今しがた吐いた暴言の数々を思い出し、すぐさま無礼を詫びなくてはとババツと土下座の構えを取った。

その間僅か0.05秒ほど。

驚くべきことに、あの宇宙刑事が蒸着するのと同じ速さである。

「す、すみません！ あの、助けていただき、ありがとございませ
すッ！」

「ハハ。今度は打って変わって平謝りか。面白いねえ」

カツカと笑いながら杯の酒を豪快に、一息で飲み干す。

体操着みたいに真っ白な服に、見たこともないような不思議な生
地のスカート。

腕には何故か鎖のようなものが付いている。恐らくアクセサリー
か何かの類。少なくとも水織はそう判断した。

「あの！ オレ草津水織って言います！ それで、こっちは」

「言われなくてもわかるさ。秋を司る姉妹神だろ」

静葉と穰子が無言で頷く。

何故わかったのだろうか。それは彼女が“鬼”だからなのか。
杯をカウンターに下げ水織を見据える一角の少女はニツと白い歯
を見せた。

「山の四天王が一人、ほしくまゆつぎ星熊勇儀。鬼の秘湯を探してるとか言ってた
ね。おほおほ遙々外の世界からここまで来たんだ。特別に教えてあげやって
もいいよ」

「ほ、ホントですか!？」

「但し」

勇儀と名乗った美女はグツと拳を握りしめ正拳を打ち、水織の顔
面で寸止めする。

凄まじい拳圧と風が襲いかかり一瞬後ろに倒れそうになるがどう
にか踏ん張って堪える。

「ぐ……っッ」

「弱い人間にや興味がないんだ。ここは一つ、私と勝負といこうじゃないか」

「勝負……？」

負ける気など更々ない。そんな余裕たっぷりの笑みを浮かべ勇儀が指を立てた。

「もちろん決まってるだろう？ 弾幕勝負さ」

第十四話 姐御肌な鬼娘（後書き）

勇儀のキャラが安定しないので、最近地霊殿をちょこちょこやっています。

ううん……イージーでもお燐までが限界だなあ；

そしてお気に入りにユーザ減っちゃったい；

でも、へいき、へっちゃら！

……ぐすん。

次回更新は11月6日。

時間はいつもの通りです。

では、また次回。

第十五話 怪力乱神

弾幕勝負のため、水織たちは旧都から東に抜けた先にある荒野に場所を移した。

勇儀は酒場を出てからやる気満々のようで、先ほどから柔軟体操をしたり、腕をバキバキならしたり、近くの大岩を素手で軽く砕いてみせた。

……その剛腕、女とはいえ流石は鬼と言ったところか。

エネルギーシユかつアクティブ。

煌めく汗は勇儀の周囲で弾け、彼女を引き立てるかのように輝いては消える。

元の世界にいたら間違いなく運動部、出来れば陸上部あたりが望ましい。

真っ白な体操服がよく似合いそうで、濡れた上着が彼女の引き締まったボディラインをくつきり余すところなくさらけ出し、「先輩、タオルつす！」とか言っただけでタオルを渡せば、ちよつと照れ臭そうに頬を染めながら「ありがとよ」とぶつきらぼつに返す先輩的な……いかにいかんダメだダメだ、惚れる。

と、水織の脳内はピンク色の青春真っ盛り。何と場違いなことだろうか。

「さて、早速始めようじゃないか」

「あ……いや、でもオレは何の能力も持ってないし」

「ああ？ 何寝ぼけたこと言っただけのさ。私が戦いたいのは」

そつち、勇儀に指を差されたのは秋姉妹。

突然の指名に静葉は一瞬ポカンと呆けて、穰子はぎゅつとその表情を強ばらせた。

「え、えつと……わ、私たちじゃお話にならないよう……な……？」
「いいじゃないか。私としては、今ここで神様と戦えるっていう千載一遇のチャンスが無駄にしたいくないのさ。アンタらが勝てば秘湯を教えるよ」

「もし、負けたら……？」
「そういうのは後で考えりゃいい」

姉妹は一度顔を見合わせた後、頷く。

水織では弾幕勝負は出来ないし、指名を受けているのは私たち。逃げるなんて無様な真似は出来ない。

水織の前なら、尚更だ。

「わ、わかつたわ。じゃあ、私から戦う」

「そこなくつちゃ。ほら来なよ」

指先で軽く挑発。

穰子は一度大きく息を吸って心を落ち着かせると、ポケットから薄いオレンジ色の術符を取り出し握りしめる。

勇儀は杯を手にしたまま笑みを浮かべてこちらを見据えている。

警戒しているのか、それとも余裕なのか……恐らく後者だろうけど、こちらとしても迂闊に動くのは好ましくない。

まずはけん制して様子を見る。

「……ッ！」

予備動作を見せず、穰子は術符を握りしめていない方の手を薙ぐと勇儀に向けて複数の光弾を放った。

緩やかな放物線を描くそれは、しかし相当なスピードで襲いかかり、勇儀を一瞬にして光の中へ消し去ってしまう。

だが相手は妖怪、ましてや鬼。

これしきのけん制攻撃程度では効き目など微塵もないだろう。

「遠慮なんか要らないよ。最初から本気でかかっておいで」

白煙の向こうから聞こえる勇儀の声。

案の定彼女に傷を与えることは出来ず、穰子は小さく唸った。

動じないということは、この程度の弾幕では意味を成さないという事。

なら、単純に威力を上げればいい。

握りしめた術符を構え詠唱する。

穰子の符が鮮やかな光に包まれると、パチン、と弾けるような音と共に彼女の周囲に光弾の群れが出来上がる。

「秋符『オータムスカイ』」

穰子の周りで群れを成していた光弾が一度大きく広がると、彼女を中心に大きく円を描くようにして展開される。

その光景を遠目で見つめる水織は、目の前で起きていることが本当に現実なのかと再び思った。

「ゲームの魔法みたいだ。あれが、弾幕勝負ってヤツなんだよな？」

何となしに隣にいたパルスィに訊ねると、緑色の目が少し細くなっていた。

「……そうよ。ルールに則った正当な決闘。それが弾幕勝負よ」

「ルールってのは？」

「細かなルールは端折るけど、簡単に言えば、妖怪が異変を起こせるように、人がその異変を解決できるように、人と妖怪との実力差を無くすため、決闘よ美しくあれ、と言ったところ」

「妖怪が異変を起こせるようにって、妙に物騒なルールだな」

「いつそそんなルール無い方がいいのでは？」

しかし、パルスィは首を振った。

「妖怪は元来、力を競いたがる種。常に他者と競い合い力を高めたりすることが常なのだけれど、ここは幻想郷。とても小さな世界なの。だから妖怪の小競り合いが影響でバランスを崩し、崩壊に繋がるかもしれない。それを防ぐためにこのルールがあるの」

「よくわかったような、わからないような……」

「端的に言えば、この世界で勝ち負けを決める程度のルール。その程度で覚えてくれれば結構よ」

「ふうむ……」

そうこう話しているうちにも穰子と勇儀は戦闘を続けている。

穰子は創った光弾を放ち、勇儀はそれを避け、往なし、かわ躲し、それはさながら舞踏のよう。

そして弾幕勝負を知らない水織の目から見ても、勇儀がかなり強いということだけはわかった。

かれこれ数十分。

穰子が肩で息をしているのに対し、勇儀の方はちっとも乱れず威風堂々と胸を張って仁王立ちしている。

……あの膨らみはDだな。間違いない。

「どうしたどうした。最近の神様ってのはそんなに弱っちいのかい？」

「く、う……」

こちらが一方的に攻撃しているというのに情けない。

「だ、だったらこつちで！」

ポケットから別の術符を取り出し構え投げる。
符が弾け、先ほどと同じような光の弾が連なり飛んで行く　が、
全て彼女の拳によって弾かれ消え失せる。

穰子は齒噛みする。

いくら相手が山の四天王とはいえ、私だって一柱の神なのだ。
それなのに自分の攻撃がいと容易くかき消されてしまう。
実力差なのだろうか。自分の力が妖怪に劣るだなんて、出来れば
認めたくない。

「おいおい。それで本気なのかい？　期待外れも甚だしいね……」
「ま、まだこれからだよ！　私は、まだ本気をこれぽっちも出して
ない！」

「へえ……そうかい」

刹那、勇儀の姿が目の前から姿を消える。

慌てて視線を動かした直後、ドン！　と地響きのような音と共に
穰子の懐で不敵に微笑む勇儀の面が見えた。

「『大江山嵐』」

「あうツ！？」

気づいた時には既に遅く、穰子は勇儀の光弾を下腹部に直撃し、
凄まじい勢いで遙か後方へと吹き飛ばされてしまった。
傍観していた水織の顔が瞬時に凍りつく。

「……お、おい！？　穰子！？　おいツ！？」

無我夢中で地面を蹴って穰子の元へと急ぐ。

水織が体を抱きかかえると、穰子は小さく息を吐き出し薄っすらと目を開けた。

「あ、あはは……ま、負けちゃったや。ごめんね」

「しっかりしろって！ お前、骨が折れたりしてるんじゃない……ッ」

「だ、大丈夫だよ。そこまで私は弱くないもの。それに勝負って言っても、私たちにとっては遊びみたいなものだし」

「遊び……!?!?」

かすれるほど小さな穰子の言葉が、信じられない。

どう見たって痛そうで、苦しそうで、今の穰子の顔は見るに堪えないほど衰弱している。

「……ん。ちつと加減を間違えたかね。でも、ひとまず私の勝ちだ」

杯の酒を一気に飲み干し、次いで別の酒を注ぐと右手でまたこちらを挑発する。

「困ったなあ……これじゃ、水織の探してた温泉の手がかりが手に入らないね……イテテ」

「穰子？ 動くなつて。まだ体が……」

「平気。これぐらいすぐに治せるよ」

水織の腕の中、穰子がゆっくりと目を閉じ息を整える。

そして何か呪いのような言葉をつぶやくと彼女の体がうっすらと温かな輝きに包まれていく。

すると、彼女の顔色が少しずつ回復し、やがて水織の腕を抜けてひよいと軽く立ち上がってみせた。

「ほらね。それに、このルールで致命傷を受けることはないからそ

「ここまで心配してくれなくてもいいんだよ」

「そ、そう……なのか」

何だか大袈裟に心配して損したような、恥ずかしくないような。それで他の二人も平然としていたのか。余計に恥ずかしい。

「……今度は、私がお相手します！」

「さあて、どれほどのものか……期待してもいいんだよね？」

睨みあう少女と美女。

先に動いたのは静葉だった。

「枯道『ロストウィンドロウ』」

オレンジ色の術符を千切り、静葉の足元から幾千の光弾が舞い上がり列を成すようにして勇儀に襲いかかる。

それはまるで、街道を吹き抜ける風に踊る枯れ葉のように、優雅で気まぐれで。

弾幕はやや不安定な軌道を描きながら勇儀の真正面へと突っ込んでいく。

穰子の攻撃よりも遥かに強力で、盛大な爆音と砂煙が舞い踊る。

「す、すげえ……！」

「お姉ちゃん、気合い入ってるなあ……」

次いで静葉は砂煙の向こう側に向けて別の術符を放ち追い打ちする。

満足に見えない視界の向こうから襲いかかってくる攻撃には、流石の勇儀でも避けるのは厳しいはず。

このまま弾幕を張り続けていれば、流石の彼女と言えど苦戦を強

いられるはず。

「秋符『フォーリンブラスト』」

「はッ、威勢がいいのは大いに結構！ でもちよいと力み過ぎやしないかい！」

白煙の向こうから弾丸のような勢いで勇儀が踊りかかる。

その手には杯と、巨大な光。

静葉が見上げると、勇儀が手にした光を叩きつけるのと、それはほぼ同タイミング。

轟音、そして小さな叫び声。

穰子が吹き飛ばされたのと同じようにして静葉が白煙の向こうから飛び出していった。

「し、静葉!？」

「お姉ちゃん！」

まさしく勇儀は鬼のような強さだった。

鬼神、と言っても差し支えないのかもしれない。

これで彼女たちは“遊び”と言うのだから水織には信じられない。

……こんな危険な遊びがあつて堪るか。

「い、いたたた……」

「かーッ、弱い！ 前に戦った巫女や人間の方がよっぽど強いよ。

そんなんじゃないじゃないか」

「く、悔しいなあ……もう！」

傷付いた静葉が怒りに頬を紅潮させながら立ち上がりまたしても別の符を取り出し弾幕攻撃を行う。

杯を手に、勇儀はそうこなくつちゃ、と小さく舌舐めずり。

高速で放たれる光弾をひよひよいと軽く避けてみせ、そして静葉の目前に立つ。

「あ……」

「まあ、残念だけど今回は私の勝ちってことで」

右拳に集まる光の塊。

静葉は足がすくんでしまっただけ何も出来ず、ただ呆然と勇儀の顔を見上げていた。

「いいよねッ！」

「ひッ　　！？」

あまりの恐怖にギュッと瞳を強く閉じ、力無くその場にしゃがみ込む。

情けない。

私は、こんなにも弱い神様なのか。

一人の人間の男の子の力にも、なれないような情けない神様なのか。

迫りくる拳は、こんな自分に相応しい痛みなんだ。

覚悟を決めた静葉だが、しかし何時まで経っても勇儀の攻撃が来ない。

何が、あったのだろうか。

恐る恐る、静葉が瞳を開けてみると静葉の前に誰かが立ちただかっっていた。

「……乱入者ってかい。なかなか味な真似をするじゃないか」
「え……」

静葉の前に立つ、小さな影。

影は先端の尖った長い棒のようなもので静葉をかばい、勇儀の右拳を受け止めていた。
小さな影が言った。

「……こ、この勝負、オレが預かった！」
「み、水織君……！？」

勇儀の腕を退け、スコップを構えたのは水織だった。
とてつもない衝撃で、腕がビリビリして涙目だが、幸いにも声が震えることがなかった。
少しは、様になっただろうか。

「この世界のこと、弾幕勝負ってのはよくわからないけどさ」
「……？」

静葉にだけ聞こえるような音量で水織が呟く。

「やっぱり、女の子が傷付くのはよくない。女の子ってのは、笑顔でなきゃいけないんだ」

水織はシャベルを構え直し、切っ先を勇儀へと向ける。

「……だから、静葉と穰子の代わりに、オレが戦う」

足、腕、心………言ってしまうえば、水織の全身全霊は震え今すぐにも逃げ出したい。

だけど、目の前で女の子が傷付いているのは、どんな理由であれ見過ごせない。

それが例え遊びでも、だ。

「それに……………前にも、こんなことがあった気がする。だから」「え…………？」

水織の言葉に、静葉が首を傾げる。

だから、の先は何と言ったのだろう。

訊ねようとして、しかし水織の背中では気づけばどんどん遠ざかっていってしまった。

「だから、今度は逃げない」

こんなスコップ風情で、こんなちっぽけなオレで、何が出来るのかはわからない。

だけど、もう逃げちゃいけない。

どうしてそんなことを、今になって強く意識したのか……………理由は一切わからない。

とりあえず今は、二人に代わって勝たなくてはいけない。

意を決し、水織は全速力で駆け出した。

第十五話 怪力乱神（後書き）

ついさつき出来たばかりのお話ですッ！

調整に時間がかかったちゃって遅れてしまい、申し訳ないです；
今日は誤字脱字が酷いかも……ガクブル

そして、夜斗の書く弾幕勝負は、弾幕勝負にあらず。

……ダメじゃん；

勇儀の口ぶりが、何故か小町と同じような言い回しで少し引っ掛か
っております。

……とまあ、色々とすみません；

こんなんだから原作知らないだろとか突っ込まれるんだよなあ……
シクシク

第十六話 スコップ無双、誕生

「この勝負、オレが預かった！」

大見得切って勇儀と静葉の間に割り込んだ水織だったが、正直勝てる見込みなどまるで無かった。

それもそのはず、水織はもちろん弾幕使うこともできなければ能力も無いし、そもそも戦う術を知らない。

喧嘩とは違う、これは曲りなりにも決闘。

……というか、そんな決闘に単身スコップ片手に割り込んでしまったが、ルールの的に大丈夫だろうか。

水織の突然の乱入に勇儀は一瞬眉根を上げたが、やがて少し不満そうな表情で水織を見た。

「けど、お前は只の人間ただだろう？ 何の能力ちからもない人間なんぞ相手にしても楽しめるとは思えないんだけどねえ……」

「そ、それは……」

今の勇儀が求めているのは強者であって、ただの凡人や弱者を求めているのではない。

乱入してから後悔したが、よくよく考えれば水織のような一般人と戦ってくれる可能性はほぼ皆無ではないか。

困惑する水織に、しかし勇儀は意外なことにある条件を提案した。

「……相分かった。それじゃちよいとルール変更としようじゃないか」

「ルール変更？」

勇儀は手にした杯を一度飲み干し空にして新しい酒を注ぐと、杯

を水織に示しながら言った。

「この杯の酒、お前が私を攻撃して一滴でも零してごらんよ。そうすればお前の勝ちだ」

「……わ、わかった。それぐらいなら、オレでも出来る」

かもしれない、という後ろ向きな言葉は口の中で飲みこむとスコップを握り直し構える。

しかし、いくら静葉や穰子の代わりに戦うとはいえ女の人、しかも美女に対して攻撃を振るうことになるなど誰が予想したか。

だからと言って逃げるわけにもいかないし、ここは覚悟を決めて戦うしかない。

……爺ちゃん、本当に七代崇ってくれるなよ。

「ッ、うおりゃあああー!!」

スコップを下段に構え勇儀の正面に走り斬りかかるが、何の訓練もない人間の攻撃、ましてや常軌を逸したような存在に容易く届くわけもなく、水織の攻撃は何度も何度も避けられ切っ先が虚しく空を断つ。

「アッハハ。そんな出鱈目な攻撃じゃかすりもしないさ」

「くそッ！　こんの……ッ！」

とにかく杯に一撃当てればそれで終わる。

水織は勢いに体を任せがむしやらにスコップを振り回すが依然として変わらず。

勇儀はほんの僅かに足を動かし、身を振るだけでその攻撃を回避し、やがて突っ込む水織の脚を軽く払った。

「うおわ……だッ!？」

情けなく倒され、成す術なく水織は顔面から地べたに激突。激しい痛みと恥ずかしさ、おまけに怒りも合わせて顔が烈火の如く真っ赤に染まる。

……カッコ悪過ぎる。

女の子の前で、女の子に負ける。

自分がこの世界では、いや、この世界でも無力な存在だと痛感する。

「やっぱり、約束しただけじゃ……意味がないんだ」

「……ああ？」

蚊の鳴くような、本当に小さな水織の呟き。

身体能力の高い勇儀の耳にもそれは届いた。

よるよると覚束ない足取りで立ち上がり、砂埃だらけのジャンパーを脱ぐと腰に袖を撒きつける。

アンダーウェア姿となった水織はもう一度強くスコップを握りしめ直し、勇儀を威圧するかのように睨みつけた。

「……根性はあるみたいだね。それならちったあ楽しめそうだ」

「せえ……のッ!」

低く構え、自分に出せる最大速度で駆ける。

狙うは勇儀の持つ杯ただ一つ。

水織は一心不乱にスコップの切っ先を何度も突き出し、止め処なく連撃を叩きこんでいく。

「……ッ」

勇儀の表情に、ほんの僅かだが焦燥の色が見え始めた。ただの人間と侮っていたはずの水織の攻撃精度が急激に増している。

今まで軽く身を動かす程度で避けられたはずの攻撃が、今は少し余計に動かないといけないほどに、鋭く速くなっている。

この戦いの中で成長した？ ……いや、違う。

今の水織の表情は、成長を確信し猛進していくような戦士の顔ではない。

「何だつてんだ……コイツ」

そして何故か、水織の顔は……酷く、辛そうな顔をしていた。

今にも大粒の涙を零しそうで、泣きだしてしまいそうなその表情は、秋姉妹の代わりに戦うと立ちはだかった時とはまるで別人だった。

何が原因で苦痛に顔を歪めているのかわからないが、その表情は見ているこっちが痛々しく思えるほどだ酷く歪んでいる。

堪らず勇儀が叫ぶ。

「おいおい！ お前、どうしたんだ？ 何でそんな顔して」

「ッ、ああああ！」

「くッ ……！」

切っ先が一閃して勇儀の頬に一瞬触れる。

ギリギリのところ回避したはずなのに、その頬から赤い雫が一筋滴る。

明らかに水織の様子がおかしい。

何かに取りつかれたかのような愚直で戦略の欠片も感じられない無粋な攻撃の数々。

頬の血と同時に汗を拭う。何時の間に汗をかいていたのだろうか。

「……能ある鷹は爪を隠す、ってかい」

緊迫と同時に胸の跳ね馬が昂ぶり踊る。

鬼の性と言うやつは全く空気を読まない。読む気など、更々ないのだ。

強いヤツであれば、事情はどうあれ全力で戦いたい。

勇儀の闘志に火がついた。

こんな面白い人間に遠慮は無用。

勇儀は姿勢を落として構え、真っ向から水織のスコープを手の甲で受け止める。

「結構結構！ 暴れるヤツってのは大好きだ！」

「ぐッ、らああああ！！」

拳に弾かれた勢いを生かし、水織は咄嗟に体を回転させ横薙ぎに払うが、勇儀は後ろに跳躍しこれを回避。と同時に光速の弾幕を放ち反撃。

「ゆ、勇儀さん！？ 水織君は、ただの人間で！」

「あれの何処が普通だい？ アイツは、能力ちからを持っているよ」
「水織が、能力を……！？」

正面から襲いかかる色取り取りの光弾。

水織はスコープで、それを

「はッ、あああッ！」

斬った。

真一文字に切り裂かれた光弾は見事に二つに裂け、水織の背後で

爆ぜた。

静葉も穰子も、その光景に啞然としていた。

「……す、すごい」

「……………水織、君？」

高速で迫りくる光弾を、スコップの先端に器用に当てながら、時には体をかすめることもあったが、水織はどうか勇儀の攻撃を捌いていた。

常人とは思えないその動き。

水織は、何の能力もない普通の少年だったはず。

それなのに何故目の前の水織はあんなにも強いのか。

水織をそこまで強くする能力とは、一体何なのだろうか。

「はっはっは！ いいねえ！ 面白い人間だ！ 気に入った！」

「セッ い！」

豪快に笑いながら、水織の激しい攻撃を受け往なし、勇儀の胸の昂ぶりが最高潮に達していく。

こんな面白い人間は、あの巫女と魔法使い以来じゃないか。

外の世界もまだまだ捨てたもんじゃない。

つつい拳に力が入ってしまい、本気の一撃が地面や周囲の岩壁を容易く壊してしまう。

瞬間、勇儀の攻撃を回避した水織が高く跳躍した。

スコップを下段に据えながら、先端部分を勇儀目がけて突き出しながらの向こう見ずな一撃。

猪突猛進過ぎる攻撃など、避けるのは簡単だ。

一度姿勢を正し水織の攻撃を見据えるとほんの僅かに右足を引き体をずらす。

案の定、水織の攻撃は勇儀を捉えることは出来ず、スコップは勇

儀の足元に深く突き刺さる形となった。

「惜しいね。今一步、速さが足りなかった」

「み、水織君!？」

水織はスコップを握ったまま、何故か顔を上げずに俯くばかり。負けを認め諦めてしまったというのだろうか。

「じゃあ、私の勝ちだ！ 鬼符『怪力 ツ!？」

そこで勇儀の言葉が止まり、静葉も穰子も何事かと視線を向けた。すると何故か、今勇儀の立っている地面が傾斜のキツイ坂道のように斜めに盛り上がっていた。

何が起きたのか。

静葉は次いで水織の方へと視線を向け、そして驚愕した。

「お、お前の仕業か!？」

「ッ、でえやあああ!！」

弓なりに撓るスコップと、体全体でスコップを持ち上げる水織。水織が突き刺したスコップは、まるでスプーンでゼリーを掬すくうかのように、地面を大きく掬い上げていた。

地面が、あんな風に簡単に持ち上がるなど、本来はあり得ない光景。

そしてそれが、水織の能力と気づくのに時間は数秒たりとも要らなかつた。

「うわ、つたたた!？」

何の予兆もなく突然足場が傾けば、よほどのバランス感覚を持つ

者でもないかぎり姿勢を維持するなど無理な話。

そしてそれは鬼であるうとまた同じ。

勇儀は慌てて足を踏ん張りどうにか傾斜に耐えようとしたが、傾斜はどんどん傾いていき、立っているのですら辛くなる。

再び、グググ！ と地面が震え傾斜がさらに傾いていく。

「ッ、らああああああ！！」

水織のスコップが地面から抜け振り上がったところには、傾斜は直角を迎え、もはや立ちはだかる断崖となった。

こうなっては、何人だろうと立っているのは物理的に不可能である。

衝撃で跳ね飛ばされた勇儀はそのまま放り投げられるような形で宙を舞うが、しかし勇儀は諦めなかった。

空中で一度杯を放し、くると体を回転させながら華麗に着地してから杯を受け止めようと手をあげて、目を見開いた。

カン！ と気味の良い音を響かせたと思うと、木製の杯は投げつけられたスコップに貫かれ宙を舞い、そして地面で真っ二つに裂け無残な姿で転がっていた。

水織が、勇儀の着地と同時にスコップを投擲していた。

そのあまりにも突飛な攻撃に誰しもが驚き水織に驚愕の眼差しを送った。

「……や、約束だからな。酒を零したから、オレの、勝ち……うくッ」

「水織君……！！」

駆け出し水織の元へ駆け寄ると、静葉はその体を両手でひしと受け止めた。

「……な、何なんだい。アイツ。どう見たってひよろつとした只の人間のはずなのに」

水織が掬い上げた地面を振り返り、勇儀が声を震わせる。

「地底に、もう一つ大穴が出来上がっちまったじゃないか」

そこにはたった一人の人間が、たった一本のスコップで掘ったとは到底思えない巨大な大穴が、旧都の外れにぽっかりと出来上がっていた。

第十六話 スコップ無双、誕生（後書き）

またまた遅れてしまい、申し訳ない；

ついに解禁、水織君の戦闘シーン！ そして覚醒！ 気絶！；
この一連の流れはもはやテンプレですね。

次回更新は11月12日。

もう少ししたら第二章、終了かな。

それでは、感想ご意見等、お待ちしております。

第十七話 こっそりジェラシー

「う、ううん……？」

頬に伝わる冷たい感触に、水織がうつすらと目を開ける。

目を開けたその先では、静葉と穰子がこちらの顔色を窺うようにして覗きこんでいた。

気がつけば、水織はまた静葉の膝枕の上だった。

「水織、大丈夫なの？」

「はあ？ 大丈夫って……いつツ」

むくつと体を起こし自分の体を確かめる。

腕も動くし足も動くのだが、軽く動かすと鈍い痛みが全身に走る。何故だろうか。というか、オレは今まで何を……！

「そうだ！ 勇儀さんは？ オレ、勇儀さんと戦って、それで……」

「さん付けはしなくていいよ。勇儀でいいさ、水織」

背後から割れた杯を持って勇儀が現れる。

真つ二つに裂けた杯を水織に示してニツと白い歯を見せると、いきなり水織の首に腕を回した。

「へ？ うおわ！？」

「何だい何だい！ そんな強い能力ちからを持つてるってのに出し惜しみするだなんてズルイじゃないか！」

「ゆ、勇儀……痛いし苦しいし、そのむ、むむ……うッ！？」

何の遠慮も無しに勇儀の胸の膨らみが頬に押し当てられ、水織の

全身が炎が迸りそうなほどに火照る。

このままだと戦闘後の痛みで死ぬんじゃないかと、柔らかな胸で圧殺されそうである。

……それはそれで悪くないかもしれない。

「み、水織が苦しんでるじゃないか！ は、早く離れなよッ！」

「おおっと。こいつは失敬失敬。ほれ」

ポイッと軽く放り投げられ、今度は穰子がそれを両手で抱えるようにして受け止める。

「おあだッ!？」

受け止められた瞬間、ゴチン、と鈍い音がした。

何か硬いものにぶつかったかのような鈍痛に水織が顔をしかめる。

「み、水織大丈夫？ 怪我とかさ、ほら、どうか痛いところがあればすぐに言いなよ？」

「お前じゃ、膨らみが足りな」

「うおりゃあああああああ!!」

穰子の見事な巴投げが決まり、満身創痍の水織は再び宙を舞い、どしゃ、と顔面から無様に着地する。

一瞬首が変な方向に曲がったような気がしたが気のせいだろう。

「で、一体何が起こったんだ？ ……いたた」

首の根を摩りながら水織が訊ねると、静葉も穰子も、もちろん勇儀も眉根を寄せ怪訝そうな表情になる。

「ああ？ まさか水織、覚えてないのかい？」
「覚えてないって……………ッ？」

勇儀が指差す方向を見つめ言葉を失う。

地底の世界、この荒野の外れに、いつの間に来上がったのか巨大な大穴がぼつかりと口を開いていた。

まさか戦いの最中に勇儀がやったとしても言うのだろうか。
確かに鬼なら、これぐらい造作もなさそうだが。

「何を勘違いしてるんだい。これはお前がやったんじゃないか」
「……………へ？」

事も無げに勇儀があっけらかんと言い張る。

次いで指を差した方向には、まるで巨大なスコップで大雑把に掘り起こしたかのような土砂が積み重ねられていた。

これを、勇儀は水織がやったのだと平然と言ったのけた。

「……………は、はははは！ ま、まさかあ？ オレが、地面をひっくり返したとも言いたいんですか？ このスコップで？ うっそだあ？」

「ほ、ホントだよ？ あのスコップで、ドーン！ って」
「……………」

静葉の言葉に絶句する水織。

振り返り、半ば放心状態で大穴を見つめる。

あんな巨大な穴をオレが空けた？ こんな何の変哲もないスコップで？ そんなことあるわけがない。

しかし、そんなことあるわけがないのなら、この手に残る不思議な感触は何なのだろうか。

「それが水織の秘めたる能力ちからってヤツなんだろうよ。たまげたもんだ」

「オレの能力……」

自分の中に、そんな得体の知れない能力ちからがあるのかと思うと少しゾツとした。

これじゃまるで、人ではないみたいではないか。

と、水織が呆然自失していると勇儀に肩を叩かれた。

「ほら、ポケツとしてるんじゃないよ。秘湯に用があるんだろう？」

「え？ 秘湯……あ、そうだ」

ここに来たのは噂の鬼の秘湯を探すためだ。

本来の目的を思い出し、水織は立ち上がるとスコップと荷物を拾い上げた。

「ここから少し歩くよ。疲れてるならおぶってやろうか？」

「い、いいよ！ そんなことしなくても」

確かに疲れてはいるが歩けないほどではない。

水織はジャンパーを羽織り直すと、戦闘の疲れを微塵も感じさせないような歩みで進む勇儀を追いかけた。

・
・
・

勇儀を追いかけて十分ほどだろうか。

水織たちが元いた場所からさらに奥へと進んで鍾乳洞に辿り着くと、やがて目の前から白い煙と腐ったゆで卵のような匂いが立ち

込めてきた。

「うう、くっさ……」

「この匂い……硫黄みたいだ」

硫黄は確か、硫化水素が冷え固まったもの、だったような気がする。

火山性のガスには硫化水素や二酸化硫黄が含まれていて、それが地表で冷やされたものが硫黄として出来る。

硫化水素は有毒性のある気体なのだが、勇儀は全然ものともしていないし静葉も穰子も顔をしかめているだけで特に身体に影響は無いらしい。

当然、水織は鬼でもなければ神様でもないわけで、奥へ進むにつれやや気分が悪くなってきた。

「……大丈夫？ 顔色が悪いわよ」

「ちょっと匂いがキツイ。理科の授業とかでも、マスクしてたしな

あ……」

「スカーフ、貸してあげようか？」

「ん、助かる」

パルスィから鶯色のスカーフを借りて口元を覆う。

そのまますすぐ進んでいくとだんだんと蒸し暑くなって、再びジャンパーを脱ぐ羽目になった。

……どうせなら脱いだままで来ればよかった。

腰に結び直してまたしばらく進んでいくと、視線の先に光が見えた。

「ほら、着いたよ」

「うわ……！ こりゃ、すげえッ！」

鍾乳洞の奥に広がる乳白色の世界。

天井に連なる氷柱のような白い石が、まるで豪邸のシャンデリアのような優雅な趣を醸し出し、その広さも秋の湯と同じくらい広々としている。

それは、水織が今まで見たこともないようなロマンチックで幻想的な天然の露天風呂だった。

勇儀がまるで自分の家を自慢でもするかのように胸を張って威張る。

「どうだい。幻想郷中を探し回ったってこんな珍しい温泉はないよ」

「すげえ、すげえよ勇儀！」

「あ、ちよいと待ちな水織！」

水織は臨界点寸前のテンションで勇儀の制止すら無視して飛び出し、目の前の乳白色の温泉に何の躊躇もなく右手を突っ込んだ。

右腕から伝わる、まるで沸騰したお湯のような灼熱の感触に水織は

「あつじゃああああああ！？」

この鍾乳洞が崩れるんじゃないかと言わんばかりの勢いで絶叫した。

右腕をブンブン振り回して強引に冷ましながら、どうにか落ち着きを取り戻す。

「そこは源泉だからただの人間じゃ入るなんて無理だよ。私はよく我慢比べに使ってるけどね」

「熱湯コマーシャルやってる人の気持ちがわかったよ、くそう……ッ」

まだ冷え切らない腕に息を吹きかけていると、勇儀が別の場所を指差した。

たぶん、そっちは常温だから入れるぞ、という意味だろう。

気を取り直して乳白色の湯に、今度は、おっかなびっくりといった感じでゆっくりと手をつ突っ込む。

焼けた肌に染み渡る滑らかな感触。

お湯の温度は四十度辺り、熱過ぎず温過ぎずとちょうどよい温度だ。

乳白色の湯は舐めてみるとかなり酸っぱい。

「……泉質はやっぱり、硫黄泉か。となると、筋肉痛とかには効かないんだよなあ」

「何をぶつぶつ言ってるの？」

「泉質を調べてるんだよ。あの爺ちゃんはぎっくり腰って言ったよな。硫黄泉は神経痛にも効くから、これでも大丈夫……なのかなあ？」

ぎっくり腰って神経痛、なのだろうか。

「水織君、温泉とか詳しいんだ」

隣で水織を眺めていた静葉が感心した様子で呟く。

そんな大層なもんじゃないと水織は首を振った。

「旅館で生活してりゃ嫌でも覚えるのさ。爺ちゃんも、重度の温泉マニアだったし」

「ふうん……」

一応、硫黄泉は飲めば腹痛にも効く……が、これは別に関係ないか。

水織はリュックの中から紫の術符を取り出し、源泉の端にこっそりと張り付けた。

これでもう片方の符を秋の湯に張り付ければ、ここのお湯が使い放題となる。

……何だか卑怯臭いな。

「よし、これでやることは済んだな。勇儀、ありが……ってえ!？」
「うん? どうした水織?」

振り返ると、何故か半裸で勇儀が立っていた。

鍛えられ引き締まった体には晒が巻かれていて、くっきりと流線型のスタイルと豊満な胸が見て取れた。

「い、いやいやいや!?! ああ、な、ななな何で脱いでるんつすか!?!」

「何でつて、入るからに決まってるだろ? お前の世界じゃ服着たまんま入るのかい」

「い、いや入らないけど……ってそうじゃなくて!?!」

水織の前だというのに、当の勇儀は何の遠慮も無しにどんどん脱衣の作業に入る。

上着を捨て袴を脱ぎ、残る一枚布が今! という決定的な瞬間を迎えた途端、水織の視界が突然暗黒の世界に包まれてしまった。

「だ、誰だ!?! 今一番いいところがふあっ!?!」

と同時に頭部に強い衝撃が襲いかかり、水織の意識はそのまま闇の向こう側へと吸い込まれてしまった。

そして意識を失った水織を、静葉が真っ赤な顔で抱え上げると勇儀に大雑把な一礼した。

「じゃ、じゃあ私たちは失礼します！」

「はあ？ せっかくなんだしお前らも入って行って」

「結構ですッ！」

そしてそのまま、水織は姉妹に担がれるような形でその場を後にした。

取り残された勇儀はただ呆然とその後ろ姿を目で追いかけて、やがてふうと小さく息をつき肩をすくめた。

「せっかくここまで来たつてのに入らないで帰って行っちゃったよ。忙しい連中だね」

「私も付き合つて疲れたし、帰ろうかしら」

「なあ、パルスィ。あいつら何で帰っちゃったんだろうな？」

「さあね」

「ううん……」

勇儀は腕を組みしばらく考えたが、結局特に何も思いつかなかつた。

脱ぎ捨てた服をこそごそ漁ると酒の入った瓶とお猪口を取り出し、ついでに何処に入っていたのか朱色の盆を浮かべて酒を注いだ。

「ま、いいや。久々に面白いヤツと戦えたし、満足満足」

上機嫌で酒を飲み始める勇儀を残してパルスィが洞窟を歩きだす。

……実は、静葉と穰子が勇儀の胸に対して嫉妬していたのをパルスィはちゃんと感じ取っていた。原因は言うまでもなく彼だろう。

「人に恋する神様……ね」

恋に嫉妬は付き物。それは至極当然なのだが、しかし何と人間臭い神様だろうか。

「……秋の湯か。私もちょっと行ってみようかな」

その日から、秋の湯のお湯が鬼の秘湯と同じ乳白色になった。

当初は利用客から気味悪がられたのだが、あの老人のぎっくり腰が治ったという噂が広まり、秋の湯は毎晩行列が出来上がるほどの大繁盛となった。

里の住人は皆『秋の神様のご利益だ』と口々に言っている。

本当は鬼の秘湯のお陰なのだが、これは水織と秋姉妹だけの秘密である。

第十七話 こっそりジェラシー（後書き）

お気に入り登録してくださった方々、ありがとうございます。
これにて、第二章終了です。

やっと目覚めた水織君の能力、そしてちょっとパワーアップした秋の湯。

これからどんなお話が繰り広げられるのか、乞うご期待です。

それと途中、水織君が硫黄の匂いが〜と言っていますが、厳密に言えば硫黄は無臭です。

この場合の腐った卵のような匂いというのは硫化水素の匂いです。そこんとこ、ちょっと注意です。

これ書いてると、実際に温泉とか銭湯に行きたくなりますねw
読んでる人も、そう思ったりすることがあるのかな？

感想ご意見、待ってます。

次回はやっぱり三日後、11月15日です。

では、待て次回。

第十八話 夢と、第三の美女

遠くで、女の子の泣き声が聞こえる。

やめて、やめてッ、やめてッ！

声は神社横の、普段物置として使われている蔵の方から聞こえた。水織はすぐさま駆け出し蔵の影からそつと顔だけ覗かせて様子を見ながう。

蔵の前で、少女が少年たちに囲まれていた。

栗色の髪に黒く澄んだ瞳が特徴的な可憐な少女。

彼女は水織にとって、初めて出来た友人と呼べる存在だった。

そんな少女が今、少女よりもずっと背の高い少年たちに囲まれ苛められていた。

栗色の綺麗な髪を引っ張られたり、乱暴に蹴飛ばされたり。

少女は何度も何度もやめてと叫んでいるのに、少年たちは聞く耳を持たず苛めを続けている。

やめろ！ オレの友達に、何をするんだッ！

しかし水織の叫びは誰に届くことなく虚空に響く。

何故か。それは単純に水織が叫んでいないだけだった。

今の叫びは、心の叫び。

何度声に出そうとしても言葉より先に体が震えだし、唇が思うように言うことを聞いてくれない。

心の中では勇気よりも先に恐怖が全てを支配していた。

恐くて、少女の前に姿を見せられない。

今の水織は少女と同じくらいの背丈で腕も小枝のように細く、とても太刀打ちできるような力は持ち合わせていない。

ここで少女の前に出ても、目の前でコテンパンに打ちのめされ逆に惨めな姿を晒してしまうことになる。

そんなこと、絶対に嫌だった。

あの子に、絶対にカツコ悪いと思われてしまう。

それは子供ながらの小さくて身勝手な自尊心。^{プライド}

……そうだ、誰か大人を呼べばいい。

あの子が苛められていると報せ、誰かに助けを求めればいいんだ。それは少女を助けるための名案だった。

いや、違う。

本当はただこの場から早く逃げたかった。

自分ではどうにも出来ない、だから誰かに助けを求める。

それは当然のこと。力のない子供なら、もっと当然のこと。

違うッ！

本当は適当に理由をつけて逃げたかっただけ。

目の前の少女を見捨てて、ひとまず自分の身だけは守ろうという矮小な防衛心。

だから、水織は

・
・
・

「うわあッ!」

体を起こし、気がつくと水織は自室の布団の上だった。

そして、今見ていたものが夢であると気づくのに少々時間がかった。

全身をびっしょりと濡らす汗の感触が気持ち悪くてシャツを脱ぎ

捨てる、朝の冷たい空気に冷やされ体がぶるぶると震えた。
寒さだけの、せいだろうか。

「……何で、この夢………もう、忘れたはずなのに」

もう、九年も前の出来事。

ここ最近はこの夢など存在すら忘れていたはずなのに、何故今になって再びこの夢を見たのだろうか。

思い当たる節など一つもないのだが、もしかしたら能力とやらの目覚めのせいで疲れているのかもしれない。

「疲れ……か。うん、そうだよ。こういう時は風呂でも入ってサッパリすりゃあいいんだ」

カゴに下着を突っ込んで玄関に立ち、ふとあの少女のことを思い出す。

「そういえば、あの子も不思議な“力”を持ってたっけな……」

だが、どんな能力だったかはすぐに思い出せなかった。

水織は足早に男湯に湯を張り、そして誰も見ていないことをいいことに湯船に思いつき飛び込んだ。

・
・
・

「いらっしやいませえ。秋の湯へようこそお」

静葉が入り口でお客様一人一人に丁寧に会釈をしている。

水織たちが地底で秘湯の源泉を繋げてから秋の湯は大繁盛で、それこそ毎晩里中の人々が押し寄せてくるほどだ。

「秘湯の効果つてすごいね。売り上げがウナギ昇りだよ！」

「小さな里だから、口コミの影響が凄いんだろうな。あの爺ちゃんももう医者はいらねえって突っ返したって自慢してた」

「あつははッ。元気なお爺ちゃんだね。あ、いらっしやいませ！」

穰子も静葉に負けじと元気な挨拶でお客さんを迎えている。

来てくれるお客さんも、秋姉妹の姿を見るとみんな両手を合わせて拝み始める始末。

この調子なら、彼女らの求める信仰とやらも徐々に回復していくのではないだろうか。

水織も自分の仕事を思い出してポイラー室に向かおうとした直後、お客さんの中にウサギ耳が揺れているのを見つけた。

どっかで見覚えがあるような……そうだ、確か。

「鈴仙、だっけか」

「あ、水織さん。こんばんは」

以前、ぎっくり腰の老人をなだめようとしていたウサ耳の少女、鈴仙。

確か医者見習いだとか何とか言っていたような気がしたが、今日はあの老人と一緒にではないところを見ると今日は一人で来たということらしい。

まあ、あの老人は医者は突っ返したと言っていたのだから当然か。

「……うん？」

鈴仙の後ろでピンク色のスカートのようなものがはためいている

のを見つけ首を傾げる。
スカートとついでに、彼女と同じような白いウサ耳が見えたよう
な。

「せえい！」

「ひゃあ!？」

威勢のいい掛け声とともに、突如鈴仙の膝がカクンと崩れ前に倒
れかかる。

すると、鈴仙のすぐ後ろで見知らぬ少女がニシシとあくどい笑み
を浮かべていた。

ピンク色のスカートに、鈴仙と同じようなウサギの耳、しかしこ
ちらは少し垂れかかっている。

鈴仙がすぐさま振り返ると、顔を真っ赤に染めて第二のウサ耳少
女を追いかけた。

「こ、こらあ！ また悪戯して！」

「油断してるそっちが悪いんだよ〜ん」

と、文字通り脱兎の如き速度で秋の湯正面をぐるぐると駆けまわ
る。

事情のわからない水織はどうしていいのかわからず、しばし呆然
と立ち尽くしていると少女が水織を盾にするかのようにサツと背後
に回った。

「あ、あのコイツは？」

「てゐ！ いい加減にしてください！」

「いいじゃないか。ちよつとぐらい悪戯したってや」

「てい……?」

それが名前なのだろうか。
水織の背後の少女はケラケラ笑いながら水織に手を差し伸べてきた。

「因幡^{いんぱ}てゐだよ。今日は皆で噂の銭湯とやらに遊びにきたのさ」

「オレは水織……って、皆？ というか鈴仙とか」

「あ、いえ。今日はお師匠様も一緒なんです」

「お師匠様？」

鈴仙が医者見習いだと言ったから、この場合の師匠とはもちろん医者の師匠だろう。

医者と聞くと何となく無骨な中年男性を浮かべてしまったのだが、道の向こうから現れたのは女性だった。

「優曇華^{うとうげ}にてるも少しはしゃぎ過ぎですよ。もう少しゆっくり歩いてちょうだい」

「んな……ッ！」

スラリとした長身と、月明かりに反射する絹糸のような滑らかな銀の髪。

まるで夜空に浮かぶ月のように透き通るように美しい姿は、ある種の女神なのではないかと錯覚してしまうほどに、彼女は綺麗だった。

鈴仙がそんな美女に付き添うようにして水織を示す。

「お師匠様。彼がこの前話した水織君です」

「へえ……彼が」

凜と澄んだ声に水織が一瞬で硬直してしまう。

鈴仙は彼女にいったい何を話したというのだろうか。

まさか老人を無理やり銭湯に入れたことに対し怒っているともいうのだろうか。だとすると、自分は何て無礼なことをしてしまったのだらう。ここは早急に謝ってイメージを回復せねばならない。この瞬間、水織が頭を下げるのに一秒と掛からなかった。

「すみませんッ!」

「は……はあ?」

突然の水織の謝罪を受け、銀髪の美女がやや困惑したような表情になる。

謝罪が足りないのだろうか、水織は今すぐにでも土下座出来るように構えを取って、実行しようとしたところで穰子が顔を覗かせた。

「あれ。水織、何やってんの」

「え、えっと。この前爺ちゃんを無理やり銭湯に入れたことに対しての謝罪を」

「謝罪?」

穰子と、美女までも首を傾げる。

何故そんなことを? と今すぐにでも言葉が出そうな顔をしている。すると鈴仙がコホンと咳払いしてから話に割り込んできた。

「違いますよ。湯治のお話です」

「湯治の?」

すると美女もにこりと微笑み頷くと、凜と澄んだ声音で水織に答える。

「はい。里に新しく湯治場が出来たと聞いたので、ここまでやってきたんですよ」

「湯治場……あいや、ここはただの銭湯なんですけど」
「でも、ここのお湯は神経痛に効くという噂で持ち切りなんですよ？ それこそ、医者がいらないと噂されるぐらいに」
「うぐ……」

鈴仙の顔が、しまったという顔になって慌てて訂正を入れる。

「ち、違いますよ？ お仕事がちよこつと減っちゃったのは事実なんですけど、今日はせっかく出来たのなら私たちも入ってみようって、お師匠様と話してやってきたんです」

「そ、そうなのか。ちよつとドキツとしたじゃないか」

「それにしても、銭湯なんて初めてだから、ちよつと緊張するわね」

美女がシャンプーやら何やら入った桶を抱えながらはにかむ。

いい、すごく。今すぐ一緒にいたいっす。というか彼女らは銭湯初めてなのか。ということは一肌脱がざるを得ない。風呂だけに。

「だ、だったらオレが入り方をお教えしますよ！ もちろん実演しなきゃあああ!？」

鋭いローキックが脇腹を直撃。

もんどり打つ水織を放っておいて、穰子が営業スマイルを作る。
キックボクサーかお前は。

「こ、この馬鹿は放っておいてお入りくださいな。入り方とかマナーとかは、脱衣所の張り紙に書いてありますので」

「ありがとう。だけど、もう少し待っててもいいかしら。まだ二人来ていない人達がいる」

「じ、じゃあ、外で待ってても寒いだけなんで、よかったら中で待ってて、ください……」

息も絶え絶えに水織が告げると彼女らは首肯し、三人で秋の湯の建物の中に入ってしまった。

しかし幻想郷に来てからというものの、どうも欲望が漏れて外に出てしまうのは何故なのだろう。

正直なのは大いに結構なことなのだが流石に外に出てはいかん。

「……水織、お客さんに変態発言してないで二人を迎えに行つてあげたらどう？」

「致命の一撃を浴びせた張本人が言う台詞かよ……仕方ないな」

一瞬ボイラーが気になったが、開店したばかりだしすぐに温度が下がるといふ心配ないだろう。

護身用に以前役に立ったというスコップを抱えながら、水織は鈴仙たちが通っていた西の街道に向けて歩き出した。

第十八話 夢と、第三の美女（後書き）

第三章、始動。

やっぱり永琳の口調が安定しないんで、永夜抄でまた勉強しよう……

それとあんまし関係ないんですが、ちよこつと風邪を引いたみたい？
なので今日はさっさか寝ます。

次回更新は11月18日予定。

では、また次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1252x/>

東方泉遊録 ~ autumn hot spring ! ~

2011年11月17日19時32分発行